国際交流センター・国際部

2017年度　成果報告書

目次

Ⅰ．グローバルパートナーシップ形成

海外訪問

1. 学長・教職員の協定校等訪問 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
2. 日本留学フェア ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

海外からのご訪問

1. 海外の大学からのご訪問 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
2. その他の海外機関等からのご訪問 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

OB ネットワーク整備 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

Ⅱ．学生交流

海外派遣

1. 交換留学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
2. 海外研修プログラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
3. 海外留学フォローアップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
4. トビタテ！留学 JAPAN ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４

海外からの受入れ

1. 日本語・日本文化短期プログラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
2. 学生訪問団の受入れ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
3. 国際ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０

留学生サポート事業

1. 日本語研修コース ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
2. 日本語補講 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５
3. 日本語・日本事情教育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４９
4. 留学生支援・相談・文化交流 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４
5. その他留学生支援のための行事等 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５８

Ⅲ．国際化教育

G-フィロス

1. 交流イベント ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１
2. Student Assistants (SA)の活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６３
3. 英語学習・留学アドバイザーによるサポート ・・・・・・・・・・・・・・６３

医学部キャンパスでの取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５

Ⅳ．地域貢献

留学生の地域との交流 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７０

小・中・高等学校への留学生派遣 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７２

Ⅴ．国際交流関連データ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７４

国際交流センター長挨拶

茅　暁陽（まお しゃおやん）
国際交流センター長・国際部長

本学の第 3 期中期目標中期計画におきましては、アジアをはじめとする諸外国から優秀な留学生がより多く集い、文化や言語、宗教の違いを越えて交流・協働し、国際的な環境で勉学できるようなキャンパス整備を目標に掲げ、協定校との連携の強化や OB ネットワークの整備を通じたグローバルパートナーの形成、キャンパス内における国際交流環境の整備、大学院ダブルディグリープログラムの設置や専門に合わせた海外インターンシップの実施等の教育プログラムの国際化を中期計画に盛り込むことにより、期間中の海外からの留学生受入れ数と本学学生の海外派遣数を対第 2 期最終年度比で各々20%増加させる数値目標が設定されました。

本報告書は、この第 3 期中期目標中期計画の達成に向けて、国際交流センター教員と国際部スタッフが連携して取り組んでまいりました活動内容を、グローバルパートナーシップ形成、学生交流、国際化教育、地域貢献の 4 つのパートに分けて紹介しています。

平成 29 年度は、OB ネットワーク整備の一環として、5 名の OG・OB が現在教員として活躍しているマレーシア国立ペルリス大学と新たに交流協定を締結し、IOT と AI 分野における共同研究に着手しました。また、海外からの留学生受入れと本学学生の海外派遣に関する数値目標達成に向けて、交流協定校の学生を対象とするショートプログラムを充実させ、その規模の一層の拡大を図りました。実際、毎年 7 月に実施してきた 3 週間の夏期日本語・日本文化研修プログラムに加えて、1 月にも日本文化体験と研究交流を組み合わせた１週間の冬期プログラムを実施しました。夏期プログラムの実施に先立ち、参加学生の交流パートナーを学内で募集したところ、60 名以上の在校生からの応募があり、滞在期間中の生活サポートから合同ワークショップの企画実施まで、さまざまな活動を通して留学生との交流を深められただけでなく、日本人としてのアイデンティティの再認識やグローバルマインドの醸成にもつながったのではないかと思います。さらに、夏・冬期の両プログラムに参加した留学生のうち、交換留学生・博士課程学生として各々1 名が本学に入学を果たしただけでなく、交流パートナーを務めた複数の本学学生も海外研修プログラムに参加したことにより、留学生受入れと派遣の長期化に向けた複数の活動の相乗効果を確認できたとともに、本学と地域の広報にも幾ばくかの貢献ができたことを特筆しておきたいと思います。

これらの取り組みが実施できたのも、学長及び国際交流担当理事の強いリーダーシップのもと、国際交流センターの専任･協力教員と国際部国際企画課職員の全員が一丸となって献身的に対応してくださったこと、ならびに各学域や附属施設の多くの教職員の皆様から多大なるご理解とご支援をいただいたお陰です。この場を借りて衷心より御礼申し上げます。

I. グローバルパートナーシップ形成

本学の特色ある様々な研究分野を通して、新たな海外大学との交流が広がりつつあります。国際交流センター・国際部では、新たな交流締結や海外からの訪問者受け入れを通して、山梨大学の更なるグローバル化に向けて、グローバルパートナーシップの形成を推進しています。

海外訪問

１．学長・教職員の協定校等訪問

海外の交流協定校や、新たな協定締結の可能性があるその他の教育機関等を、学長や国際交流センター長と関係する教職員が訪問し、グローバルパートナーシップの強化・拡大に努めています。平成 29 年度の海外訪問について、以下にご報告します。

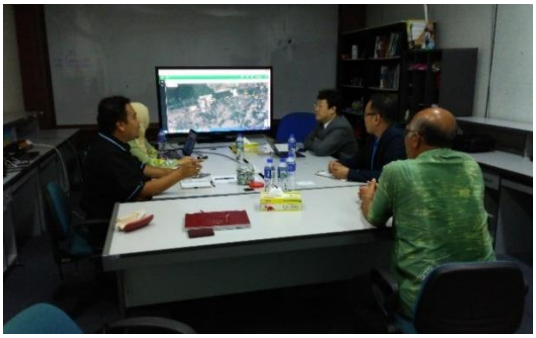
（1）マレーシアペルリス大学：平成 29 年 5 月 16 日（火）～5 月 20 日（土）

茅暁陽 国際交流センター長と、工学部情報メカトロニクス工学科の西崎博光 准教授が、マレーシアペルリス大学（UniMAP）を訪問し、研究に関する打ち合わせと、協定調印を行いました。

大学間交流協定の調印

大学図書館を視察

センサー研究所を視察



共同研究に関する打ち合わせ

（2）リュブリャナ大学／在スロベニア日本国大使館：平成 29 年 9 月 15 日（金）～9 月 21 日（木）

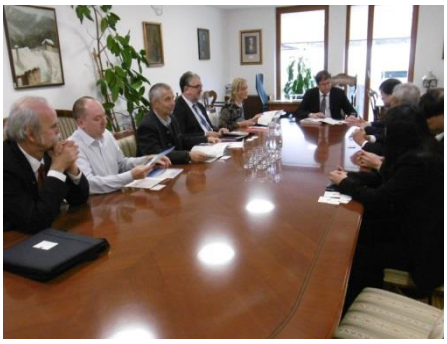
平成 29 年 9 月 18 日（月）、リュブリャナ大学（スロベニア）において、同大と大学間交流協定締結のための調印式が挙行され、リュブリャナ大学からはイワン・スヴェリク 学長、マーティン・コピック 副学長、マリン・ベロヴィッチ 教授、本学からは島田眞路 学長、岩﨑甫 副学長、中尾篤人 医学域長、茅暁陽 国際交流センター長、石井よしみ 国際企画課長が出席しました。リュブリャナ大学とは医学部と生命環境学部を中心として共同研究や学生交流を行う予定です。調印後、18 日午後は医学部、クリニックセンター、翌 19 日はバイオテクノロジー学部、ワイン研究センターを見学し、今後の交流について意見交換しました。

また、19 日に在スロベニア日本国大使館を訪問しました。福田啓二 大使より交流促進のご支援を頂けるとのお言葉を頂き、今後スロベニアとの連携の強化が期待されます。

リュブリャナ大学での調印式

調印のようす

医学部での意見交換



バイオテクノロジー学部での意見交換

スロベニア日本大使館訪問

島田学長と福田大使

（３）台湾訪問：平成 29 年 11 月 1 日（水）～11 月 3 日（金）

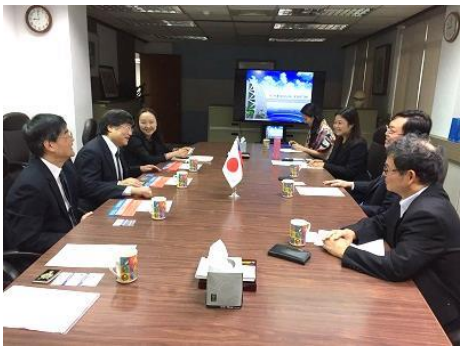
台湾教育部からの招へいを受け、島田眞路 学長、武田正之 理事、内田裕之 クリーンエネルギー研究センター長、茅暁陽 国際交流センター長、石井よしみ 国際企画課長が台湾を訪問しました。今回の訪問は、本学と台湾の大学や研究機関との国際交流強化を目的としたものです。

11 月 1 日に台北栄民総医院と国立陽明大学、翌 2 日は国立台湾大学と元智大学、3 日は国立台湾科技大学を訪問し、双方の大学の紹介と大学間及び部局間の協定締結に向け意見交換をした後、研究施設や病院を視察しました。また、3 日に設けられた台湾教育部主催の昼食会においては、台湾教育部 黄冠超 副参事官及び、輔仁大学と台北医学大学の代表らと今後の学術・学生交流について意見交換をしました。

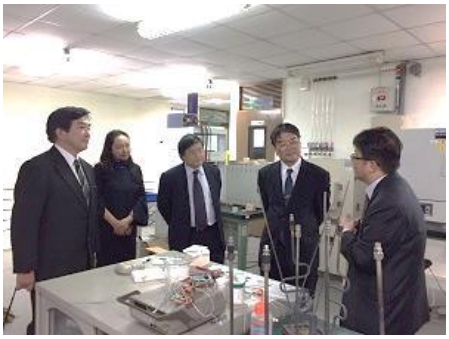
この訪問の後、平成 30 年 2 月には国立台湾科技大学、国立陽明大学と大学間交流協定の締結、台北栄民総醫院と医学域が部局間交流協定を締結に至りました。

台北栄民総医院での意見交換会

国立台湾大学での意見交換会



国立台湾科技大学での意見交換の様子



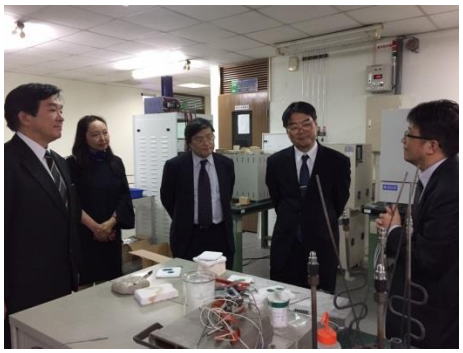
国立台湾科技大学
クリーンエネルギー研究センター視察

国立台湾大学医学部付属医院を訪問

国立台湾大学医学部歴史館を見学

国立陽明大学での打ち合わせ

元智大学での打ち合わせ



元智大学研究施設見学

２．　日本留学フェア

国際交流センター・国際部では、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が実施する「日本留学フェア」に毎年参加して、日本の大学への進学を希望する海外の学生たちに山梨大学の PR を行っています。フェアは日本国内と海外各国で行われており、日本国内では東京で開催されるフェアに参加しているほか、平成 29 年度は、ベトナムとマレーシアの 2 ヶ国の会場に参加しました。以下に、それぞれへの参加について報告します。

（1）ベトナム：平成 29 年 9 月 30 日（土）・10 月 1 日（日）

ベトナムでは、9 月 30 日（土）にホーチミン、10 月 1 日（日）にハノイの 2 会場で開催されました。教職員 2 名とベトナム出身の本学修士学生 1 名が現地に赴いてブースを出し、会場を訪れたベトナムの学生に本学を PR しました。本学生命環境学部・地域社会システム学科の観光政策科学特別コースを目当てにブースを訪れる学生もおり、本学の特色ある学科を PR する良い機会を得ることができました。

また、ホーチミンでの留学フェア前日の 9 月 29 日（金）に、ドンズー日本語学校が開催する「大学説明会」にも参加し、ドンズー日本語学校にて日本語を勉強する学生に向けて、説明を行いました。現在本学に在籍しているベトナム人留学生へのインタビューを撮影した動画を説明材料として用いるなど、工夫を凝らした説明を行い、本学の魅力を PR しました。

ドンズー日本語学校での説明会

ホーチミン会場でのブースの様子

ハノイ会場でのブースの様子

（2）マレーシア：平成 29 年 12 月 2 日（土）・12 月 3 日（日）

マレーシアでの留学フェアは、2 日間ともにクアラルンプールにて行われました。教職員 2 名と、マレーシア出身の本学学部学生 1 名が赴いてブースを出しました。フェア会場には、日本での大学進学を目指す高校生が多く訪れました。日本と異なる教育制度を持つマレーシアの学生たちは、日本の大学進学に至るまでの方法について情報収集する傾向があり、ブースを訪れた学生たちは、本学マレーシア出身留学生の入試に関する経験談などに、熱心に耳を傾けていました。

また、2 日間の留学フェアの後、12 月 4 日（月）に帝京マレーシア日本語学校が開催する「Info day」（大学説明会）にも参加し、本学の PR を行いました。今年度初の試みとして、本学に在学中のマレーシア出身留学生へのインタビュー動画を作成し、全体でのプレゼンテーションの際に説明に用いました。これによって本学に興味を持ったと個別説明のブースを訪れる学生も多く、さらに詳しい個別説明を行う機会を得ることができました。

クアラルンプール会場の様子

ブースにて説明を行う本学教員と学生

帝京マレーシア日本語学校での
ブース個別説明

海外からのご訪問

1. 海外の大学からのご訪問

海外の交流協定校や、協定締結を視野に交流している大学からの、山梨大学への訪問についてご報告します。交流協定校からは、学生交流のプログラム担当教職員が本学を訪れ、さらなるプロモーションに向けた打ち合わせや本学学生へのプログラム説明会などが行われました。また、協定校以外にも本学の特色ある研究に興味を持つ海外の教育機関は多く、今後の協定締結に向けての訪問等がありました。

（1）シドニー工科大学（オーストラリア）教員：平成 29 年 5 月 15 日（月）～16 日（火）

本学の交流協定校のひとつであるシドニー工科大学（UTS）から、日本語教育・留学派遣担当でいらっしゃる尾辻恵美 先生が来学されました。

尾辻先生は、甲府に到着された 15 日（月）に、現在本学に交換留学中の UTS 学生 3 名と市内で会合をもち、翌 16 日（火）に甲府キャンパスを訪問されました。国際交流センター教員との交換留学に関する打ち合わせ後、G-フィロス（グローバル共創学習室）にご案内して、国際交流センターにおける英語学習の取り組みと、UTS からの交換留学生への日本語教育についてご紹介しました。

また、本学学生向けの UTS への交換留学説明会を開催しました。尾辻先生と UTS からの交換留学生にも UTS の魅力を紹介してもらい、留学に興味を持つ本学学生に、交換留学プログラムを PR しました。説明会の後は、図書館で行われているイングリッシュ・カフェで SA（Student Assistants）を勤める UTS 交換留学生の様子を見ていただくこともできました。

プログラム説明会を周知するチラシ

（2）リュブリャナ大学（スロベニア）副学長ご一行：平成 29 年 7 月 5 日（水）～6 日（木）

協定締結に向けて両大学間の相互理解を深めることを目的に、スロベニア共和国リュブリャナ大学から、マーティン・コピック 副学長、デュシャン・シュピート 医学部長、マリン・ベロヴィッチ 化学工学科教授が来学されました。

ご一行は、5 日（水）に医学部キャンパスを訪れて島田学長を表敬訪問し、同大の概要や魅力などを説明されました。また、附属病院内や基礎研究室等を視察後、シュピート医学部長が医学部学生・教職員を対象に「シアノトキシンと健康への影響」について講演されました。

6 日（木）に甲府キャンパスを訪れたご一行は、ワイン科学研究センターと発生工学研究センターを視察後、ベロヴィッチ教授が生命環境学部教員と学生に向けて、「バイオリアクターにおける薬用キノコ栽培と医薬品の進歩」と題して講演されました。またベロヴィッチ教授は、ワイン科学研究センター主催「国際ブドウ・ワインセミナー」の講師として、「ワインテクノロジーとプロセス工学における新しい技術」についても講演されました。

2 日間にわたり、ご一行は本学の特色ある教育・研究に触れられ、各視察先において活発な質疑応答が交わされるなど、本学教職員にとっても非常に有意義な訪問となりました。

大学の概要を説明（右側：同大ご一行）

附属病院で最新鋭の設備を視察

薬理学講座研究室で今後の研究交流について意見交換

シュピート医学部長の講演（医学部）

ベロヴィッチ教授の講演（生命環境学部）

ワイン科学研究センター視察

（3）杭州電子科技大学（中国）副学長ご一行：平成 29 年 8 月 28 日（月）～8 月 30 日（水）

中国・杭州電子科技大学から、胡華 副学長、謝書琴 会計学院院長、周青 管理学院院長、張武標 計処処長、孔万増 計算機学院副院長、範作兵 国際交流処副処長の 6 名が本学を訪問されました。

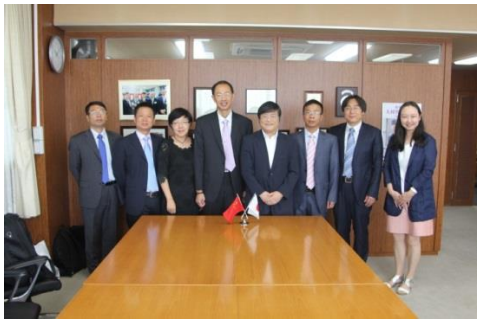
杭州電子科技大学とは平成20年に大学間交流協定を締結しており、これまで短期語学研修プログラムを通した学生相互派遣、教員研修の受け入れなど、様々な交流が行われてきました。平成28年12月に工学域との修士特別教育プログラム、平成29年2月に交換留学についての覚書を交わしています。

今回は、今後のさらなる連携、特に平成30年度よりスタートする大学院修士ダブルディグリープログラムについて意見交換が行われました。御一行は、島田眞路 学長を表敬訪問した後、豊木博泰 工学域長らと大学院修士

ダブルディグリープログラムについて意見交換しました。

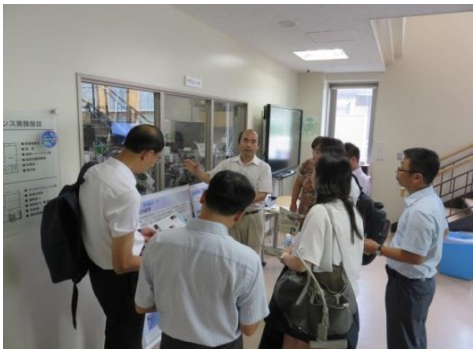
午後からは　発生工学研究センター、燃料電池ナノ材料研究センター、ワイン科学研究センターを見学し、各センター長から説明を受け、山梨大学が誇る研究に強い関心を寄せられていました。

胡副学長からの贈り物を受け取る島田学長



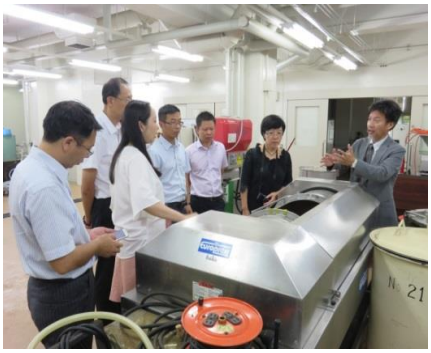
学長表敬訪問

豊木工学域長、大木教授、茅教授、郷教授との意見交換



若山センター長によるご案内で発生工学研究センター視察

飯山センター長によるご案内で燃料電池ナノ材料研究センター視察



奥田センター長によるご案内でワイン科学研究センター視察

（4）パテイン大学（ミャンマー）学長ご一行：平成 29 年 9 月 12 日（火）

ミャンマー・パテイン大学から、ニュン・フェイ　学長らが来学し、本学とパテイン大学との大学間交流協定の調印が行われました。パテイン大学とは、早川正幸　理事／副学長が研究代表者となり、生命環境学域の山村英樹　准教授と乙黒美彩　助教が共同事業として微生物探索を行っており、今後、本学の特色である医工農融合分野における共同研究や学生交流が推進していくことが期待されます。

ご一行は、12 日はワイン科学研究センターを見学後に生命環境学部と研究打合せを行い、翌 13 日に生命環境学域の研究室、国際流域環境研究センター、発生工学研究センターおよびG-フィロス等を視察しました。

フェイ学長（左）と島田学長

両大学関係者記念写真

ワイン科学研究センターでの打合せ

（5）レスター大学（英国）留学受入ご担当者：平成 29 年 10 月 31 日（火）

本学の海外交流協定校のひとつである英国のレスター大学から、海外研修プログラムご担当者のミキ・ワグナー氏が来学されました。これに合わせ、平成 29 年度英国レスター大学海外研修プログラム説明会を開催し、本プログラムや留学に興味を持つ学生向けに、レスター大学プログラムの魅力を担当者から直接お話しいただくという貴重な機会を設けることができました。

説明会周知ポスター

プログラムの説明をするワグナー氏

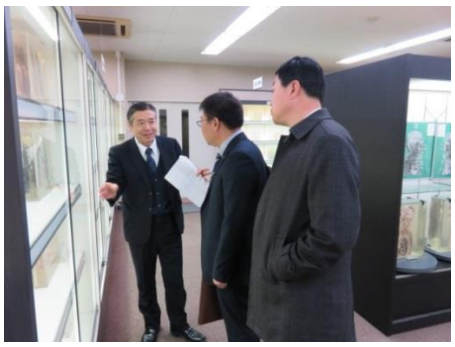
（6）内蒙古医科大学（中国）教員：平成 29 年 11 月 30 日（木）

中国・内蒙古医科大学から、楊学軍 教授、祝勇 准教授および高野博 名誉教授が本学を訪問されました。本学は平成 19 年に内蒙古医科大学の前身である内蒙古医学院と大学間交流協定を締結し、さらに内蒙古医科大学へと名称を変更したことに伴い平成 27 年 9 月 16 日に大学間交流協定を再締結し、これまで医学部を中心に教員と学生交流が行われてきました。

ご一行は、医学部標本館を見学された後、島田学長および中尾医学域長を表敬訪問し、その後、整形外科学講座において、今後の教員・学生交流について意見交換をしました。

学長･医学域長表敬訪問

島田学長より歓迎のご挨拶



北間敏弘 准教授の案内で
医学部標本館をご見学

（7）UPM（ユニバーシティ プトラ マレーシア）教員：平成 29 年 12 月 12 日（火）

ユニバーシティ プトラ マレーシア（UPM）から、2 名の教員が来学され、茅暁陽 国際交流センター長と打ち合わせを行いました。UPM は農学部が主たる学部の一つとなっており、広大な敷地の中に森や農場を持ち、7 つもの学科で特色ある研究が行われています。そのため、本学生命環境学域との学術交流の可能性を視野に入れ、生命環境学域の片岡良太 助教を交えた打ち合わせを行いました。打ち合わせは終始和やかに進み、研究と学生の交流の可能性について活発な意見交換が行われました。

打ち合わせのようす

記念品の交換

（８）西南交通大学（中国）交通運輸及び物流学院副院長ご一行：平成 30 年 1 月 11 月（木）

中国・西南交通大学から、交通運輸及び物流学院のルオ・シア副院長、リー・クォファン 副書記、チョン・ハイシャー海外担当教員、チェン・イェン大学院教務担当教員、ヤン・クン副教授の 5 名が来学されました。同大とは平成 27 年に大学間交流協定を締結しており、学生・教員の相互派遣や共同研究に加え、本学大学院修士課程工学専攻土木環境工学コースとの間でダブルディグリープログラムを実施しています。

ご一行は、豊木博泰 工学域長・鈴木猛康 同学域土木環境工学科長らと、ダブルディグリープログラムの推進について協議を行った後、島田学長を表敬訪問し、今後の一層の交流推進を確認しました。

表敬訪問

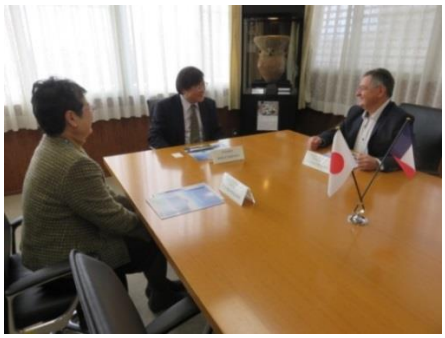
ルオ副院長より記念品を頂戴する島田学長

工学域との意見交換

（９）ポー大学（フランス）教員：平成 30 年 3 月 19 日（月）

フランス・ポー大学物理化学学科長のベニャ・デランジェ 教授が島田眞路 学長を表敬訪問されました。ポー市と甲府市は姉妹都市であり、平成 28 年 2 月に島田学長がポー市を訪問し、市庁舎においてポー市長ベイルー氏同席のもと、ポー大学と共同研究や研究者・学生交流の検討を開始することを双方の学長が合意していることから、大学間交流協定について意見交換しました。

また、デランジェ教授は、本学環境整備工学科（旧工学部）にポスドク研究員として来日していた際、生命環境学域の風間ふたば 教授と交流があり、双方が水に関する研究に関わっていることや開発途上国との関係づくりを進めていることなどから、学生ならびに教員の交流や共同研究の可能性について意見交換しました。



意見交換の様子

左から、風間教授、デランジェ教授、島田学長

２．その他の海外機関等からのご訪問

継続的な交流のある教育機関以外にも、海外の様々な機関から山梨大学への訪問がありました。これら訪問のうち、国際交流センター・国際部が関わったいくつかの訪問について、以下にご報告します。

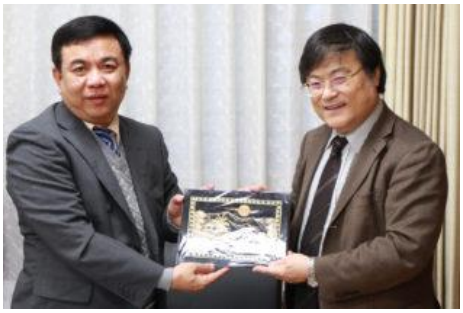
（１）モーニングサイドカレッジ（米国）芸術運営学科との打ち合わせ：平成 29 年 10 月 19 日（木）

米国・モーニングサイドカレッジ教員と、山梨市役所まちづくり政策課ご担当者が来学し、平成 30 年度 5 月に行われる本学との合同コンサートについて打ち合わせが行われました。本学からは茅国際交流センター長と職員２名、本学合唱部学生 2 名が打ち合わせに参加しました。合同コンサートは、モーニングサイドカレッジ合唱部と本学合唱部の合同で行われる予定で、それに併せて同カレッジの農学部学生が 12 名来学し、本学の地域食物科学科・ワイン科学研究センター見学なども併せて行われる予定です。合同コンサートとそれに伴う短期訪問は、平成 30 年 5 月 22 日（火）・23 日（水）の日程で行われる予定です。

（２）ミャンマー教育省評価・監督局長ご一行：平成 30 年 1 月 22 日（月）～24 日（水）

ミャンマー教育省評価・監督局のニュン・フェイ 局長、アウン・スウ・タイ 局次長、タン・ジン・ミヨ 部長、ティン・モー・ハイン副部長の 4 名が来学されました。フェイ局長は、平成 29 年 9 月に本学と大学間交流協定を締結しているミャンマー・パテイン大学の学長を兼務しており、同大とは主に生命環境学域との間で共同研究などの交流が行われています。

ご一行は、22 日（月）に学長室を表敬訪問し、島田眞路 学長ら本学役員と懇談しました。23 日（火）には早川 正幸学術研究担当理事／副学長らと今後の連携に関して意見交換を行い、24 日（水）には本学教育学部附属小学校・中学校を視察するなど、有意義な訪問となりました。



表敬訪問 フェイ学長と島田学長

懇談の様子

附属小学校の視察

（３）スロベニア特命全権大使：平成 30 年 2 月 22 日（木）

福田啓二 在スロベニア日本国大使館特命全権大使が甲府キャンパスで講演し、学生・教職員が拝聴しました。本学は、スロベニアのリュブリャナ大学と、平成 29 年 9 月 18 日（月）に同大学において大学間交流協定を締結し、共同研究や学生交流等を推進しています。その際、島田学長らが在スロベニア日本国大使館を訪れて福田大使と懇談したことをきっかけに、今回、福田大使のご厚意で、本学でご講演いただくこととなりました。

「国際交流と国際協力の目指すものとその態様～スロベニアを事例に～」と題してご講演された福田大使は、スロベニアの地理・歴史や教育・文化等を日本と比較しながら幅広く紹介し、外交官としてのご経験を踏まえ、世界の中での日本の立ち位置を理解し、日本人特有のチームワークと語学力など個々の能力向上を両立させることが必要と述べられました。質疑応答では学生からの質問に対し、示唆に富んだ多くのアドバイスをいただきました。

また講演に先立って、福田大使は燃料電池ナノ材料研究センター及びワイン科学研究センターを視察され、本学の特色ある研究に触れ、日本の科学技術の発展や国立大学の研究力向上の重要性を熱く語られていました。

講演する福田大使

熱心に聞き入る参加者

島田学長ほか役員らと懇談

飯山明裕 燃料電池ナノ材料研究センター長より説明を受ける福田大使

奥田徹 ワイン科学研究センター長より説明を受ける福田大使

OBネットワーク整備

国際交流センターでは、本学を卒業した留学生とのネットワーク形成に向け、留学生同窓会の整備を進めています。平成 29 年度には、在学中の留学生に留学生同窓会への登録を促し、取組を始めた平成 29 年度前期の入学者と、前年度入学者の全 80 名を対象に同窓会への登録を呼びかけ、計 67 名が新たに登録しました。また、平成 29 年度卒業予定の留学生にも登録を呼びかけ、3 月に 12 名の卒業生が同窓会に登録しました。

すでに同窓会に登録している卒業生に対しては、山梨大学とのつながりを維持してもらえるよう、大学広報誌である『Vine』電子版（https://www.yamanashi.ac.jp/wp-content/uploads/2016/01/Vol.31.pdf）や、年末年始の挨拶状をＥメールで送信すると同時に、国際交流センターウェブサイト(http://www.ciee.yamanashi.ac.jp/)にも、E-mail と同様の内容で卒業生へのメッセージを掲載するなどしています。このような海外在住の本学出身留学生とのネットワークを、本学の広報活動、海外での優秀な留学生の獲得に活用したいと考えています。

同窓生宛グリーティングカード（平成 29 年末送信）

II. 学生交流

さまざまな分野で国際的な視野を持って活躍する人材を育成するため、日本人学生の海外派遣や、各国留学生との交流事業に力を入れています。日本人学生の海外留学や海外インターンシップへの関心は年々高まっており、派遣人数も増加傾向にあります。
また、海外派遣だけでなく、留学生受け入れ数のさらなる増加をめざし、学生訪問団の受け入れや、在籍する留学生のサポート事業にも力を注いでいます。

海外派遣

１．　交換留学

平成 29 年度の交換留学派遣は、米国のイースタン・ケンタッキー大学（EKU）に 3 名、オーストラリアのシドニー工科大学（UST）に 1 名の、計 4 名となりました。期間は大学や選択するコースによって異なり、それぞれ約 5～12 ヶ月間となっています。交換留学生は、現地大学での語学授業以外にも学部授業に参加することになるため、募集時点において高いレベルの英語力を要件としています。派遣が決まった学生たちは危機管理教育を含めた事前指導のほかに、自主的な英語学習に熱心に取り組み、十分な事前準備をして出発します。

交換留学プログラムは、派遣学生たちにとって、各々のコミュニケーション能力の向上や専門分野の理解を深めるだけでなく、異文化に対する知見とグローバルに活躍する人材としての国際的感覚を磨く経験となっています。

（1）米国・イースタン・ケンタッキー大学（EKU）派遣：平成 29 年 8 月～平成 30 年 5 月

平成 29 年度末現在の派遣状況として、EKU に派遣された 3 名は平成 29 年 8 月から平成 30 年 5 月までの 9 か月間のコースで学んでいます。

EKU の交換留学プログラムでは、応募資格として、原則、TOEFL-iBT61 点（学内 TOEFL500 点）もしくは IELTS5.0、英検準 1 級以上を要件としています。平成 29 年度時点、交換留学を希望する学生は、応募前から、国際交流センターの英語学習支援等を利用して英語学習に取り組み、要件となる英語力を備えて留学に臨むことになります。交換留学では、山梨大学への通常の授業料納付のみで、EKU への検定料、入学料及び授業料の支払は免除されており、留学先で取得した単位は、教授会等で審査の上、学部学生は 60 単位、大学院学生は 10 単位を超えない範囲内で、山梨大学の単位に振り替えることもできます。

EKU へ派遣された学生たちは、現地の学生たちと同様の科目を履修・受講することになるため、派遣時点においてある程度の英語力を備えていても、やはり最初のうちは授業についていくことに苦労があるようです。今回派遣となった 3 名は、そういった最初の苦しい状況を励まし合って乗り切った様子が、マンスリーレポート（※後述）からうかがえました。

生活面において、基本的には大学の寮での生活となりますが、8 月中に渡米し、9 月にセメスターが始まるまでの間やホリデーの間などは、ホームステイ先での滞在となり、寮生活と一般家庭生活の両面を体験できるようになっています。寮では現地の学生や他国からの留学生と交流を楽しみ、ホームステイ先ではホストファミリーの家庭に快く受け入れられ、派遣された学生たちは、異文化に触れ、生活を楽しみながら、徐々に大学での学習環境にも慣れていくことが出来たようです。

イベントでのパフォーマンス披露

イベント参加時の集合写真

学生寮でのハロウィンパーティー

※マンスリーレポート

交換留学中の学生には、マンスリーレポートの提出を義務付けています。これは、本人の留学生活のふり返りのためでもあり、危機管理上、大学側が留学中の学生の状況を確認するためのものでもあります。レポートの内容によってサポートが必要と感じられる場合には、国際企画課職員が学生本人や留学先大学職員とコンタクトを取り、問題の解決にあたっています。

〈マンスリーレポート実例（平成 29 年度イースタン・ケンタッキー派遣学生・平成 29 年 8 月分）〉

EKU 短期留学マンスリーレポート 2017 年　8 月	氏名
今月の到達目標 ・Arriving at EKU safely. ・Adjusting to life in the U.S. ・Preparing for classes at EKU.	
目標達成の状況 It took a couple of weeks to get used to living in the U.S. During the first week, I couldn't get enough sleep. Eventough I can fall asleep I woke up in the middle of the night because of jetlag as I was trying to adjust to the new time zone. However, with the help of my host family I am now well adjusted to the new environment as they were helping me to their best abilities. I have assimilated in most aspects except my Englsih.I am well aware of my imperfect English . In fact, I couldn't understand what Professers explain in classes.However I am not very worried because the Professors told me that I can ask questions at anytime. Not having a good foundation in Englsih is affecting me at a great extent as I can't communicate with my professor's	
勉学面 I couldn't catch up with the classes because of my English challenges. Also, there are more homeworks than I thought and I spent alomost all my time doing homework. As a result I cant socialize with local students and explore my learning environment	
課外面 I attend the majority of events held by EKU. However, I hardly attend the events hosted by local students,friends and my residence hall as I am busy with school work. In order to have a lot of opportunitiesand involvement I must attend these events and connect with local students.	
生活面 I want to cook something every day, but I can't because of my schoolwork. Recently, I tend to eat instant foods as I habe been having more proteins and vegetables. I have also been working out at the gym to reduce my stress. I have found a workout buddy and I want to keep working out regularly to attain a better health.	
良かった点 ・I have a lot of friends who help me.There names are Mizuho,Jacob and Kin-Yosan. ・EKU is the good place to improve my English because there are only few Asian students, and there is a good support for international students. They provides fun events such as the Louisville World Fest which I will be attending on sepetember 2nd.	
反省点、今後への改善点 ・Having more chances to speak in English. ・Don't be afraid of making mistakes. ・Thinking on how to better manage my time to learn Englsih and connect with local students.	
EKU、または山梨大学への要望があればお書きください。 ・Payment について、何を支払うべきなのかがはっきりしません。Financial office に行くたびに新しく請求されるので困っています。僕の場合、寮費が 4 期分請求されています。	

２．　海外研修プログラム

本学のプログラムとして、交換留学のほか、春季・夏季休暇中の短期語学留学と、語学留学に企業や学校でのインターンシップが加わった海外研修を行っています。本学が提供するプログラムのほか、海外の交流協定校が提供する短期プログラムにも本学学生が参加しています。

（1）　夏季研修プログラム

平成 29 年度の夏季研修プログラムは、米国のイースタン・ケンタッキー大学、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の 2 つの協定校への派遣となりました。それぞれのプログラムについて以下にご報告します。

①　米国・イースタン・ケンタッキー大学　英語・文化研修+海外インターンシップ

日程：平成 29 年 8 月 20 日（日）～9 月 23 日（土）（日本発着日）

本プログラムは、イースタン・ケンタッキー大学（EKU）キャンパスにある ELS Language Center における英語研修と、現地日系企業または教育機関におけるインターンシップを行うものです。平成 29 年度は、10 名の学生を派遣しました。語学研修は 4 週間となっており、インターンシップは語学研修期間中と研修終了後、合わせて計 5 日間、教育インターンシップは現地の学校にて行われ、企業インターンシップは現地の日系企業にて行われました。

参加した学生への研修後のアンケートでは、「正しい文法を考えるよりも実際にコミュニケーションに使える英語を学びたいと考えるようになった」、「自身のキャリア形成の中に海外で働くという選択肢が増えた」などの感想が見られ、英語学習とキャリア形成の両面において、学生の視野が広がり、モチベーションの向上につながる体験となったことがうかがえました。

インターンシップ先でのオリエンテーション

EKU 学生との交流

インターンシップ先企業主催の食事会

②　カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学　English Language Institute 英語研修

日程：平成 29 年 8 月 7 日（月）～8 月 27 日（日）（日本発着日）

本プログラムは、ブリティッシュ・コロンビア大学キャンパスにある ELI（English Language Institute）で開講される「English for the Global Citizen」というコースに参加するものとなっています。平成 29 年度は 17 名の学生を派遣しました。

1 週間授業時間数 26.5 時間のこのコースは、話す力を鍛え、流ちょうな英語を習得することを目指すものです。滞在先はカナダ人家庭でのホームステイとなっており、CA（Cultural Assistant）という現地学生によるサポートもつくため、短期集中的に英語力の向上が期待できるプログラムとなっています。

参加した学生たちからは、「日本に帰国してからもさまざまな立場・文化の人々と交わる機会を持ちたい」、「積極的に留学生と交わっていきたい」といった感想が多く聞かれ、実際に異文化の中に身を置いて生活したことで、自身の文化背景を意識するようになったことがうかがい知れました。また、ホームステイに関する満足度は全体的に高く、現地で語学研修に落ち着いて取り組むことのできる環境が整っていることが確認できました。

ホストファミリーとの交流

CA 企画のシアトルへの旅行

プログラム終了時のパーティーの様子

（2） 春季研修プログラム

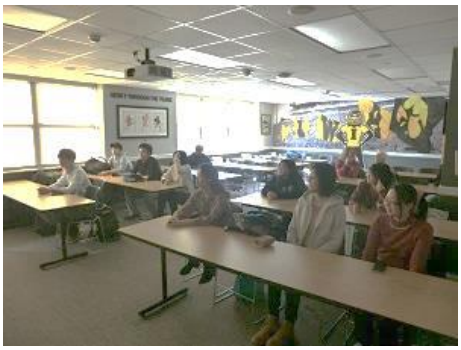
平成 29 年度の春季研修プログラムは、米国のアイオワ大学、英国のレスター大学、中国の杭州電子科技大学と、平成 29 年度に覚書を交わしたばかりの米国ノーザンアイオワ大学の、計 4 大学への派遣となりました。それぞれのプログラムについて、以下にご報告します。

① 米国・アイオワ大学　英語・文化研修+海外インターンシッププログラム

日程：平成 30 年 2 月 4 日（日）～平成 30 年 3 月 4 日（日）（日本発着日）

本プログラムは、アイオワ大学での山梨大学特設クラス「The Iowa Intensive English Program (IIEP)」における 3 週間の語学研修の後、最終週にアメリカ人家庭にホームステイをしながら現地の企業においてそれぞれの専門にあったインターンシップを行うというものです。アイオワ大学での英語・文化研修中は、アイオワ大学学生寮またはゲストハウスに滞在し、アイオワ市周辺へのショート・ツアー等を通して、学んだ英語を実際に使いながら、アメリカ文化を体験することができます。この研修には 10 名の学生を、派遣しました。

参加学生のウィークリーレポートからは、1 週目、現地のネイティブスピーカーの英語を聞き取る難しさに戸惑うと同時に、フレンドリーな接し方に励まされ前向きに英語学習に取り組もうと意欲を持つ学生が多かったことがうかがい知れました。最終週にはホームステイの体験と専攻に合わせたそれぞれのインターンシップ先での体験を楽しむ様子が報告されており、全体的に、アイオワ大学の受入れ体制が非常に整っていること、参加した学生たちが非常に前向きに研修に取り組んだことが確認できました。



アイオワ大学語学研修の教室の様子

語学研修の修了式

インターンシップ先での成果発表

② 英国・レスター大学　春季英語研修

日程：平成 30 年 2 月 11 日（日）～3 月 11 日（日）（日本発着日）

本プログラムは、レスター大学にある English Language Teaching Unit (ELTU)において、英語力とコミ

ュニケーション・スキルの向上を目的とした学習のほか、地域の人々との交流、参加学生と同じ専門を専攻する同大学の学生と意見交換などの交流、近くの学校訪問等の英国文化体験を行います。全日程ホームステイで実施され、イギリスでの家庭生活を体験することができます。また、ロンドン、ストラトフォード、オックスフォード等への日帰り旅行も研修に含まれます。平成 29 年度は 7 名の学生を派遣しました。

参加した学生からは、「ホームステイのため、帰宅後に学校で学んだ英語をアウトプットすることが出来たので英語の上達が実感できた」との感想のほか、「ホストファミリーがホームワークなど英語学習に積極的に関わってくれた」という声も多く、ホームステイへの満足度が非常に高い結果となりました。語学研修の内容は、「プレゼンに重点がおかれていて準備が大変だったものの、グループワークで他大学からの参加者から刺激を受けた」、「コミュニケーション能力が上がったように思う」などの感想が多く、英語力の向上についてはすべての学生が研修後にその実感があったと回答しました。

語学研修講義室のようす

ホストファミリーとの交流

エクスカーション

③ 中国・杭州電子科技大学　中国語・文化研修 + 海外インターンシッププログラム

日程：平成 30 年 3 月 11 日（日）～3 月 25 日（日）（日本発着日）

本プログラムは、交流協定校の一つである杭州電子科技大学において 1 週間の中国語・中国文化研修と、日系企業テルモ杭州工場における 1 週間のインターンシップを行いました。杭州市は近年、アリババなど中国を代表する IT 企業の本拠地としても注目されており、研修先である杭州電子科技大学は、電子情報分野において中国国内で常に高いランキングを有する総合大学です。このプログラムには中国語の学習経験がない学生も参加可能としており、杭州電子科技大学学生との交流や文化体験などのイベントを通して、異文化コミュニケーションを体得します。インターンシップ受け入れ先であるテルモ杭州工場は、もっとも早く中国進出を果たした日本企業の一つであり、日本人スタッフの補助を得ながら、工場の業務を実際に体験することができます。

平成 29 年度は 16 名の学生を派遣しました。参加した学生からは、「語学研修は自由で実践的なスタイルで大変楽しめた」、「他国からの留学生と交流の機会が多く中国語だけではなく英語の勉強にもなった」という感想が多く聞かれました。インターンシップについては、「単純な工場見学のようなものをイメージしていたが、いくつかの部署をひとつずつ見学、丁寧に説明を受けることができ、事前の想像よりも充実していると感じた」という感想が聞かれました。

杭州市にある IT 企業大手「アリババ」見学

研修のようす

インターンシップ

④ 米国・ノーザンアイオワ大学　英語・文化研修＋PBL プログラム

日程：平成 30 年 2 月 4 日（日）～平成 30 年 3 月 4 日（日）（日本発着日）

本プログラムは、国際交流センターが交流協定を締結している米国アイオワ州シダーフォールズにあるノーザンアイオワ大学の The Culture and Intensive English Program (CIEP)における週 20～22 時間の英語レッスンを 4 週間受講する英語研修に加え、各専攻分野の授業参観を行いました。また、周辺地域への小旅行等を通して、学んだ英語を実際に使いながら、アメリカ文化を体験することができました。さらに語学研修第 1 週目の週末にはアメリカ人家庭にホームステイをし、現地の方との交流ができました。このプログラムは今回が初めての実施となり、3 名の学生を派遣しました。

参加学生からは、「現地学生のみではなく、他国からの語学研修参加者との交流ができたことで各国の文化に触れる良い機会となった」、「日本での生活とは異なり全てにおいて自分自身で行動を起こす積極性の必要性を感じた」などの感想や、「世界では現在日本文化の人気が高まっているため、今後は若い世代がさらに自国について学び、広く情報発信をしていくことへの可能性を感じた」との意見がありました。

語学研修の教員・クラスメイトと

修了証書の授与

ホストファミリーとの交流

（３） 四川大学国際交流合宿　（工学部学生対象）：平成 29 年 7 月 2 日（日）～12 日（水）

この合宿は、本学の交流協定校である中国の四川大学が、グローバルな視野を持つ人材を育成する目的で実施しているテーマ別留学生キャンププログラム、「2017 International Students Summer Camp」です。工学部コンピュータ理工学科および情報メカトロニクス工学科の学生が参加しました。キャンプ全体のいくつかのプログラムのうち、四川大学ソフトウェアエンジニアリング学部主催のプログラム「Sparks & Sprout」が平成 29 年 7 月 2 日（日）から 12 日（水）まで開催され、協定校である本学からは情報関連学科の学生が招待されました。コンピュータ理工学科（および大学院コンピュータ理工学コース）から 13 名、情報メカトロニクス工学科（および大学院メカトロニクス工学コース）から 4 名の学生が参加しました。

最先端の研究者による計算幾何学に関する英語での集中講義、ソフトウェア開発会社の見学、研究プロジェクトに関するプレゼンテーション、四川大学の学生と本学の学生との混成グループによるデザインワークショップのほか、中国の文化・歴史に関する体験交流など多彩な内容でした。(※デザインワークショップについては、「国際交流学生ワークショップ」の項で詳しく報告します。)

オープニングセレモニーでの学生挨拶

ソフトウェア開発会社見学

文化体験

デザインワークショップ活動

研究発表会

フィールドトリップ

３．　海外留学フォローアップ

本学のプログラムで留学する学生に対しては、交換留学及び、海外研修プログラムともに、事前指導や帰国報告会などのフォローアップを行っています。インターンシップが含まれる研修に参加する学生に対する事前指導のひとつとして、インターンシップマナー講座も開講しています。以下に、これらの取り組みについて報告します。

（1）　平成 29 年度　交換留学・海外研修プログラム帰国報告会

この報告会への出席・発表は、交換留学・海外研修プログラム共に、本学の交流協定校へ留学をした学生すべてに課しているものです。発表を行う学生は各々に準備したスライド資料を用いて、研修の様子、成果などを報告します。平成 29 年度は、1 回目を 5 月 17 日（水）・5 月 18 日（木）の 2 日間で、2 回目を 11 月 20 日（月）に開催しました。

1 回目では、平成 27 年度に交流協定校への約 1 年間の交換留学を経験した学生 2 名（平成 28 年度帰国）と、平成 28 年度春季研修プログラムに参加した学生 29 名が、それぞれの留学・研修成果について報告しました。

2 回目では、平成 28 年度に交流協定校であるオーストラリア・シドニー工科大学、米国・イースタン・ケンタッキー大学及び英国・オックスフォード・ブルックス大学の 3 大学にそれぞれ交換留学した 3 名の学生と、平成 29 年度夏季研修プログラムに参加した学生 24 名が報告を行いました。

これら報告会は、留学した学生に対して、自身の経験を振り返り、留学・研修の経験が学習意欲やキャリア形成に及ぼした影響を再確認することを期待するとともに、これから留学を考えている学生に対する啓発も兼ねています。実際に、留学を経験した学生たちからの留学先での授業、文化、生活そして職業体験などの報告は、これから留学に臨もうという学生の疑問や不安を解消し、留学への意識を高める良い機会となっています。

堀 国際交流担当理事ご挨拶（5 月）

海外研修プログラム参加学生の発表

オックスフォード・ブルックス大学交換留学派遣学生の発表（11 月）

（2） 海外インターンシップマナー講座

このマナー講座は主に、インターンシップ研修に参加する学生の事前指導の一環として開講しています。平成 29 年度は 8 月 7 日（月）に豊田鉄工株式会社の柴崎康昭氏を、1 月 12 日（金）にテルモ株式会社の西山佳夫氏を講師としてお招きして、2 回開講しました。米国ケンタッキー州にある Toyotetsu America, Inc.は、本学学生の海外インターンシップ研修先となっており、テルモ株式会社は杭州でのインターンシップ受け入れ先となっています。実際に海外勤務を経験された講師による講義は、学生のモチベーションの向上を促すとともに、インターンシップに臨む実際的な準備に非常に役立ったと、毎回好評を得ています。

講師のお話に熱心に聞き入る学生たち

講師の西山 佳夫氏（テルモ株式会社）

学生からのプレゼンテーション

（3） 海外研修プログラム参加学生に対するアンケート

海外研修プログラムに参加する学生を対象に、留学前・留学後のアンケート調査を行っています。異文化交流や語学学習、インターンシップ等の留学体験を通じて学生にどのような変化があるのかを測ると同時に、参加者の声を聞くことによって、次年度以降の海外研修プログラムの充実化を図っています。

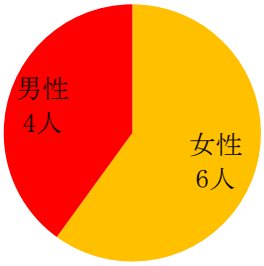
本報告書では、下記 4 つのプログラム参加学生に対するアンケート結果を紹介します。

① 平成 29 年度米国アイオワ大学英語・文化研修＋インターンシッププログラム
② 平成 29 年度中国杭州電子科技大学中国語・文化研修＋海外インターンシッププログラム
③ 平成 29 年度英国レスター大学英語・文化研修プログラム
④ 平成 29 年度米国ノーザン・アイオワ大学英語・文化研修プログラム

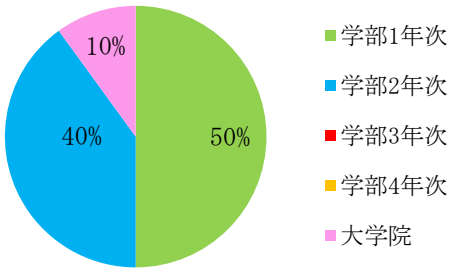
① 平成 29 年度米国アイオワ大学英語・文化研修+海外インターンシッププログラム アンケート結果

＜参加者内訳＞

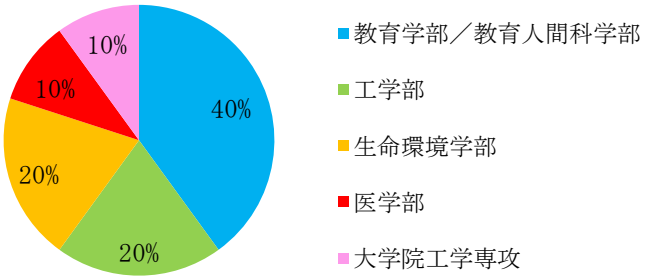
性別



学年

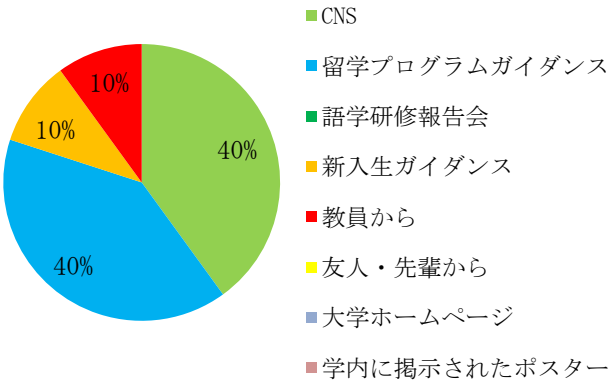


所属

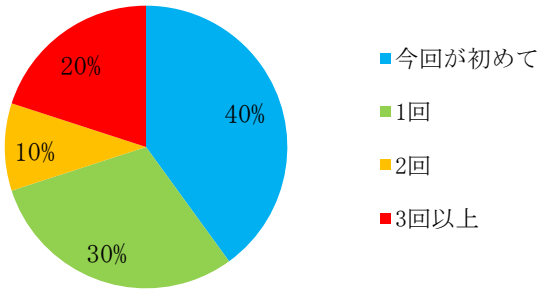


＜各項目回答＞

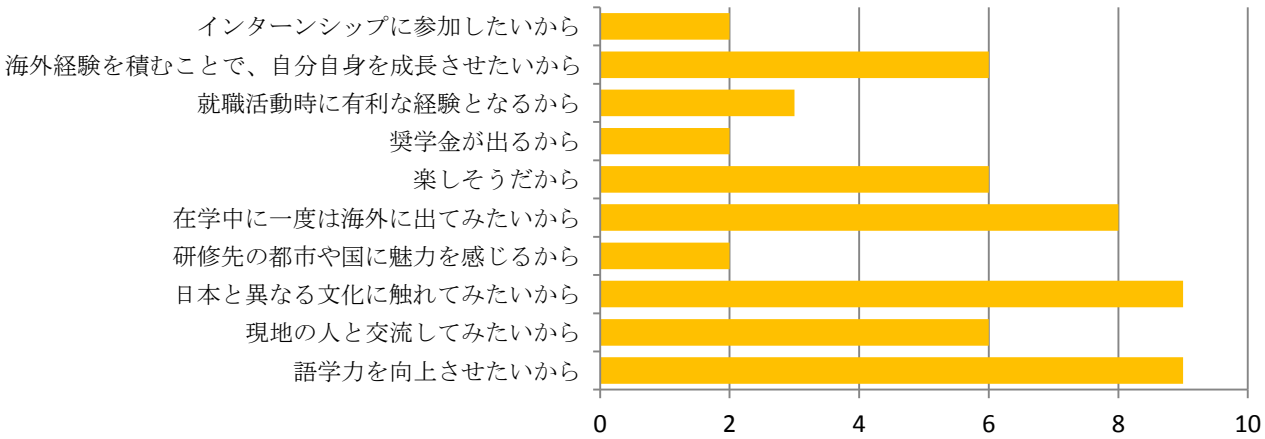
この語学研修を何で知りましたか？



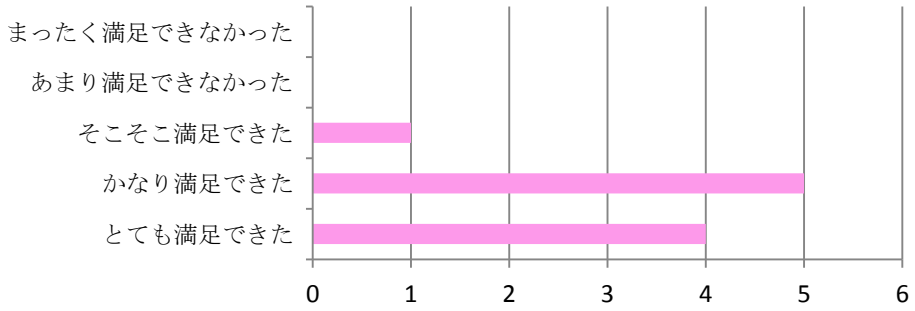
これまでに海外に行ったことはありますか？



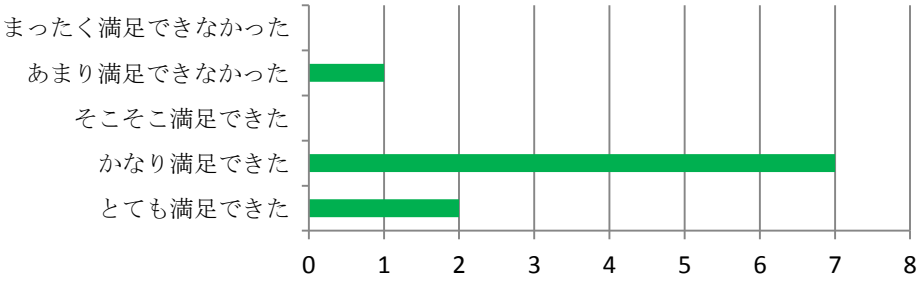
なぜ本研修に参加しようと思いましたか？（複数回答可）



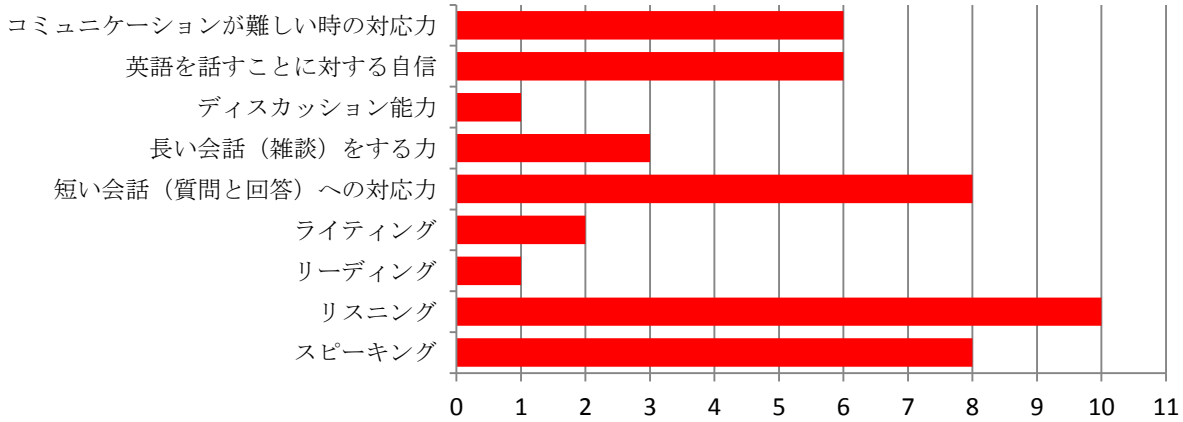
研修プログラムは満足できましたか？



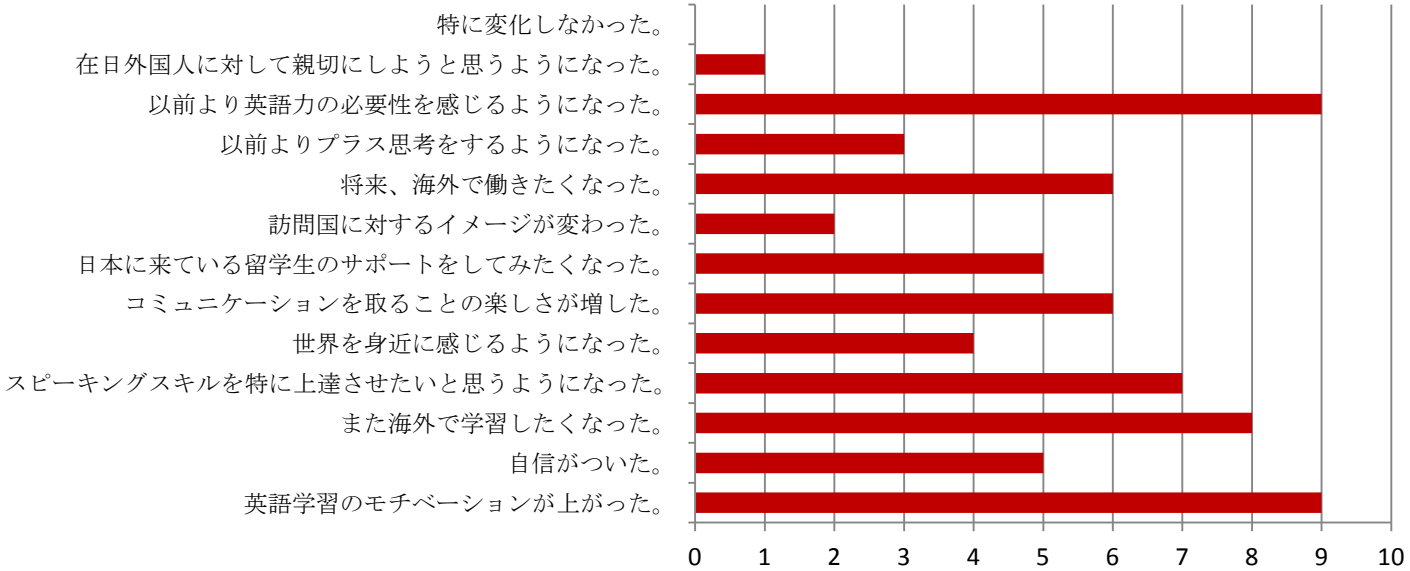
インターンシップは満足できましたか？



この研修で英語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？（複数回答可）



この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？（複数回答可）

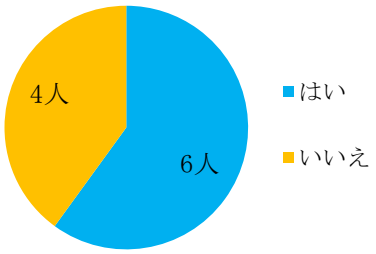


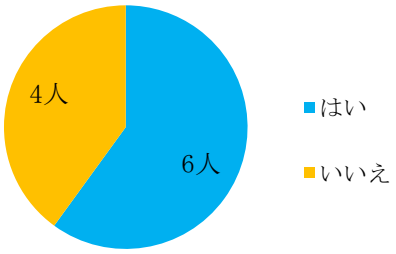
＜留学前後比較調査＞

将来、海外で働いてみたいですか？

前 → 後

将来、海外で働いてみたいですか？

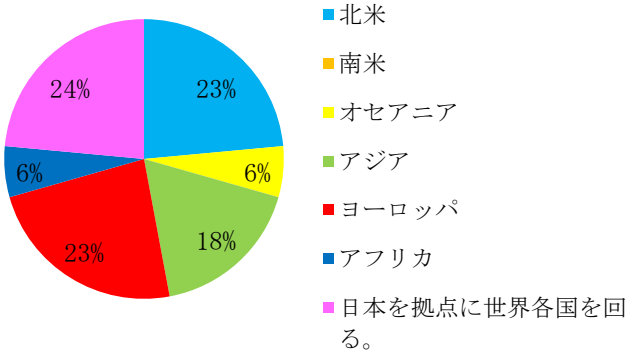


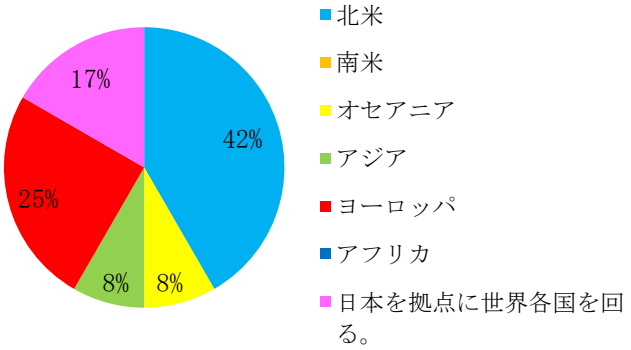


どのエリアで働いてみたいですか？（複数回答可）

前 → 後

どのエリアで働いてみたいですか？（複数回答可）



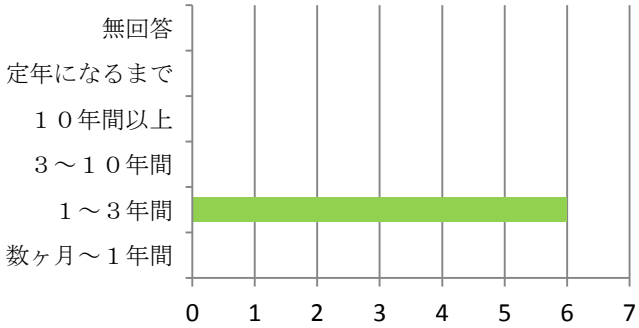


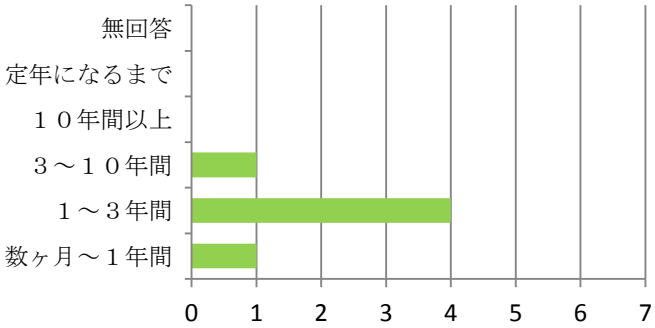
＜留学前後比較調査＞

どのくらいの期間、働いてみたいですか？

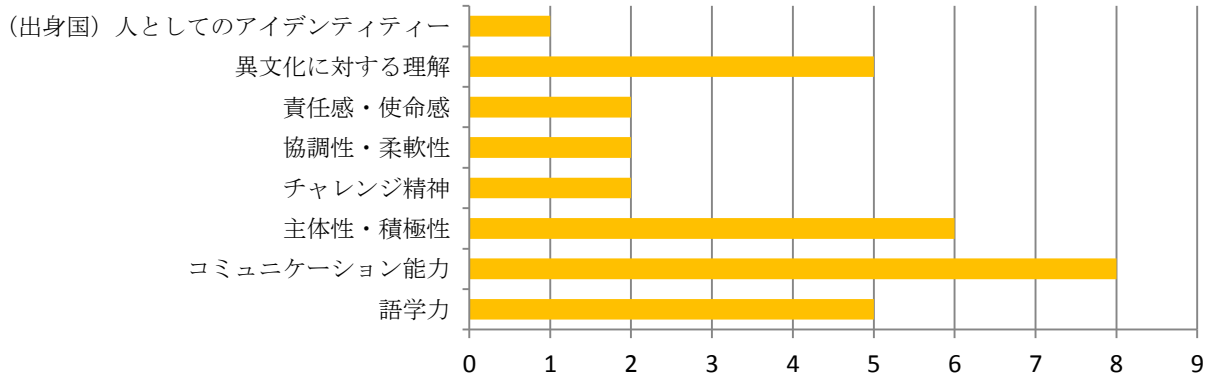
前 → 後

どのくらいの期間、働いてみたいですか？





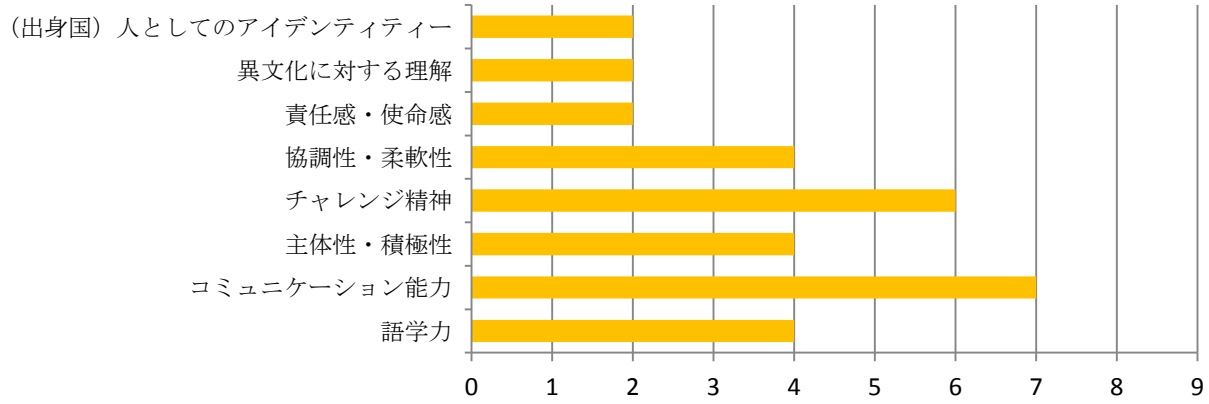
グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。



前

後

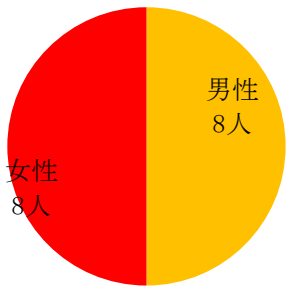
グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。



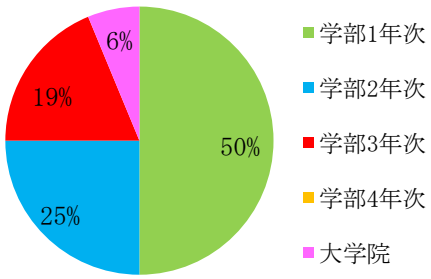
② 平成 29 年度中国杭州電子科技大学中国語・文化研修+海外インターンシッププログラム アンケート結果

＜参加者内訳＞

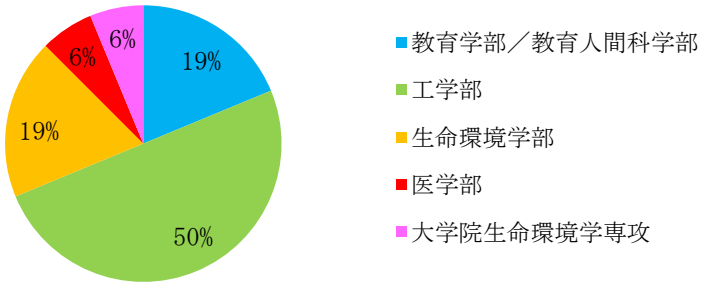
性別



学年

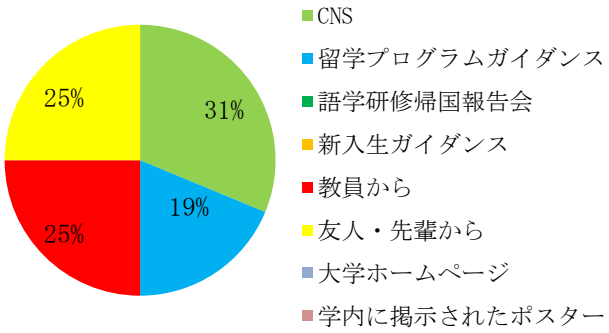


所属

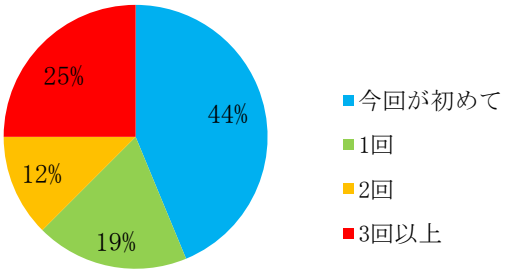


＜各項目回答＞

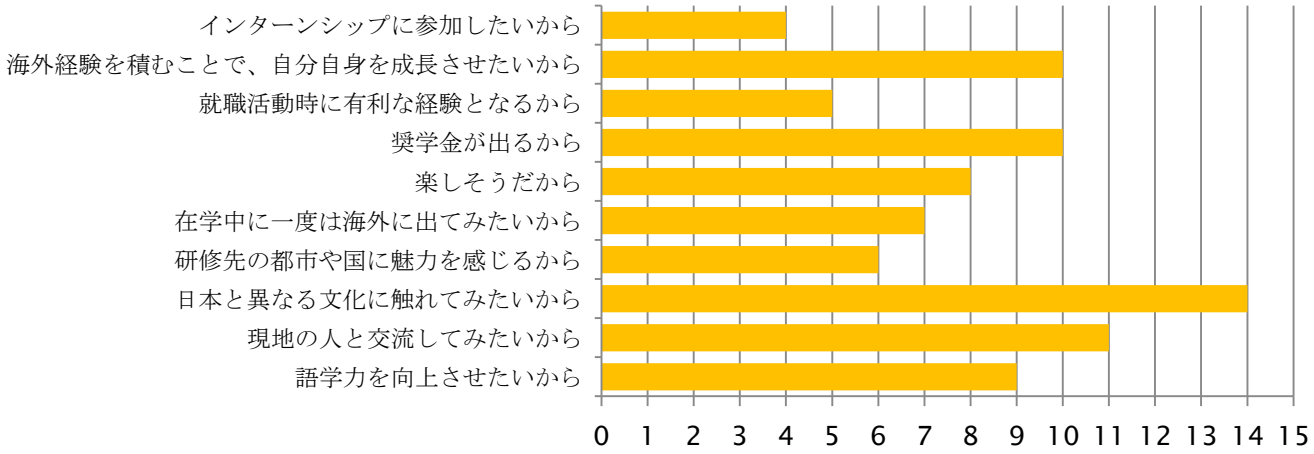
この語学研修を何で知りましたか？



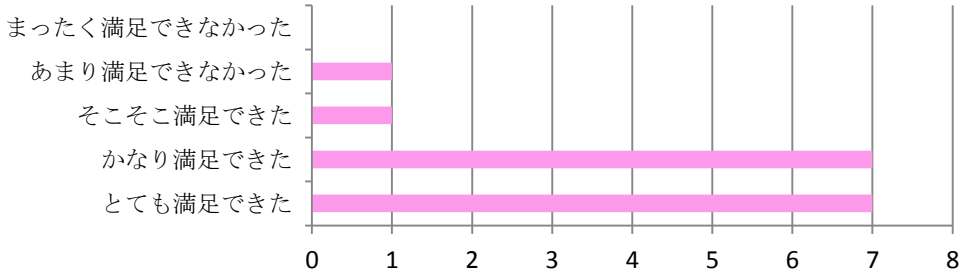
これまでに海外に行ったことはありますか？



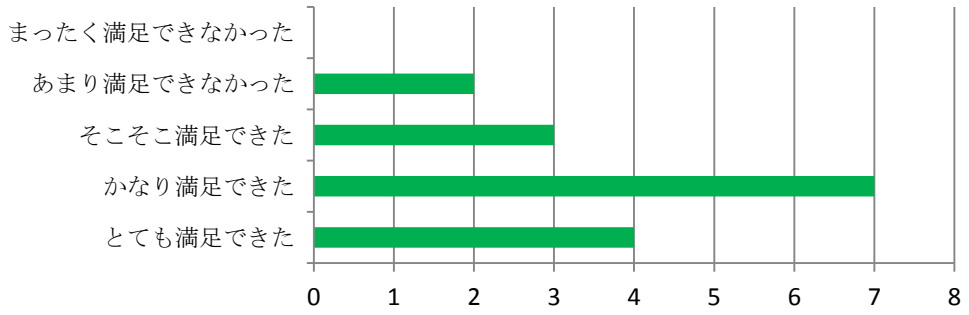
なぜ本研修に参加しようと思いましたか？（複数回答可）



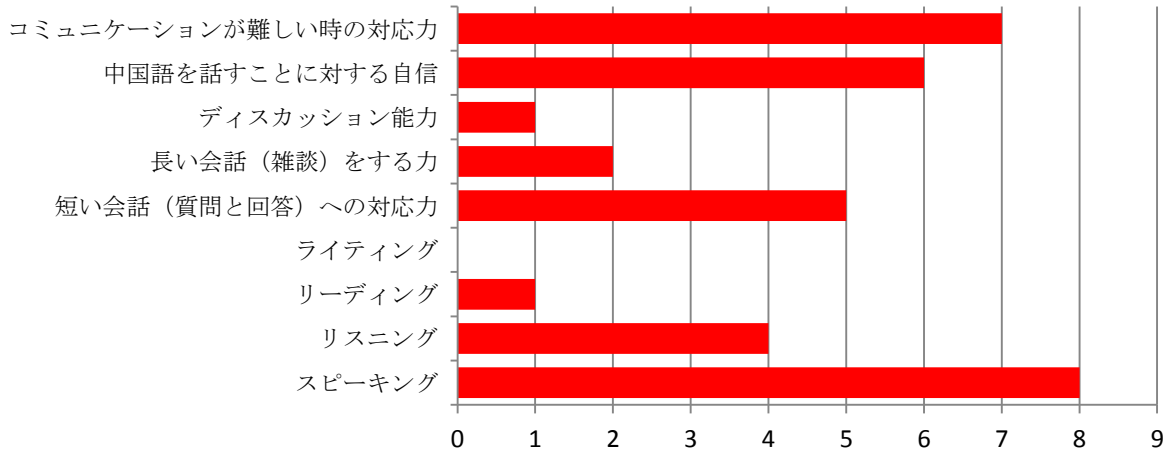
研修プログラムは満足できましたか？



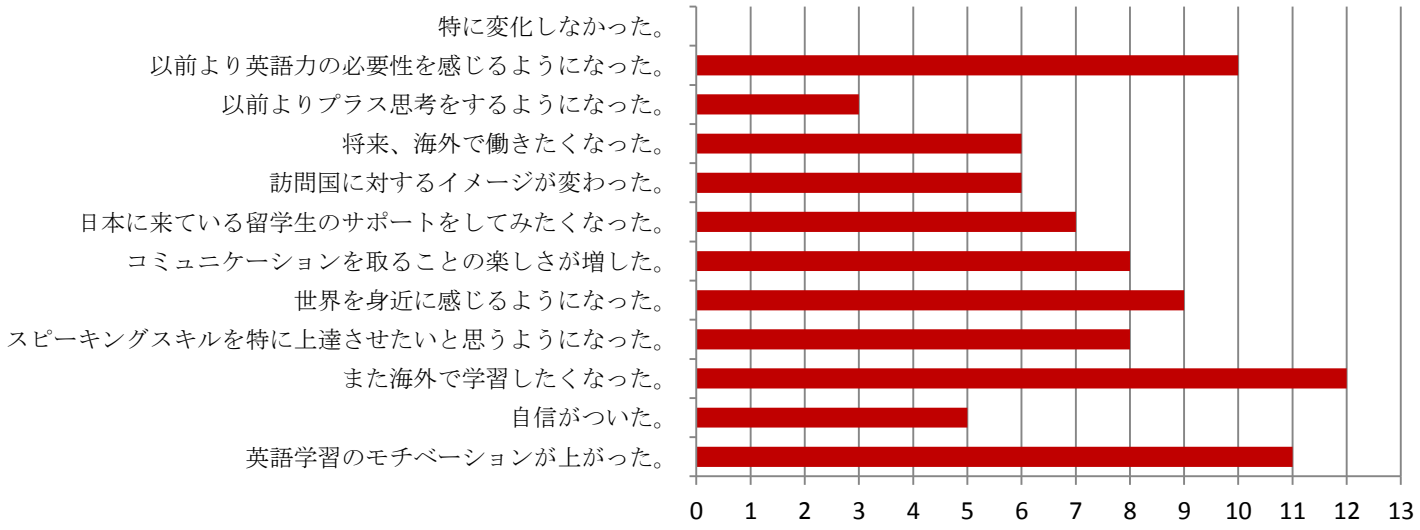
インターンシップは満足できましたか？



この研修で中国語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？（複数回答可）

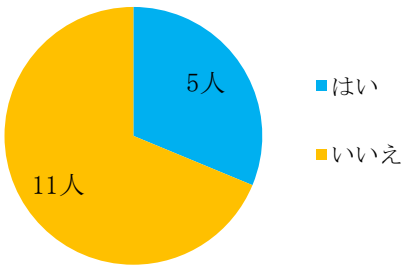


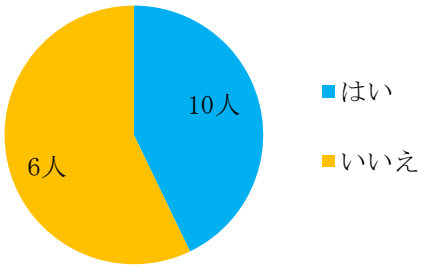
この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？（複数回答可）



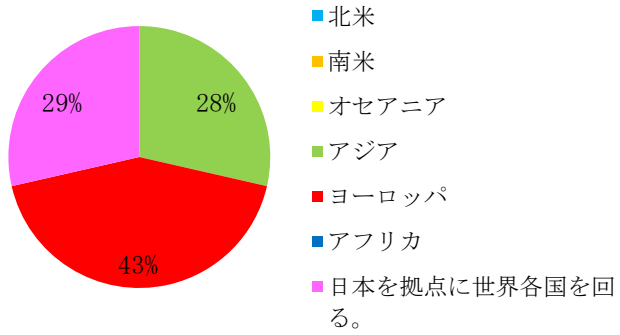
＜留学前後比較調査＞

将来、海外で働いてみたいですか？　**前** → **後**　**将来、海外で働いてみたいですか？**



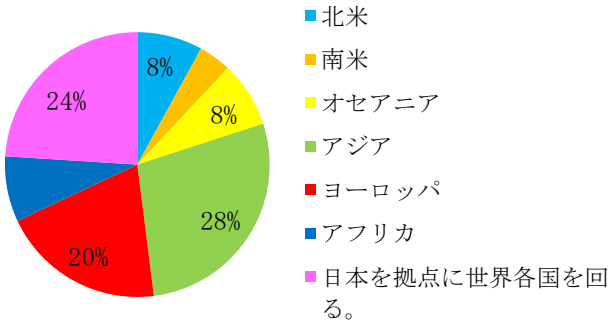


どのエリアで働いてみたいですか？
（複数回答可）

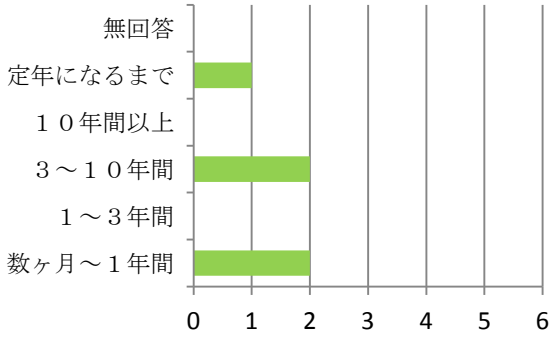


前 → 後

どのエリアで働いてみたいですか？
（複数回答可）

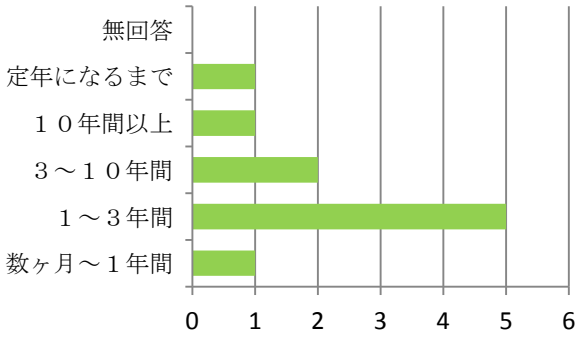


どのくらいの期間、働いてみたいですか？

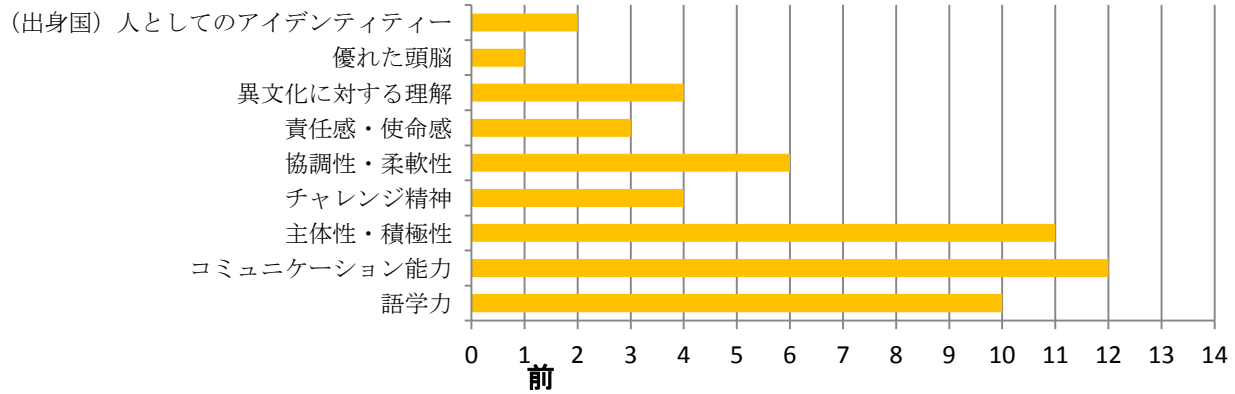


前 → 後

どのくらいの期間、働いてみたいですか？



グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

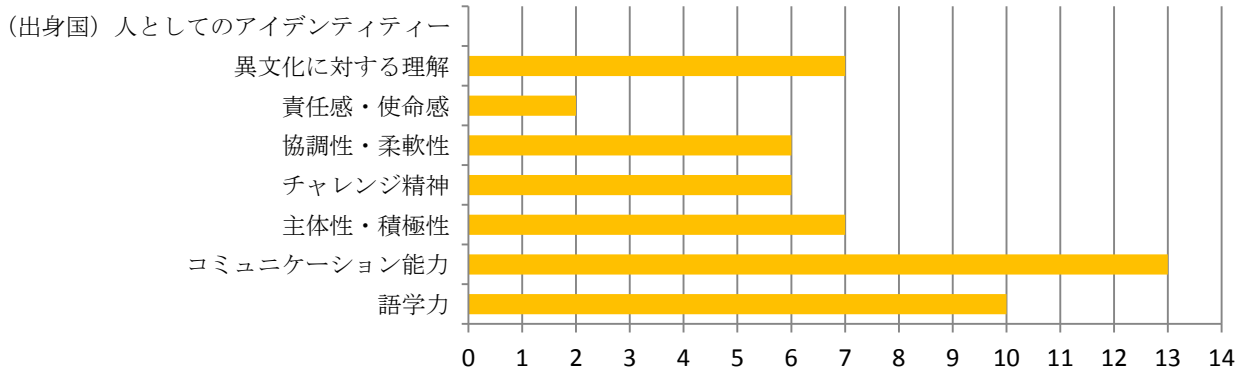


前

↓

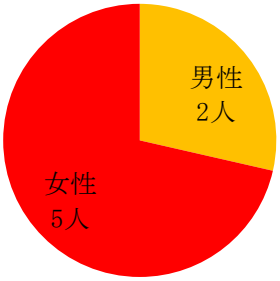
後

グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

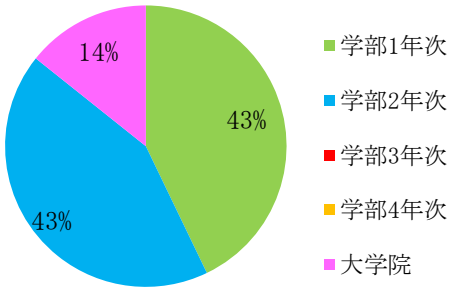


＜参加者内訳＞

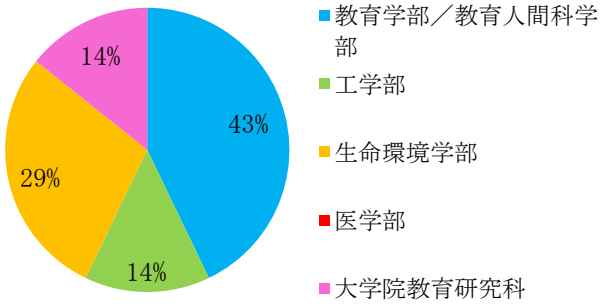
性別



学年

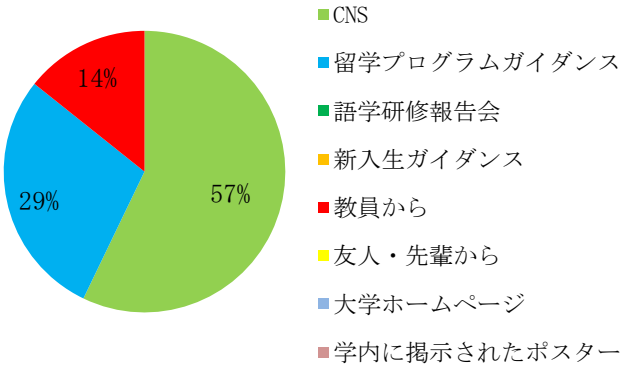


所属学部

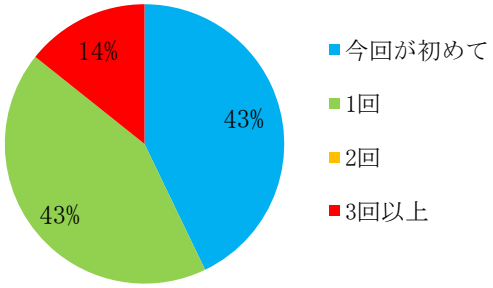


＜各項目回答＞

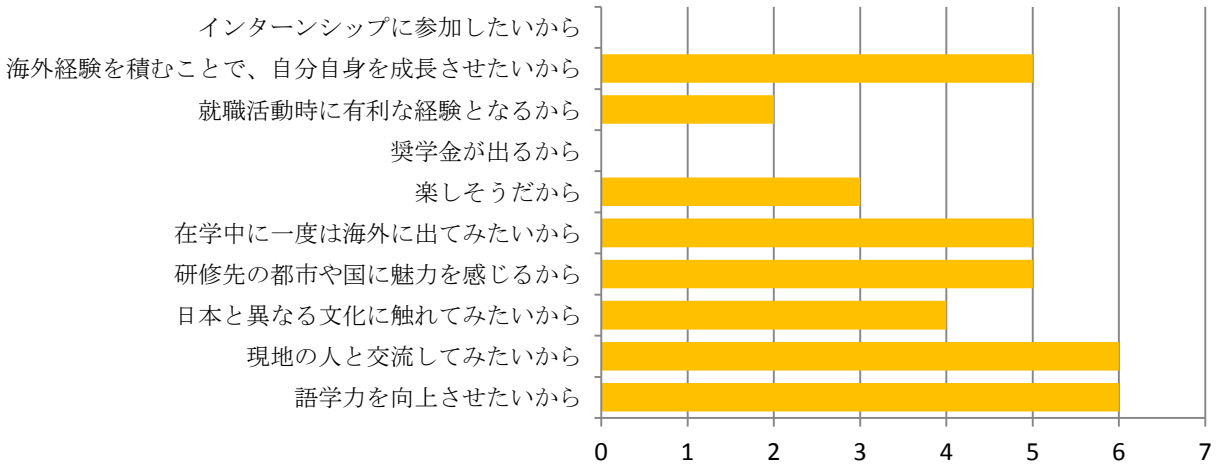
この語学研修を何で知りましたか？



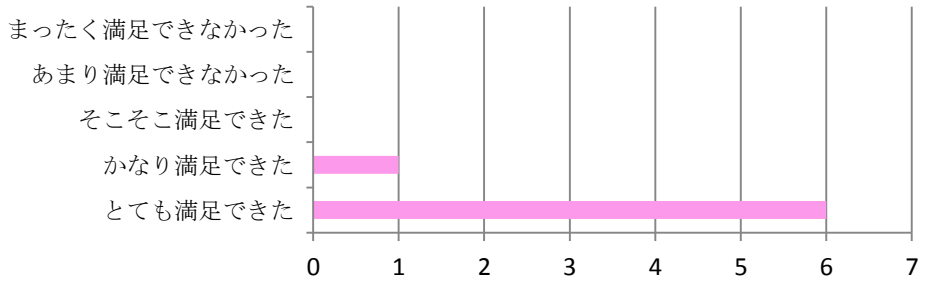
これまでに海外に行ったことはありますか？



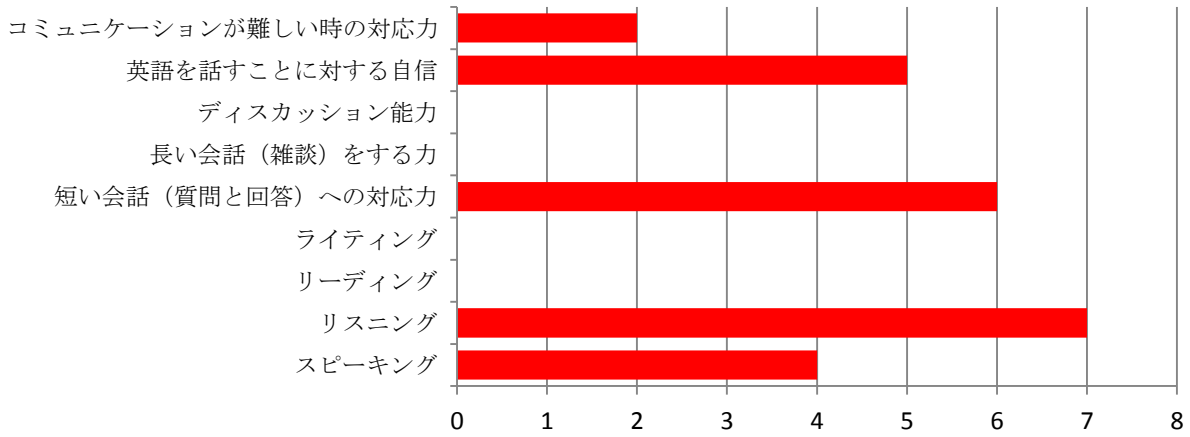
なぜ本研修に参加しようと思いましたか（複数回答可）。



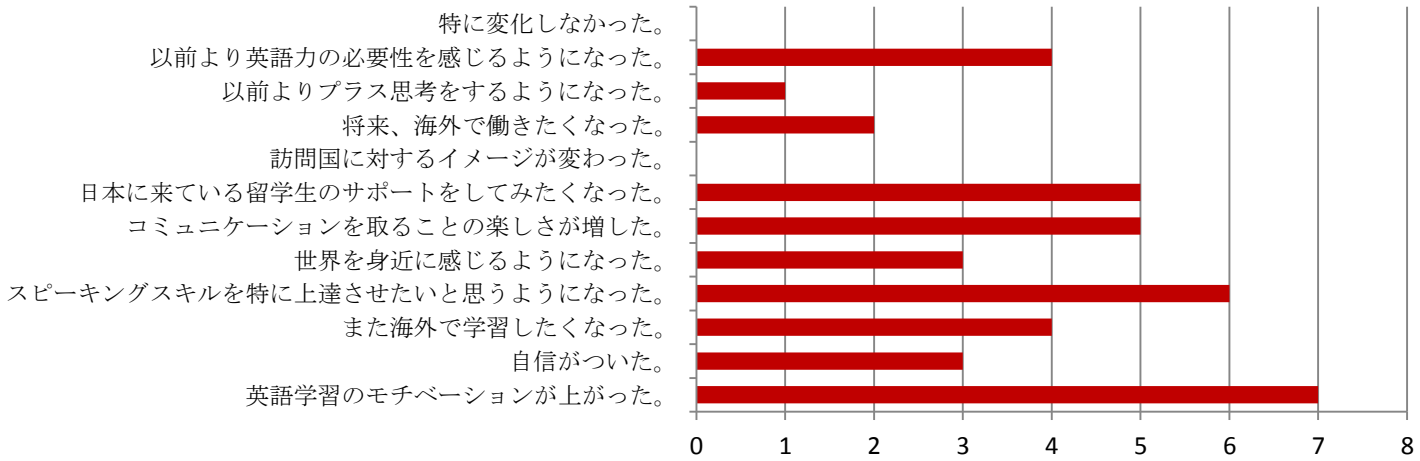
研修プログラムは満足できましたか？



この研修で英語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？（複数回答可）



この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？（複数回答可）

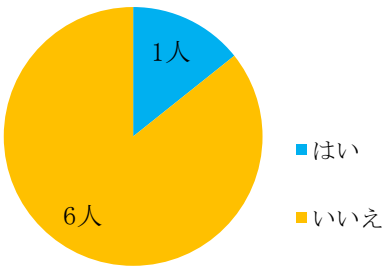


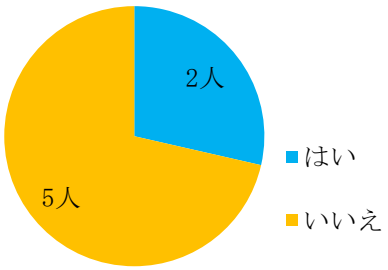
＜留学前後比較調査＞

将来、海外で働いてみたいですか？

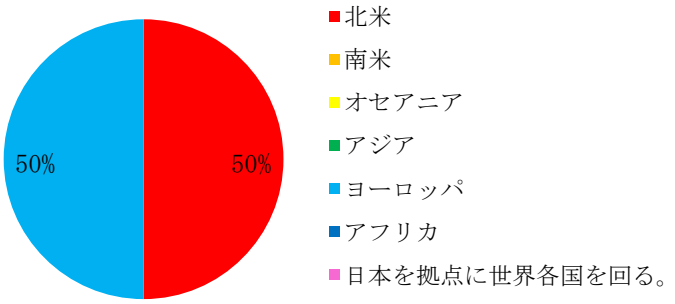
前 → 後

将来、海外で働いてみたいですか？



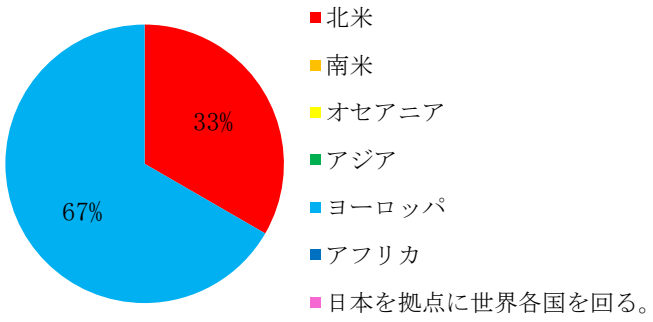


どのエリアで働いてみたいですか？
（複数回答可）

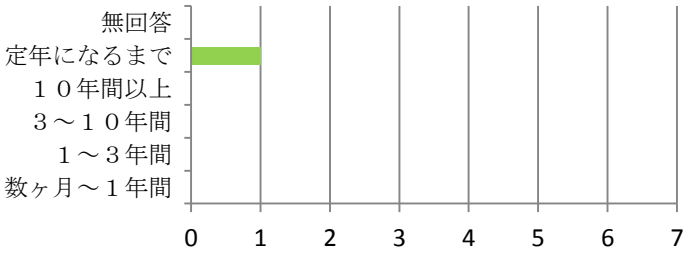


前 → 後

どのエリアで働いてみたいですか？
（複数回答可）

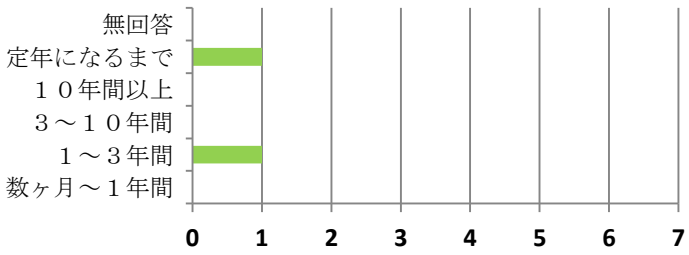


どのくらいの期間、働いてみたいですか？

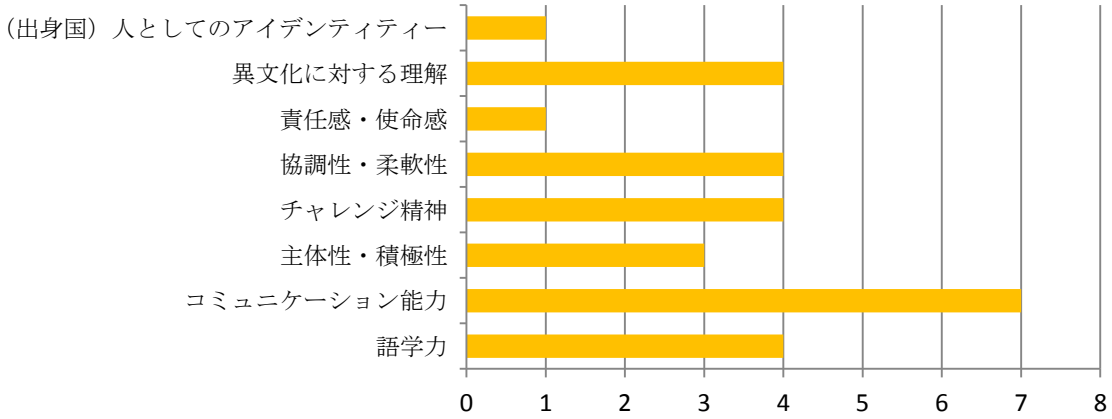


前 → 後

どのくらいの期間、働いてみたいですか？

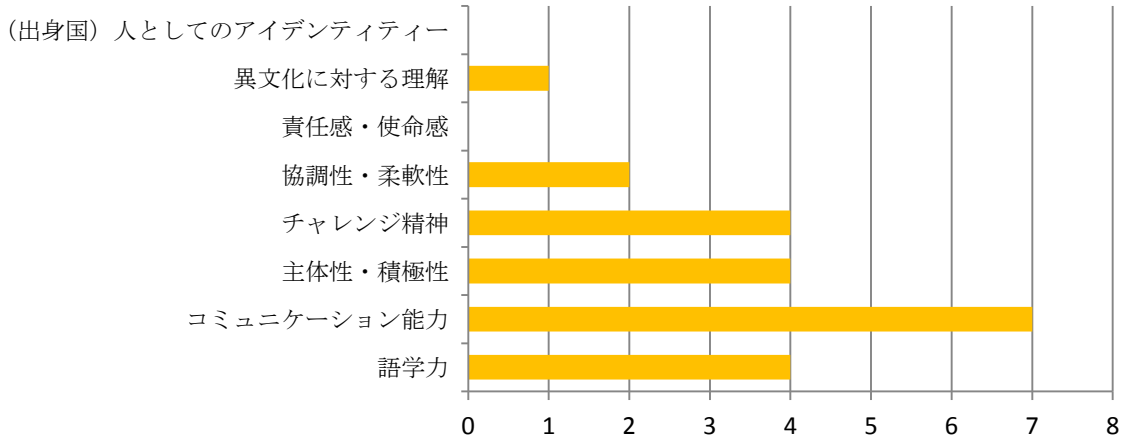


グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。



前
↓
後

グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。



④ 平成 29 年度ノーザン・アイオワ大学英語・文化研修プログラム アンケート結果

※参加学生が少人数のため表での掲載

〈参加者内訳〉

性別

男性	1
女性	3

学年

学部 1 年次	2
学部 2 年次	2
学部 3 年次	0
学部 4 年次	0

所属

教育学部／教育人間科学部	0
工学部	4
生命環境学部	0
医学部	0

〈各項目回答〉

この語学研修を何で知りましたか？

語学研修報告会	0
CNS	2
新入生ガイダンス	0
大学ホームページ	0
教員から	2
留学プログラムガイダンス	0
友人・先輩から	0
学内に掲示されたポスター	0

これまで海外に行ったことはありますか？

今回が初めて	2
1 回	1
2 回	1
3 回以上	0

研修プログラムは満足できましたか？

とても満足できた	1
かなり満足できた	0
そこそこ満足できた	2
あまり満足できなかった	0
まったく満足できなかった	0

なぜ本研修に参加しようとおもいましたか？（複数回答）

語学力を向上させたいから	2
現地の人と交流してみたいから	1
日本と異なる文化に触れてみたいから	1
研修先の都市や国に魅力を感じるから	0
在学中に一度は海外に出てみたいから	1
楽しそうだから	1
奨学金が出るから	0
就職活動時に有利な経験となるから	0
海外経験を積むことで、自分自身を成長させたいから	3
インターンシップに参加したいから	0

この研修で英語力の中のどのようなスキルが上達したと思いますか？

スピーキング	2
リスニング	2
リーディング	0
ライティング	1
短い会話（質問と回答）への対応力	1
長い会話（雑談）をする力	1
ディスカッション能力	0
英語を話すことに対する自信	2
コミュニケーションが難しい時の対応力	1

この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？

英語学習のモチベーションが上がった。	2
自信がついた。	2
また海外で学習したくなった。	2
スピーキングスキルを特に上達させたいと思うようになった。	2
世界を身近に感じるようになった。	0
コミュニケーションを取ることの楽しさが増した。	1
日本に来ている留学生のサポートをしてみたくなった。	1
訪問国に対するイメージが変わった。	1
将来、海外で働きたくなった。	0
以前よりプラス思考をするようになった。	0
以前より英語力の必要性を感じるようになった。	1
特に変化しなかった。	0

〈留学前後比較調査〉

将来、海外で働いてみたいですか？

はい	2
いいえ	2

前 → 後

将来、海外で働いてみたいですか？※

はい	1
いいえ	2

どのエリアで働いてみたいですか？

北米	0
南米	0
オセアニア	0
アジア	2
ヨーロッパ	0
アフリカ	0
日本を拠点に世界各国を回る。	1

前 → 後

どのエリアで働いてみたいですか？※

北米	0
南米	0
オセアニア	0
アジア	1
ヨーロッパ	0
アフリカ	0
日本を拠点に世界各国を回る。	0

どのくらいの期間働いてみたいですか？

数ヶ月～1年間	0
1～3年間	1
3～10年間	0
10年間以上	0
定年になるまで	1
無回答	0

前 → 後

どのくらいの期間働いてみたいですか？※

数ヶ月～1年間	0
1～3年間	0
3～10年間	0
10年間以上	0
定年になるまで	1
無回答	1

グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

語学力	3
コミュニケーション能力	4
主体性・積極性	4
チャレンジ精神	0
協調性・柔軟性	1
責任感・使命感	0
異文化に対する理解	1
（出身国）人としてのアイデンティティー	1

グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。※

語学力	3
コミュニケーション能力	1
主体性・積極性	3
チャレンジ精神	1
協調性・柔軟性	3
責任感・使命感	0
異文化に対する理解	1
（出身国）人としてのアイデンティティー	0

※1名未回答

４．　トビタテ！留学 JAPAN

平成 29 年 12 月 13 日（水）、甲府キャンパスにおいて、文部科学省がグローバル人材育成施策の一環として行っている留学促進キャンペーン「トビタテ！留学 JAPAN」の学内説明会を開催しました。同キャンペーンの主な取組のひとつである「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」に応募し選抜され、約半年間アメリカへ留学した大学院修士課程 2 年の竹内嵩裕さんが、自身の留学経験を紹介しながら、事業概要を説明しました。参加した学生からは多くの質問が寄せられ、竹内さんが体験に即したアドバイスを行い、学生を激励するなど、有意義な説明会となりました。

なお、説明会開催までの 1 週間、附属図書館本館及びグローバル共創学習室「G-フィロス」において、トビタテ！留学 JAPAN が推奨する啓発ポスター展示「ポスタージャック」が実施され、世界各地でのユニークな活動紹介や海外留学・グローバル人材に対する関心を高めるポスターが壁一面に掲示され、学内の注目を集めました。

平成 29 年度は、平成 29 年度後期（第 7 期）で申請者があったものの採択には至らず、平成 30 年度募集への取り組みの結果として、平成 30 年度前期（第 8 期）の募集に対して 5 名もの申請があり、うち 1 名が採択となり、平成 30 年度前期の本プログラムでの留学が決まりました。募集から申請まで、国際部国際企画課の担当職員が、申請する学生の指導教員との連絡調整や、申請書類のブラッシュアップから面接対策まで全面的なサポートを行っています。

説明会の様子

自身の経験を紹介する竹内さん

壁一面に掲示されたポスター

海外からの受入れ

１．日本語・日本文化短期プログラム（University of Yamanashi Summer Program 2017）

本プログラムは海外の交流協定校との関係を強化し、本学の国際化を推進することを目的として、本学と学生交流協定を締結している海外大学の学生を対象に、国際企画課及び学内関連部署の協力を得て、平成 28 年度から国際交流センターが実施しているものです。今年度は、中国・杭州電子科技大学から 13 名、オーストラリア・シドニー工科大学から 11 名の、合わせて 24 名が参加しました。

プログラム初日となる 7 月 3 日（月）には、甲府キャンパスにおいてウェルカムパーティーを開催しました。パーティーでは、堀哲夫 国際交流担当理事からのご挨拶のあと、研修生代表から抱負の発表、また、本学学生代表からの歓迎の言葉があり、その後、研修生・本学学生・教職員ら計 80 名による懇談会が行われ、国際交流を楽しみました。

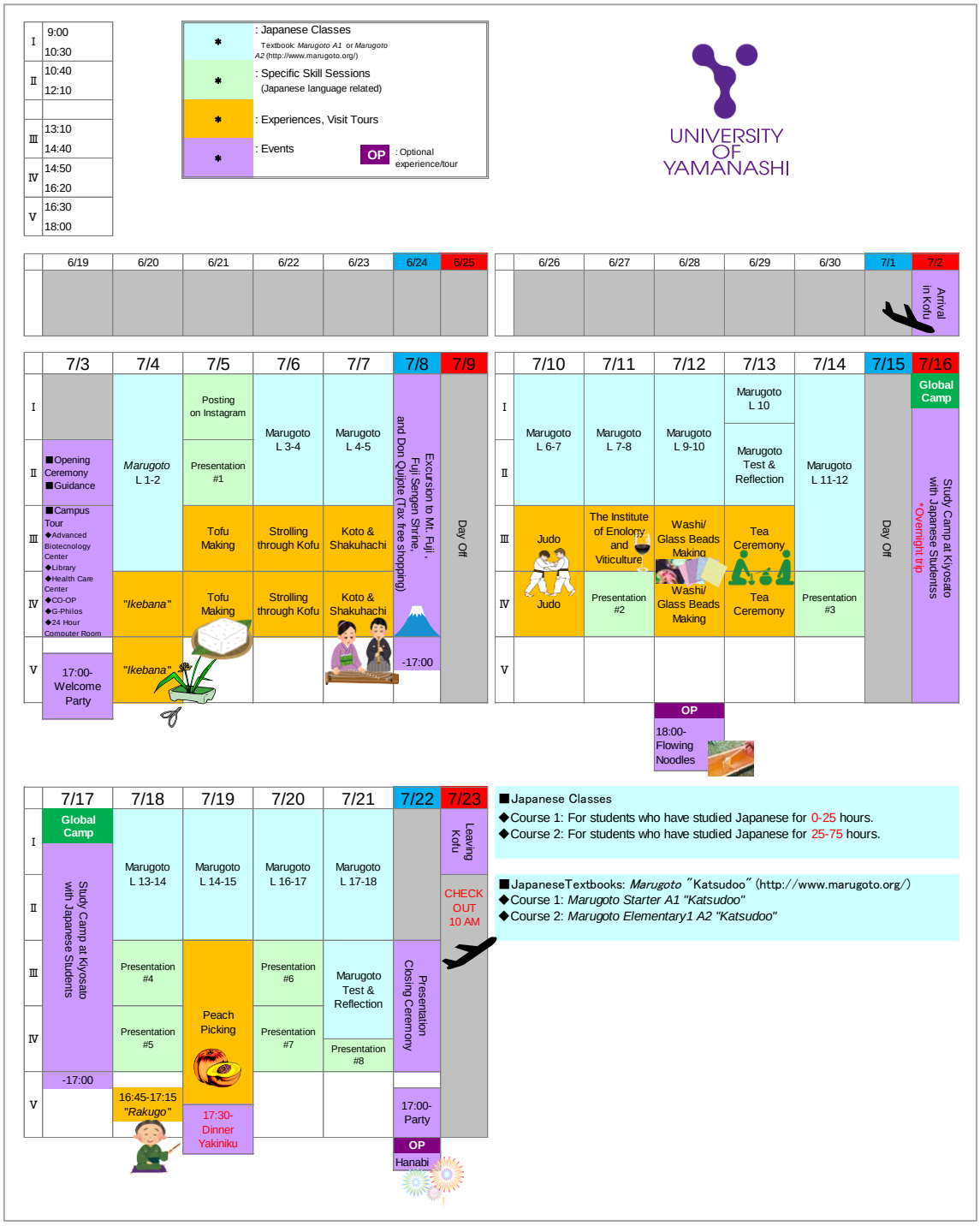
受入れ期間は 7 月 2 日（日）～7 月 23 日（日）の約 3 週間で、この間に日本語授業はもちろんのこと、生け花をはじめ、琴と尺八に関するレクチャーと体験、豆腐作り、和紙づくりや柔道、茶道、落語に至るまで、様々な伝統的日本文化を体験して学び、さらに日本語で調査を行って最終的にプレゼンテーションを行うプログラムとなっています。

ガイダンスのようす

歓迎の言葉を述べられた堀理事

パーティーでの集合写真

〈University of Yamanashi Summer Program (UYSP2017)-Japanese Language and Culture-〉スケジュール



（1）日本語の授業

日本語のレベルはCourse1,2の2つとし、Course1は日本語学習時間が25時間以下の学生を、Course2は日本語学習時間が25時間から75時間までの学生を対象としました。コースは基本的には本人の申告により決定しており、日本語学習時間が25時間を超える学習者も、一部はCourse1の日本語授業を受けました。

（2）日本文化体験・研究施設見学

Course1,2の学生が合同で日本文化の授業を受け、体験・見学をしました。また適宜、英語、中国語の通訳と、サポート役の本学学生を配置し、日本文化への理解が深まるように配慮しました。実施した日本文化体験・研究施設見学は以下のとおりです（実施順）。

①学発生工学研究センター　②生け花　③豆腐作り　④甲府市内探訪　⑤琴と尺八
⑥富士山と新倉富士浅間神社へのエクスカーション　⑦柔道　⑧本学ワイン科学研究センター
⑨和紙漉き、またはトンボ玉作り　⑩流しそうめん（本学G-フィロスイベント）
⑪茶道　⑫落語（本学G-フィロスイベント）　⑬有機農園における桃狩り（於：笛吹市）
⑭花火見学（於：山梨市）

いずれの日本文化体験・研究施設見学もおおむね好評で、上記の②～⑨、及び⑪～⑬の体験についてプログラム終了後に満足度を尋ねるアンケートを行ったところ、すべての項目が5段階中平均4.0以上となりました。また全体でも満足度平均が4.4と非常に高い数値を示しました。さらに、「これらの体験を通してより日本文化を学ぼうと思ったか」という設問に対しては、3分の2の学生が「強くそう思う」、残りの3分の1の学生が「そう思う」と答えていることから、本学での体験が学生の日本文化への興味を強く引き出したことがわかります。

なお、この日本文化体験・研究施設見学はほぼ本学甲府キャンパス内で行われており、本学の各センター、学生のクラブなど関係各所の多大な協力を得て行われました。

発生工学研究センター見学

生け花体験

豆腐作り体験

琴の体験

尺八の体験

エクスカーション（新倉山浅間公園）

流しそうめん体験（G-フィロスの夏祭り）

桃狩り（片岡助教から説明）

自分でもいだ桃を味わう学生たち

（3）グローバル合宿

グローバル人材育成プログラムに参加する本学学生 18 名と合同の 1 泊 2 日の合宿もプログラムに盛り込まれています。これは、ディスカッションやアクティビティを通してお互いの文化を知るために行われたものです。このグローバル合宿は、山梨県北杜市内の羽村市自然休暇村で行われました。ディスカッションやアクティビティは、基本的には本学学生 18 名が事前に準備し、適宜担当教職員がアドバイスしました。この合宿に参加した本学学生の満足度は 5 段階中 4.3 であり、記述式の回答からはグローバルマインド涵養に一役買ったことがうかがえました。

混合グループでの炊事

ワークショップ

合宿での集合写真

（4）日本語プレゼンテーション

まず、24 名の参加者を 4～5 人の 5 つのグループに分けました。テーマ決めから調査、分析、考察、発表準備、提示資料作成までの計 8 コマの授業を行い、プログラム最終日の 7 月 22 日（土）にプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションは質疑応答を含めて 1 グループ 20 分で、発表言語は日本語のみとしましたが、提示資料や質疑応答の言語は英語、中国語も可として行いました。発表のテーマは、「日本のアイドル」、「日本の麺類」、「日本の祭り」、「山梨県の食べ物・飲み物」、「日本のゲーム文化」の 5 つでした。

なお、このプレゼンテーションに関する調査については、オンラインアンケートなどは禁止し、必ず口頭で複数の日本語母語話者に日本語で尋ねて、回答を学習者自身が書き留める方法を採るように指導しました。Course 1 の参加者の中には日本語学習歴が全くない学生もいたものの、声のかけ方から感謝の述べ方までの一連の日本語を覚えて、本学甲府キャンパス内外において調査にあたっていました。調査協力者は計 151 人にものぼり、UYSP に参加した学生が平均 6.3 人の日本語母語話者に対して調査を行ったことになります。プレゼンテーション当日は、後述のバディやグローバル合宿参加学生も聴取に参加し、活発な質疑応答が行われました。また、発表をお互いに評価し合ってもらい、後の日本語学習にもつながるようにしました。

プレゼンテーション会場のようす

プレゼンテーションのようす

プログラム修了式記念写真

（5）バディ制度

本プログラムに参加した外国人学生 1 人につき、本学学生 2～3 名がバディとして任命され、プログラム期間中の生活・観光・日本語のサポートなどにあたりました。このバディには数多くの応募があり、平成 29 年度は 57 名がバディとして採用されました。バディには「〇〇をしなければならない」といった指示は特段与えず、プログラム参加学生と共に過ごす時間を週 1 回以上設けるようにと伝えて活動してもらいました。バディの事後報告によると、多くがこの制度に満足しており、一部の学生はこの経験が、後の海外研修や留学につながっているため、本制度が本学の国際交流に大きく寄与していると思われます。

（6）インスタグラムへの投稿

学習の記録として、インスタグラムへの投稿を本プログラム参加者に義務付けました。投稿する際にはハッシュタグ「#UYSP2017」を必ず付与しているため、後に情報が散逸することを防いでいます。担当教員からのものも含め、190 の投稿がありました。以下のページで投稿を見ることができます。

https://www.instagram.com/explore/tags/uysp2017/　（以下の写真はページの一部から抜粋）

２．学生訪問団の受入れ

交流協定校や、その他の教育機関等からの要望を受け、短期での学生訪問も受け入れています。このような短期受入れの際には、歓迎会や合同国際ワークショップを開催するなどして、本学学生から参加希望者を募り、学生に国際交流の機会を提供しています。

（1）メイヴィル州立大学（米国）学生の訪問受入れ：平成 29 年 5 月 26 日（金）

米国のメイヴィル州立大学より、学生 6 名と教員 2 名が本学を訪問しました。日米文化交流事業の一環として、一行は約一ヶ月間甲府市に滞在し、「日本の田舎の生活」をテーマに、県内外において様々な交流活動及び調査研究を行いました。

当日は、本学学生の案内で、発生工学研究センター、図書館、ワイン科学研究センターなどを見学した後、本学学生と日本の生活等についてディスカッションしました。海外訪問が初めてというメイヴィル州立大学学生にとって、文化の違う日本の学生との交流は新鮮であり、双方の学生にとって、良い刺激となりました。

ワイン科学研究センターの見学

発生工学研究センターの見学

交流した本学学生との記念写真

（２）瀋陽薬科大学（中国）学生の訪問受入れ：平成 30 年 1 月 16 日（火）～1 月 19 日（金）

中国の瀋陽薬科大学より、学生 12 名が来学しました。瀋陽薬科大学とは平成 27 年 3 月に交流協定を締結しており、これまでに教員の相互訪問などの交流が行われています。今回、同大から訪問依頼を受け、ワイン工程、食品薬学、薬学日本語、中薬学日本語専攻の学生の短期訪問・研修を受入れました。

初日に茅暁陽 国際交流センター長による大学紹介、キャンパスツアーと甲府市内の見学に続き、ささやかな歓迎会が開かれ、本学学生との交流を楽しみました。2 日目は、生命環境学域で、学部・学科紹介や研究室・研究施設訪問、体験授業などが行われました。学生たちは、どの場面でも積極的に質問をするなどして、本学の特色ある研究に強い関心を寄せていました。3 日目には、環境科学科の片岡良太 助教による指導のもと「食品ロス」と題する本学学生との合同ワークショップも開催されました。

また、日本文化体験として、3 日目に学内にて着付けと茶道の体験を実施、最終日に新倉山浅間公園と西湖いやしの里へのエクスカーションを行い、訪問団は 4 日間の全日程を終えました。

歓迎会での国際交流

ワイン科学研究センターの見学

発生工学研究センターの見学

合同ワークショップの様子

着付け体験

茶道体験

３．国際ワークショップ

日本語・日本文化短期プログラムや、その他海外の学生訪問団受入れの際、本学学生と訪問学生が、国籍混合チームでのグループワークやディスカッションを行う、国際ワークショップを開催しています。これら国際ワークショップでは、本学学生たちに、外国人とのチームワークと、母国語ではない英語での自己表現を学ぶ機会を与えています。

（1）親善プログラミングコンテスト：平成 29 年 7 月 13 日（木）

平成 29 年 7 月 13 日（木）、本学国際交流センターとコンピュータ理工学科の主催により、コンピュータ理工学科学生と交流協定校である中国・杭州電子科技大学計算機学院学生との親善プログラミングコンテストが行われました。コンピュータ理工学科からは米国計算機学会 ACM（Association for Computing Machinery）が主催する国際大学対抗プログラミングコンテスト「ACM-ICPC_2017」国内予選に参加予定の 20 名の学生が、杭州電子科技大学からは国際交流センター主催の日本語・日本文化短期プログラムに参加している計算機学院在籍の 11 名の学生がそれぞれ参加し、７つの混成チームに分かれてプログラミングを競いました。各チームは､英語や筆談でアルゴリズムについて真剣に討論し、メンバー全員で力を合わせて難しい課題に取り組み、会場となった計算機室は熱気に溢れていました。

本学ではグローバル・パートナーシップの形成により、学生に海外の研究者や学生と協同して問題解決に取り組む機会を提供することを第 3 期中期目標中期計画に掲げています。また、コンピュータ理工学科では高度情報化社会を担う人材の育成に向けて、チームでのソフトウェア開発や情報システムデザイン能力の修得をカリキュラムの重要な構成部分としており、今回の親善プログラミングコンテストを通して、学生に国際的なチームワークを体験させることができました。

なお､7 月 14 日(金)に行われた ACM-ICPC_2017 国内予選には本学から国内の大学最多となる 23 チームが参戦し、コンピュータ理工学科 4 年生 3 名から構成されるチームが国内予選を突破し、平成 29 年 12 月 16 日（土）, 17 日（日）に茨城県つくば市で開催されたアジア地区予選に出場しました。

真剣にアルゴリズムを検討している様子

優勝チーム表彰

（2）国際ワークショップ『食品ロス』: 平成 30 年 1 月 18 日（木）

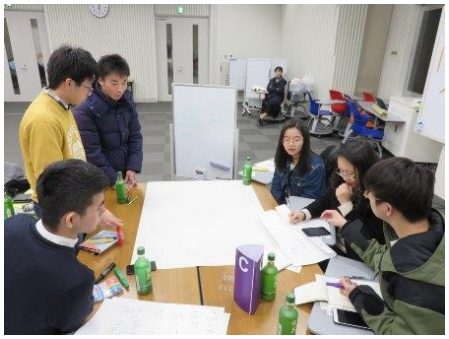
本学学生 13 名と瀋陽薬科大学学生 12 名がアクティブラーニング室で食品ロスに関する議論を行いました。日中混成の 4 つのグループに分かれ、グループごとに日本側と中国側の食品ロスに関する情報を共有し、その対策について話し合いました。「賞味期限切れ食品」「規格外食品」「レストランの廃棄」「テイクアウトができない」「宴会の食べ残し」など多くのトピックスが提示されましたが、特に宴会の食べ残しについては中国側からの意見が多くあり、これは中国のおもてなし文化によるものであることがわかりました。

解決策としては、「賞味期限をなくす」、「教育をしっかり行う」、「寄付」、「飼料・肥料にする」、「食品購入シ

ェアアプリを開発する」などの意見が出されました。また、宴会の食べ残しについても、教育を行うことで少量でも真心が伝わるような文化にしていく必要があるという意見が出ました。興味深いのは、全てのグループから教育をしっかり行うことで食品ロスは減らせるという意見が出たことです。

参加した本学学生からは、「中国の学生と食品ロスのディスカッションをすることで、食品ロスに対する考え方のちがいや共通点を見つけることができ、それに対して解決策や今後の課題を考える良い機会になったので、とても勉強になった」という感想を得ました。

外国の大学生とのこうした議論の場は、異文化の考え方を知ること、そして、何よりも自分の考えをしっかりと相手に伝えるという基本的な部分を強化する良いトレーニングになります。国際交流センターでは、今後もこうした場を益々増やしていく予定です。



混合チームでのグループワーク

活気のあふれる会場の様子

発表のようす

留学生サポート事業

１．日本語研修コース

国際交流センターにて開講している日本語研修コースについて、国際交流センター奥村圭子教授の年次報告を以下に掲載して報告します。

2017 年度日本語研修コースⅠ第 28・29 期 と研修コースⅡ第 14 期の報告

奥村　圭子

１．　日本語研修コースⅠとⅡの概要

日本語研修コースは、現在の国際交流センターの前身、留学生センターが設立された 2003 年度後期より、大学院進学を目的とする国費研究留学生向けの集中予備教育として始まった。まず、「日本語研修コースⅠ」を開講し、その翌年度 2004 年度後期から日韓共同理工系学部留学生予備教育として「日本語研修コースⅡ」を開講した。日本語研修コースⅠは、「大学院や教員研修における研究生活に入るための基礎的な日本語力の習得をめざす」ことを目標に、前期・後期に週 12 コマ 15 週間に亘って行われる集中コースとしてスタートした。しかし、予備教育期間とはいうものの、指導教員によっては、学生にとって日本語も重要であるがいち早く研究準備に取り掛かってほしいという声も聞かれるようになり、2016 年度より授業コマを 3 コマ削減し、週 9 コマの準集中コースに形を変え、初級後半の半ばまでを学ぶ内容にした。開講当初から初級前半レベルの交換留学生も研究生も参加している。

一方、研修コースⅡは、開講当初より本来の対象者である日韓共同理工系学部留学生が後期にのみ入学していたため、後期のみ開講している。学生の配分は遺憾ながら久しくないが、初級レベルを修了した初級後半から中級へ差し掛かったレベルの交換留学生や研究生を対象とした、学部授業へのパスウェイとして運用している。「大

学・日常生活を円滑に送るため、初級で学んだ知識を運用に結びつけ、読む・書く・聴く・話す、の四技能においてコミュニケーション力を中級レベルへ高めること」を到達目標とし、週７コマの中で、できる限り既習の初級レベルの知識を運用力につなげるよう指導している。いずれの研修コースも、言語と共に日本文化、そして地域社会についても学び、日本、そして山梨地域文化への理解を深めることも目標としている。

2016 年度から、研修コースⅠ前期は「日本語 Intensive A」、後期は「日本語 Intensive B」、そして研修コースⅡは「日本語 Intensive Ⅱ」という科目名で語学科目としての単位化を行うこととなり、2017 年度には 9 名の交換留学生が単位取得を果たした。

表１は 2014 年度から 2017 年度までの研修コースの受講者数の推移を示したものである。

表１　研修コースⅠ/Ⅱ　2014 年度から 2017 年度までの受講者数の推移

	研修コースⅠ													研修コースⅡ			
年度 / 身分	2014 前期 22 期 A	2014 前期 22 期 B	2014 後期 23 期	2015 前期 24 期 A	2015 前期 24 期 B	2015 後期 25 期	2016 前期 26 期 A	2016 前期 26 期 B	2016 後期 27 期	2017 前期 28 期 A	2017 前期 28 期 B	2017 後期 29 期 A	2017 後期 29 期 B	2014 後期 11 期	2015 後期 12 期	2016 後期 13 期	2017 後期 14 期
研究生		1				1	4		1	1		1		1		2	
大学院生	3(1)		1	1	1	2	1			5			6			2(1)	
交換留学生		1	2	2	2	1	1	3	2	1	4	1		3	5	4	8
教員研修生		1(1)				1(1)		1(1)	1(1)	1(1)		1(1)		2(2)	1(1)	1(1)	
計	3	3	3	3	3	5	6	4	4	8	4	3	6	6	6	9	8

▭ ： 2016 年度を示す　　（　）は国費留学生数を示す。

2017 年度前期には、研修コースⅠの受講希望の大学院生の指導教員と協議の結果、週に２日計６コマの入門レベルの研修コース IA を提供することとなった。その他初級後半レベルで初級の復習とそれを運用力につなげることを必要とする交換留学生を対象に研修コース IB を週３コマ行うこととなり、前者は８名、後者は４名のクラス編成となった。

一方、2017 年度後期においては、研修コースⅠの９コマのうち７コマを新しく到着した教員研修生を含む入門レベルの２名向けに IA として、そして前期の研修コースⅠ修了生から継続して学びたいという強い要望があり６名を対象に２コマ分の IB を提供した。一方、研修コースⅡには、週７コマのコースに初級後半レベルから中級への橋渡しが必要な交換留学生８名が受講した。いずれのコースでも、限られたコマ数の中で受講生のニーズに合わせた教育を行うよう心掛けた。

２．2017 年度授業概要

前期研修コースⅠ 28 期 A(週６コマ)

受講生は全員で８名であった。大学院前の研究生１名、研究留学のために半年来日した交換留学生１名、教員研修生１名、博士課程５名から構成され、それぞれ学会参加やフィールドワークで１～２週間欠席をせざるを得ないこともあったが、忙しい中積極的な受講態度で参加していた。

2017 年度前期は、以下の教材を使い、進めた。

主教材：『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第２版本冊』１~30 課

副教材：『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第２版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第２版 標準問題集』

（いずれもスリーエーネットワーク）

前期研修コース IA には、初心者が含まれていたため、平仮名など表記の紹介からのスタートとなった。3 コマで 1 課を進めていくこととし、最初の２コマで新出語彙、文法の導入を行った後、ドリル練習で定着を図り、

次の１コマで復習と応用、そして表記を取り扱った。５～７課毎に理解度を測る復習テストを行った。応用練習では、クラスの外に出て日本語母語話者とコミュニケーションを図るような課題を課すようにした。休み時間にも日本語のみでコミュニケーションをしたり、研究室で使われている日本語語彙や表現などについて全体で共有したり、学習者同士が支え合いながら「できる」ことが少しずつ増えていくことを互いに喜び合うような、ラポールが形成されているクラスであった。

前期研修コースⅠ 28 期 B（週３コマ）

前年度後期に研修コースⅠを終えた交換留学生、そして新しく到着した初級修了レベルの交換留学生４名が参加した。

主教材：『できる日本語 初中級』凡人社

副教材：『できる日本語 わたしの文法ノート 初中級』凡人社

：『できる日本語 わたしのことばノート 初中級』凡人社

：『できる日本語準拠　漢字たまご 初級』凡人社

研修コース IB では、コミュニケーション力を伸ばすことに主眼を置き、独立した短文レベルの発話からまとまった談話を作りながら話す練習をおこなった。これまでに身に付けた初級文法や語彙を使い、実用的な表現を毎週導入しながら、実生活で使う頻度が高い機能に焦点を合わせ、運用力を高める活動を取り入れた。ストーリーを描写したり、実際に起こった出来事を第三者に伝える練習をしたりする中で習慣やマナー、そして日本文化や社会についての紹介も行った。受講生からの要望に応え、後半漢字の時間を設け、漢字の基礎、漢字の学び方、語彙の増やし方などについて今後自学自習が可能となるよう指導を行った。

後期研修コースⅠ 29 期（週７コマ）

以下の教材を使い、進めた。

主教材：『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第２版本冊』１～37 課

副教材：『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第２版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第２版 標準問題集』

（いずれもスリーエーネットワーク）

開講当初は、到着したばかりの日本語未習者である教員研修生と、自国で３カ月ほど日本語を自学自習で学んできた交換留学生１名、そして博士課程に進む予定での、前期の研修コースⅠにも在籍したことのある研究生の３名でスタートした。しかし、そのうちの未習者である教員研修生から週７コマの負担が大きいため、研修コースから外れたいのだが、という相談があり、11 月の連休が明けた時点から、その未修者向けに週１コマを文法紹介と会話練習を行うのに充て、さらに週１回の研究留学生用の補講クラスで学習を継続してもらい、残りの６コマは既習者２名を対象に進めることとした。それ以降、未習者の教員研究生は、本人にとって負担のないペースで学習を進め、現在英語で修了レポートを執筆しているようである。既修者２名は 11 月連休明け以降週２日６コマとなったものの、通常より少々速い速度で熱心に学んだ。ただしクラス内で応用練習を行う代わりに、国際交流センターが運営する共創学習スペース「G－フィロス」に午後常駐している日本語サポート SA を相手に、コミュニケーション課題を進める形で補うようにした。

後期研修コースⅡ 14 期

交換留学生８名が参加した後期研修コースⅡは、「大学生活、日常生活を円滑に送るため、初級で学んだ知識を運用に結びつけ、読む・書く・聴く・話す、の四技能において中級レベルへとコミュニケーション力を高めること」を研修コースⅡの主たる目的とし、クラスではそれぞれの担当者が文化的な要素も授業に取り入れつつ、進めた。

第１週～8 週

主教材：『WEEKLY J book 1 ―日本語で話す 6 週間』 凡人社

副教材：『漢字・語彙の弱いあなたへ』凡人社

：『短期集中 初級日本語文法総まとめ ポイント 20』スリーエーネットワーク

初級レベルの既習文法の中でも受講生が躓きがちな項目については『短期集中 初級日本語文法総まとめ　ポイント 20』で補強しながら、自然な日本語を使って「伝えたいこと」を発話できるようにすることを目的に、トピックごとに語彙や表現を身に付けていった。短文レベルから談話レベルへとまとまった形で話すことに重点を置き、同時に相手の「伝えたいこと」を上手に聴き、自然な形で会話をうまく続ける方法を身につけられるように指導した。答えることができない状態から少しずつ話せるようになり、受講生自身も積極的に教室活動に参加するように変化していく様子が見られた。週に１コマを漢字と語彙をカテゴリー別に日常生活に応用できるものから導入した。

第 9 週～15 週

主教材：『テーマ別中級までに学ぶ日本語』研究社

副教材：『アカデミック・プレゼンテーション入門』 ひつじ書房

後半は中級へのブリッジ教材を用い、学生が関心を持ちそうな話題について、読解と書く活動を増やした。加えて、テーマに沿った聴解練習と意見交換を行った。第９週からプレゼンテーションの準備に取り掛かった。特にその準備作業にはピア・ラーニングを取り入れ、プランニングの段階から互いに意見を述べ合い、ピアからのフィードバックも参考に構成や内容を改善していた。

３．成果発表・プレゼンテーション

2017年度後期最終日には、研修コースⅠ、及びⅡの成果発表を行った。成果発表に向けては、研修コースⅠ，そしてⅡでも、授業の一部で準備を進めたが、テーマは日本の文化、社会に関係があることで、日頃より知りたいと思っていること、疑問に思っていることなどから自由に選んでもらい、必ずインタビューやアンケートを実施し、教室から一歩外に出て日本人のインフォーマントからの情報を得ることを課した。まず、プレゼンテーションの構成や内容について概要を学んだあと、インタビュー調査では、調査協力者との間で使えるような表現を学び、情報を得るためにインタビューやアンケートの質問項目を組み立て、データを収集し、分析していた。アンケート調査では簡易に調査ができるGoogle Formを利用したものが多かったが、その分析では通り一遍の結果の報告となっていたものも見られた。出た結果をいかに考察して調査の目的や知りたいこととつなげるかの指導の補強が必要かと思われる。もう一つの反省点として、本来は人間相手の日本語使用を目的としてインタビューやアンケートを課した訳だが、結果的には、特にアンケート調査では、統計処理やパワーポイント作成など、人と接しない作業に費やす時間が多くなってしまい、人間相手の日本語使用・学習の場の提供にはあまりつながらなかった点が挙げられる。しかし、原稿やパワーポイントをより良いものにしていく段階で、教員のみならず、共創学習スペースであるＧ－フィロスの日本語学習ＳＡとの日本語でのコミュニケーションを促進し、それを通してより良いものに仕上げるよう今後図っていきたい。

成果発表では、遺憾ながら、いずれの作業においても準備不足の学生が数名いた一方、期待をはるかに超えて、いかに自分の伝えたいことを聴衆に伝えるかという点から、文法、語彙、そして発音やパワーポイントの使い方など多岐に亘って改善をし、質の高い成果発表に仕上げていた例もいくつか見られた。アンケート調査の場合は関連の文献調査と組み合わせ、アンケート結果を文献と比較したり、結果から新奇性のある提案を行ったりするものもあった。聴衆であるクラスメートや教員、指導教員からの質問などにも限られた語彙や文法ではあるものの、それらを駆使し答えている姿には、彼らの成長を感じずにはおれなかった。

４．まとめ

2017年度前期第28期と後期29期の研修コースⅠは、指導教員と相談の上A、Bクラスに分けて、受講者の参加できる曜日とレベルに応じて組み、いずれも基礎を固めるコースとなった。大学院生や研究生が含まれるクラスでは、全出席とはいかないものの、寸暇を惜しんで日本語学習に取り組む姿が見られ、これらのニーズも大切にしなければならないと感じている。

その一方で、研修コースⅡは、受講生のほとんどが交換留学生で、遅刻、早退、欠席などを頻繁にする学生もいたが、いかにモティベーションを維持してもらいながら日本語技能の伸長を感じてもらうかの工夫を加えるべきではないかと思う。また第14期には、第13期同様、コミュニケーション重視の教材を前半に取り入れることで、受講生の発話を促すように心がけ、後半は四技能を同時に伸ばすように工夫された総合教科書を用いたが、後半の教材については学生の反応は二つに分かれており、今後検討が必要かと思われる。しかし、学生の反応、学習状況や健康状態などを教員間で共有しつつ、授業計画に修正を加えながら受講生へのサポートは適宜対応できていたと言える。

コース最後の成果発表は、研修コースのハイライトではあるものの、最終的な目標ではない。プレゼンテーションの意義については、事前の理解の共有が必要で、プロセスを重視することを学生にも伝え、内容と構成を練る初期段階も非常に重要であることを認識してもらわなければならないと感じている。そして、アンケートやインタビュー項目の精査とデータ収集を計画的にスムーズに進め、「Gーフィロス」の日本語サポートSAの力も借りつつ、研究の目的に対応する答えを得られるように分析と考察に時間をかけ、自分の意見を積極的に発信していってもらいたいと願っている。

少しずつ形を変えながらも、できるだけ多くの受講生を包含しながら、基礎力固めを確実に行う日本語研修コースを、国際交流センターのコアな部分として、今後も提供してゆきたい。

日本語研修コース開校式

日本語研修コース閉講式

―国際交流センター奥村圭子教授　平成29年度年次報告より

２．日本語補講

日本語補講は、国際交流センターが提供する授業科目以外の日本語教室です。主として大学院生や研究生、研究者またはその家族にも開かれたプログラムとなっています。国際交流センター江崎哲也准教授の年次報告を以下に掲載して報告します。

日本語補講

江崎　哲也

「日本語補講」は、Ｖ時限（16 時 30 分～）以降に開講される学部・大学院の授業科目以外の日本語教室である。単位認定の対象にはならないが、主として大学院生や研究生、研究者のための生活日本語やアカデミック・ジャパニーズの運用力をつけることを目的とし、本学に在籍する留学生や研究者など日本語非母語話者に向けて

開かれているプログラムである。なお、席が用意できる限りは、留学生の家族、研究者・研究員にも受講を認めている。2017 年度は甲府・医学部両キャンパスで４レベル４クラスを開講し、それぞれ前期・後期ごとに週１回 12 週にわたって展開された。なお、受講希望者がどのクラスに出席すればよいか迷っている場合は、補講向けのレベルチェック・テスト、もしくは、「Can-do チェック　『まるごと　日本のことばと文化』 入門 A1＜かつどう＞」[1]により、受講クラスを決定した。

１．　2017 年度前期

2017 年度前期の開講クラス、及び受講者は以下の表の通りである。

表　2017 年度前期日本語補講

甲府キャンパス Kofu Campus　A, B, D & E

医学部キャンパス Medical School Campus A, B, C & E

	月 Monday	火 Tuesday		水 Wednesday	木 Thursday	金 Friday
17:00		16:30–18:00 E 論文作成 Thesis/Essay Writing （岡部　Okabe） @B1–324				
18:00		18:10–19:40 D 初級 2 Beginners 2 （岡部　Okabe） @B1–324	18:00–19:30 E 論文指導・医療の日本語 Thesis/Essay Writing, Japanese for Medical Purposes （宮本 Miyamoto） @看護学科6F 8607	17:30–19:00 A 入門 1 Completely Beginners （井上　Inoue） @B1–323		18:00–19:00 A 入門 Completely Beginners （二宮　Ninomiya） @国際交流 会館
19:00				19:10–20:40 B 入門 2 Early Beginners （井上　Inoue） @B1–323		19:00–20:00 B 初級 Beginners （二宮　Ninomiya） @国際交流 会館
20:00						20:00–21:00 C 初中級 Pre-Intermediate （二宮　Ninomiya） @国際交流 会館
21:00						

2017 年度前期甲府キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者数	使用テキスト/内容
入門 1	4	『まるごと　日本のことばと文化入門 A1 かつどう』　第 1 課～第 9 課
入門 2	11	『まるごと　日本のことばと文化入門 A1 かつどう』　第 10 課～第 18
初級 2	9	『まるごと　日本のことばと文化 初級 1 A2 かつどう』　第 10 課～第 18 課
論文作成	4	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習

[1] 国際交流基金　http://marugotonihongo.jp/download/804/

2017 年度前期医学部キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者	使用テキスト/内容
入門	1	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈1〉 留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）第 1 課～第 8 課
初級	2	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈1〉，〈2〉 留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）第 9 課～第 16 課
初中級	3	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈2〉 留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）第 17 課～
論文指導・医療の日本語	3	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習、医療関連の日本語指導

2017 年度後期の開講クラス、及び受講者は以下の表の通りである。

表 2017 年度後期日本語補講

甲府キャンパス Kofu Campus A, B, C & E

医学部キャンパス Medical School Campus A, B, C & E

	月 Monday	火 Tuesday	水 Wednesday	木 Thursday	金 Friday
17:00				17:30–19:00 A 入門 1 Completely Beginners （大塚 Otsuka） @B1–323	16:30–18:00 E 論文作成 Thesis/Essay Writing （井上 Inoue） @B1–324
18:00		18:10–19:40 C 初級 1 Beginners 1 （岡部 Okabe） @B1–324 18:00–19:30 E 論文指導・医療の日本語 Thesis/Essay Writing, Japanese for Medical Purposes （宮本 Miyamoto） @看護学科6F 8607			18:00–19:00 A 入門 Completely Beginners （二宮 Ninomiya） @国際交流 会館
19:00				19:10–20:40 B 入門 2 Early Beginners （大塚 Otsuka） @B1–323	19:00–20:00 B 初級 Beginners （二宮 Ninomiya） @国際交流 会館
20:00					20:00–21:00 C 初中級 Pre-Intermediate （二宮 Ninomiya） @国際交流 会館
21:00					

2017 年度後期甲府キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者	使用テキスト/内容
入門１	18	『まるごと　日本のことばと文化入門 A1 かつどう』　第 1 課～第 9 課
入門２	18	『まるごと　日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第 10 課～第 18
初級 1	8	『まるごと　日本のことばと文化 初級 1 A2 かつどう』　第 1 課～第 9 課
論文作成	5	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習

2017 年度後期医学部キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者	使用テキスト/内容
入門	3	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈1〉　留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）第 1 課～第 8 課
初級	3	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈1〉, 〈2〉　留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）第 9 課～第 16 課
初中級	5	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈2〉　留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）第 17 課～
論文指導・医療の日本語	3	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習、医療関連の日本語指導

２．　入門クラス等における使用教材の変更

2015 年度後期から、入門クラス等で使用するテキストを変更した。2015 年度前期まで入門から初級クラスで使用していた『20 時間のキャンパス日本語』(英語版・簡体字版)[2]に代わり、甲府キャンパスでは『まるごと　日本のことばと文化』(三修社)を、医学部キャンパスでは『新装版 Basic Japanese for Students　はかせ　留学生の日本語初級 45 時間』（スリーエーネットワーク）を使用することとした。これは、キャンパスにより受講者のニーズが大きく異なっていること、受講者の学習スタイルが変化してきたこと等に対応するためである。また、2014 年度までの甲府キャンパスでは、たとえ着実に日本語を学習していたとしても同レベルのクラスを 2 期・2 回以上受講するケースが散見された。これはクラス間のレベルに大きな隔たりがあったためである。それを確実に解消し、入門 1→入門 2→初級 1（後期のみ開講）→初級 2（前期のみ開講）へとスムーズに上がれるよう設計した。これは JF 日本語教育スタンダードで言えば、A1 前半→A1 後半→A2 前半へと約 2 年かけて進むことになった。

[2] 「山梨大学　戦略的プロジェクト―教育関連プロジェクト―」に、2009 年度、2010 年度ともに採択され、支援を受けた。
・2009 年度プロジェクト名：「大学院留学生のための Survival Japanese　テキスト作成」、プロジェクト代表者：奥村圭子
・2010 年度プロジェクト名：「大学院留学生のための Survival Japanese テキストの改訂―生活情報、中国語による文法解説の付加と e ラーニング教材への展開に向けて―」、プロジェクト代表者：川村隆明

３．　受講者数の変化

表に 2014 年度から 2017 年度の日本語補講の受講者数の推移を示す。

表　日本語補講の受講者数の推移

	2014 年度		2015 年度		2016 年度		2017 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
甲府キャンパス	18	12	13	17	17	32	28	43
医学部キャンパス	11	16	13	14	14	14	9	14
合計	29	28	26	31	31	46	37	57

甲府 3 クラス→｜｜→甲府 4 クラス
｜→医学部 4 クラス
医学部 5 クラス→｜

共通テキスト→｜｜｜→異なるテキスト

2014 年度までは甲府キャンパスで 3 クラス、医学部キャンパスで 5 クラスの日本語補講を開講していたが、医学部キャンパスの 1 クラス当たりの平均受講者数が甲府キャンパスを下回ったため、2015 年度から両キャンパスとも 4 クラスとした。また、2015 年度後期からは各キャンパスの受講者のニーズにより適合したテキストに変更し、入門期から初級までの連続性があるクラスを開講した。これらによって、日本語補講の受講者数が 2014 年度の 57 人から 2017 年度の 94 人まで増加した（約 65%増）。

４．　まとめと今後の課題

2015 年度から 2017 年度にかけて日本語補講に対して 3 つの非常に大きな変更（①両キャンパスのクラス数の変更、②使用テキストの変更、③各クラスのレベルに連続性を持たせたこと）を行ってきた。これらの改革と留学生数の増加が相まって、2017 年度の日本語補講の受講者数は 94 人となり、過去最大となった。また、甲府キャンパスの日本語補講内では、G-フィロスを利用した実践的な練習も定期的に行われた。

日本語補講の受講者の多くは、英語で研究する学生であるが、生活に必要な日本語の習得を切望しており、一部は日本での就職も希望している。今後とも一層の日本語補講の充実を図り、大学院生や研究生などの日本語力の向上を目指して、彼らの日本での研究生活をより充実したものにしていくことが求められる。

―国際交流センター江崎哲也准教授　平成 29 年度年次報告より

３．日本語・日本事情教育

国際交流センターでは、主に学部留学生を対象として、日本語・日本語関連科目も開講しています。国際交流センター江崎哲也准教授の年次報告を以下に掲載して報告します。

日本語・日本語関連科目

江崎　哲也

主に学部留学生を対象として開講されている、国際交流センターが提供する全学共通教育科目の日本語・日本語関連科目について 2017 年度の報告を行う。

１．開講科目

2017 年度開講の日本語・日本語関連科目は以下の通りである。科目名のⅠは前期、Ⅱは後期開講であることを指す。

前期（計９科目）

日本語初中級ＩＡ、日本語初中級ＩＢ、日本語中級ＩＡ、日本語中級ＩＢ、
日本語中上級Ⅰ、日本語上級Ⅰ、日本語演習Ａ、
日本事情Ⅰ、Language & Communication across Cultures

後期（計８科目）

日本語初中級ⅡＡ、日本語初中級ⅡＢ、日本語中級ⅡＡ、日本語中級ⅡＢ、
日本語中上級Ⅱ、日本語上級Ⅱ、
日本事情Ⅱ、異文化間コミュニケーションＢ

クラス分けは、前期・後期の履修申告の直前に行われたプレイスメントテストの結果に基づいて行った。レベルは初中級、中級、中上級、上級の４レベルとし、演習[3]は中級以上で学部２年生以上の学生を対象とした（図１）。

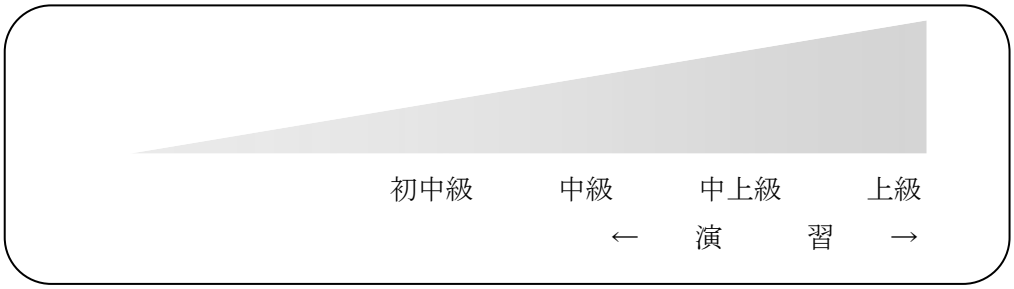


図１　日本語のレベル

各科目の受講生の学年、身分の内訳は、表１の通りである。なお、表中の NNS とは留学生、及び日本語を母語としない（あるいは日本語を第一言語としない）学生を指し、NS とは日本語を母語とする（あるいは日本語を第一言語とする）学生を指す。

3 「日本語演習」は口頭発表能力を向上させることを目的とした科目であるが、発表のテーマについては特に与えられず、テーマ選びから受講生自ら行わなければならないため、「中級以上、かつ学部２年生以上」という制限を設けている。しかしながら、他の授業との兼ね合いで、前期に受けられる日本語科目がない場合に限り、１年生の受講も認めている。

表１　2016 年度　日本語・日本語関連科目の受講生[4]

		受講生総数	学年・身分別にみた受講生						
			１年	２年	３年	４年	交換生	院生	研究生・教員研修生等
初中級ⅠA	NNS	15	5		1		8		1
初中級ⅡA	NNS	14	4				8		2
初中級ⅠB	NNS	17	5	1	1		8	2	
初中級ⅡB	NNS	14	5				8		1
中級ⅠA	NNS	5	1	2			1	1	
中級ⅡA	NNS	7	2				2	1	2
中級ⅠB	NNS	13	4	1			1		7
中級ⅡB	NNS	13	5				3	1	4
中上級Ⅰ	NNS	8	1				3	1	3
中上級Ⅱ	NNS	4	1				3		
上級Ⅰ	NNS	8	1			1	3	1	2
上級Ⅱ	NNS	4		1	1				2
演習A	NNS	6	1	2			1		2
日本事情Ⅰ	NNS	11		2			8		1
	NS	28	17	7	3	1			
日本事情Ⅱ	NNS	14	2	1			10		1
	NS	28	16	6	5				1
Language & Communication across Cultures	NNS	10	1	1	2		6		
	NS<日>	14	9	3	1	1			
異文化間コミュニケーション	NNS	15	6		1		8		
	NS	21	10	9	2				

日本語科目（初中級、中級、中上級、上級、演習）の受講生数（延べ人数）は、2014 年度が 113 人で、2015 年度が 98 人と減少したが、2016 年度は 122 人、2017 年度は 128 人と徐々に増加してきた。ただ、GPA を強く意識しているためか、卒業要件に必要な日本語科目の履修が終わったと思われる学部 3・4 年生の受講生が少ない傾向は続いている。

大学院生・研究生については、英語で研究することになっている学生であっても、少しでも日本語を高めるべく積極的に日本語の授業に参加する姿が見られた。国際交流センターでは、ほかにも入門レベルから初中級レベルの日本語補講と日本語研修コースを開講しているが、それを修了した大学院生・研究生がさらに日本語の授業を受け、研究活動や日本での就職などに結び付けようとしているようである。

日本語関連科目（日本事情、Language & Communication across Cultures、異文化間コミュニケーション）は、授業の性質上、受講生数の上限を定めているが、2014 年度は 163 人（うち日本語非母語話者 43 人）、2015 年度は 124 人（うち日本語非母語話者 43 人）、2016 年度は 126 人（うち日本語非母語話者 42 人）、2017 年度は 141 人（うち日本語非母語話者 50 人）で漸増しており、共修授業に興味を持つ日本人学生が増えてきたことがうかがえる。

[4] ここでいう受講生は、単位取得希望学生（学部生・交換留学生）以外の、大学院生や研究生なども含めている。

表２　日本語・日本語関連科目の受講生数の推移

	2014 年度		2015 年度		2016 年度		2017 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
日本語科目(NNS)	74	39	57	41	62	60	72	56
日本語関連科目(NNS)	19	24	19	24	19	23	21	29
日本語関連科目(NS)	65	55	33	48	35	49	42	49
	158	118	109	113	116	132	135	134

→前期「異文化間コミュニケーション」非開講

→前期「Language & Communication across Cultures」開講

２．　2017 年度の開講記録

各科目は、以下のような目的・内容で教室活動が行われた。

授業タイトル（主な内容）	担当	主な使用テキスト、参考書	内容				
			読む	書く	聞く	話す	文法
初中級ＩA（会話と文法）	仲本	『J.Bridge to Intermediate Japanese』(凡人社)	△	△	◎	◎	○
初中級ⅡA（文法の復習と会話）	奥村	『J.Bridge to Intermediate Japanese』(凡人社)	△	○	◎	◎	○
初中級ＩB（作文）	江崎	『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』（アルク）	△	◎	△	△	○
初中級ⅡB（少し専門的な文章の読み方）	江崎	『改訂版大学・大学院　留学生の日本語 ①読解編』（アルク）	◎	△	△	△	○
中級ＩA（読解）	江崎	『改訂版大学・大学院　留学生の日本語 ③論文読解編』（アルク）	◎	△	△	△	○
中級ⅡA（読解、意見のまとめ方）	伊藤	『中・上級日本語教科書 日本への招待　テキスト』(東京大学出版会；第２版)	◎	○	△	○	○
中級ＩB（場面や相手に沿った適切な話し方）	伊藤	『日本語上級話者への道―きちんと伝える技術と表現』（スリーエーネットワーク）	△	○	◎	◎	○
中級ⅡB（作文）	伊藤	『小論文への 12 のステップ―中級日本語学習者対象』（スリーエーネットワー	△	◎	△	△	○

		ク）					
中上級Ⅰ（会話・聴解・発表）	奥村	『中上級学習者のための日本語会話』（スリーエーネットワーク）	△	△	◎	◎	△
中上級Ⅱ（論理的な文章の書き方）	仲本	・『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』（アルク）	○	◎	△	△	○
上級Ⅰ（レポート・論文の書き方）	江崎	『論文ワークブック』（くろしお出版）	△	◎	△	△	○
上級Ⅱ（発表のし方と、新聞記事などの資料の読み方）	江崎	『トピックによる日本語総合演習　上級』、『トピックによる日本語総合演習上級用資料集』（スリーエーネットワーク）	○	○	◎	◎	△
演習A（発表のし方）	江崎	『大学生のための日本語―効果的学習のために』（産業能率大学出版部）	△	△	○	◎	△
日本事情Ⅰ	伊藤	『日本の風俗起源がよくわかる本』（大和書房）	日本人の学生と一緒に、日本の文化や日本事情を勉強する授業。文化や社会について学びながら、日本語力を伸ばす。テーマに基づくグループ・ディスカッションを行い、各国・地域や家庭の習慣、文化について紹介しあう。（Ⅰ とⅡは別内容）				
日本事情Ⅱ	伊藤	『日本の風俗起源がよくわかる本』（大和書房）					
Language & Communication across Cultures	奥村	－（授業内指示、自主作成教材）	This class aims to equip students to understand the role of language and communication across cultures highlighting the importance of intercultural communication and language. In the class consisting of both international and Japanese students, all the interactive activities are conducted in English.				
異文化間コミュニケーション	奥村	－（授業内指示、自主作成教材）	日本人の学生と一緒に、自分の文化以外の文化をどう理解するか、その文化をもつ人とどのようにコミュニケーションをするかを勉強する授業。				

３．　まとめと今後の課題

2017 年度の日本語・日本語関連科目の日本語非母語話者の総受講生数は 178 人で、前年度比 9%増であった。2015 年度から 2017 年度にかけて受講生が増加したのは、留学生に対して日本語科目の重要性を繰り返してきたことや、留学生数の増加などが要因として考えられる。

2017 年度は、13 科目ある日本語科目すべてに「G-フィロス」の利用を推奨・義務付けた。それによって、日本語学習の時間が増加して、留学生の日本語力の強化にもつながったようである。また、各授業の課題以外でも日本語サポート SA を活用する事例が多数見られ、受講生が G-フィロスを積極的に利用する姿が見られた。日本語母語話者と日本語非母語話者の交流の場を広げるためにも、今後も積極的に授業の課題の一部を G-フィロスで行うような仕組みを取り入れていきたい。

一方、日本語関連科目（「日本事情」、「異文化間コミュニケーション」、「Language and Communication across Cultures」）は、日本語母語話者の受講生数も増加した（前年度比 19%増）。入学当初から異文化に興味を持っている学生だけでなく、G-フィロス等学内で留学生に接してから、あるいは留学に興味を持ってからこれらの授業の必要性に気付く学生もいるようである。これらの科目の履修の重要性を訴えつづけ、今後も共修型授業を通して、グローバル人材育成のためにも学生の異文化理解力を高めていき、留学などにもつなげていきたい。

―国際交流センター江崎哲也准教授　平成 29 年度年次報告より

４．留学生支援・相談・文化交流

国際交流センターでは、留学生の生活・就学に関する相談・指導を行うだけでなく、文化体験・交流や講演会等、留学生にとって有益な行事を提供することによって、留学生が日本での生活に馴染み、学業に取り組める環境を整えるための支援も行っています。これら留学生支援・相談、文化交流について、国際交流センター伊藤孝惠准教授の年次報告に写真を加えて掲載し、報告します。

留学生支援・相談、文化交流について

伊藤 孝惠

Ⅰ．指導・相談

山梨大学における留学生のための相談体制として、国際交流センターに留学生相談室が設置されているほか、国際交流センターの各教員がそれぞれオフィス・アワーを設けている。国際交流センターでは、留学生のみならず、海外留学や国際交流、G-フィロスに関心のある学生や、日本語教育に関する相談で訪れる学生にも対応している。

本稿では、そのうち、2017 年度に留学生相談室で対応した主だった指導・相談、及び、国際交流センター・国際部で行った主な支援行事や交流行事について報告する。

1. 修学

成績不振の留学生や授業欠席の続く留学生に対する呼び出し面談は、年間を通して回数を重ねて継続的に支援している。新年度初めの留学生ガイダンスで行ったストレスチェックで気になる留学生に対しても、早めに呼び出して様子を聞き、継続的に見守っている。母国の奨学金を得て留学したものの、専攻が自分に合っておらず辛いといった相談もあった。不登校の留学生のケースでは、学科の関係教職員と対応策を検討し、本国から留学生の両親を呼び寄せ、話し合いの場をもった結果、退学して別の学校に移ることとなった。留学生の問題では、留学生自身が母国の親に心配をかけまいと、自分の問題を打ち明けずにいることが多く、遠距離であることや言葉の壁もあり、両親と連携して支援にあたるのが難しい。

2. 進路・キャリア形成

4 月 20 日と 5 月 1 日に学部 3 年次、4 月 21 日と 5 月 11 日に学部 2 年次に対して、卒業後の進路について、話し合い、考える機会を設けた。大学全体としても、低学年のうちから卒業後のキャリア形成を見据えた授業が開講されていたりするが、留学生ならではの事情もあって、留学生の進路選択や就職活動への出遅れが目立つ。そのため、卒業後の進路を視野に計画的に大学生活を送ってもらうよう、自分の将来のビジョンと、そのためにこれから何をすべきか話し合った。また、教員からは、日本での就職活動のスケジュール、及び、自己分析、業界研究、企業研究、職種研究とインターンシップについて、それぞれの重要性を説明した。

留学生相談室には、12 月下旬頃から春にかけて、日本で就職活動をする学部 3 年生と修士 1 年生による、エントリーシートの添削や面接練習のための来室が多かった。エントリーシートでは、単に日本語の添削に留まらず、対話を通じて自己分析をし直したり、会社の HP 等を見ながら一緒に企業研究を行ったりするなど、一人一人に合わせたサポートが必要であった。

3. 新入生個人面談

新年度前期に、学部新入留学生に対する個人面談を実施し、入学後の様子を聞いている。日本の日本語学校などを経て入学してきた留学生は、日本での生活にはほぼ問題ないと話すが、バスなど公共交通機関が不便だと感じている者が多い。友人は同国や同学科の留学生を中心に、ボランティアの日本人学生とお昼ごはんを食べることもあるという留学生もいれば、クラスメイトとは挨拶程度しかしないという者もいる。また、難しい授業や課題があって、単位取得も危ぶまれる状態にあっても、クラスメイトに教えてもらうという留学生は総じて多くない印象を感じている。インターネットなどを使って自分で調べたり、大学の同国出身の先輩に教えてもらったり、母国にいる友人や日本の他大学に留学している同国の友人に電話や SNS で聞いたりと、自分で解決しようと努力したり、同国人の先輩・友人に頼る留学生が多かった。今後、学年が上がり専門科目が増えるにつれ、遠く離れた同国の友人を頼るのにも限界が出てくるし、必修科目で単位を落としたり問題を積み残したりしたままでいると、2 年次以降の履修や学修に負の影響を及ぼすと思われる。そのため、1 年次の時点から、日本人学生と協働学習ができる関係作りの重要性を感じる。

Ⅱ．支援

1. 留学生ガイダンス（前期：4 月 4 日　後期：9 月 22 日）

例年通り、前期と後期の初めに新入留学生を対象にガイダンスを開き、その後、在学生も含めて日本語プレイスメント・テストと、新入生を連れたキャンパス・ツアーを実施した。ガイダンスでは、これまでと同様、日本語・日本語関連科目の履修や、国際交流センターの指導・相談体制、国際企画課より在留資格や一時帰国の際などの諸手続きの説明のほか、仙台国際交流協会が制作した多言語防災ビデオ「地震！その時どうする？」の英語版を流し、パンフレットの配布とともに、災害に備える心構えと準備を訴えた。また、日本語プレイスメント・テスト前には、新入生、在学生に対して、悪質な勧誘に対する注意喚起を行い、車両保険への加入を確認するアンケート、ストレスチェックシートを配布し、回答してもらっている。回収したストレスチェックシートは、留学生相談担当教員が確認し、必要に応じて個別面談を行っている。

2. 留学生チューター制度 / 学部新入留学生に対するボランティア活動

(1) 留学生チューター制度

入学後一年目の大学院生や研究生の留学生に対し、指導教員の指導の下で、主に同じ研究室の上級生がチューターとして、研究や勉学、日常生活における個別の相談・補助を行っている。前期は、5 月 15 日、22 日、6 月 7 日、後期は 10 月 19、20、31 日の昼休みに、説明会を開き、国際企画課の職員より手続きの説明が行われた後、活動方法や活動内容、活動する際の留意点などを、留学生相談室で作成した資料を基に説明した。また、成績不

振や勉学に不安のある学部2年次以上の留学生に対しては、クラス担任の教員と面談の上、同学年・同学科の学生をチューターとして配置して、学生同士の協働学習を促し、学習支援の一助としている。2年次以上のチューターの場合は、全体説明ではなく、留学生相談室で当該留学生とそのチューターに対して、個別に様子を聞きながら、その留学生に合った支援を一緒に考えてもらい、各学期初めには、留学生との個別面談で修学状況を確認している。

チューターには、毎月謝金申請のための報告以外に、メールで活動報告を送ってもらっている。これは、チューター活動が順当に行われているかの確認とともに、留学生の様子を知らせてもらい、問題の予防や早期発見・解決につなげたい意図があって行っている。また、チューター活動の中での問題をチューター学生自身が抱え込まないよう、チューター学生への指導・支援という意味もある。送られてきたメールには、コメントを返し、今後のチューター活動に役立ててもらうようにしている。

(2) 学部新入留学生に対するボランティア活動

学部1年次の留学生に対し、同学年・同学科の日本人学生を複数名、自薦やクラス担任の推薦により、ボランティア登録し、基本的には一年間、留学生との交流や協働学習を推進している。登録した学生は、要件を満たせば、自発的教養科目（ボランティア活動）の1～2単位を取得できる。前期は4月26日、後期は11月9日に説明会を行った。前期・後期に各数回、留学生と日本人学生の相互理解と親睦を深めるため、お昼休みの時間に交流会を開いたほか、校外活動として、学科やグループごとに関心のある日本文化体験を計画し活動終了後には報告書を提出してもらって、活動費の一部を支援した。学生たちは、キャンパスから離れ、山梨県立博物館や浅間神社、浅草などを計画して行き、交流を深めたようであった。

3. 国際交流会館

甲府国際交流会館では、前期は4月7日17時から、後期は10月17日18時半から、それぞれ国際交流センター教員、国際企画課職員、会館チューター2名、及び居住者が一堂に会し、オリエンテーションを行った。また、甲斐路分館については、4月24日にオリエンテーションを行った。

甲府国際交流会館のオリエンテーションでは、まず総合情報戦略部情報システム課の職員の方から、違法ソフトのダウンロードやファイル交換ソフトWinnyなどの使用に対する注意喚起があった。その後、会館チューター学生より、会館のルールや緊急連絡先や避難場所、諸経費の支払い方法等について、日本語と英語が併記されたパワーポイントを使って説明がされた。甲府甲斐路分館においても、関係教職員と居住者全員との間で、緊急連絡先や避難場所、経費の支払い方法、ゴミの分別やなどについて確認した。

4. 山梨県警による留学生のための防犯講話（10月26日）

山梨県でも2016年には5,070件の犯罪が起こっており、また留学生の交通事故も後を絶たないことから、2017年度も甲府キャンパスにて、山梨県警察本部の警察官を招いて「防犯講話」を開催し、45名ほどの留学生が参加した。警察の方がパワーポイントを基に説明し、本学の教員が英語で通訳して、留学生に理解してもらえるようにした。空き巣や自転車・バイクの盗難、痴漢、危険ドラッグ、交通ルールと自動車・自転車保険、警察への通報、修郎制限と在留カード、Ｊアラートなどについて、要点を押さえた説明がされた。講話の最後には、警察より、防犯グッズが留学生一人一人に提供された。

茅センター長の挨拶

熱心に耳を傾ける留学生たち

防犯グッズの配布も

5. 留学生のための就職ガイダンス / 就職セミナー

7 月 7 日の昼休みに、本学のキャリアセンターの協力を得て、「留学生のための就職ガイダンス」を開いた。キャリア・アドバイザーから日本の就職活動の流れと要点の説明があり、参加した留学生からは多くの質問が寄せられ、留学生の就職活動への関心の高さを窺わせた。また、11 月 17 日、12 月 15 日、1 月 18 日の、それぞれ 16 時半より 2 時間ほどかけて、平成 31 年 3 月卒業・修了の留学生のための自己分析・業界研究・企業研究・職種研究のセミナーを開催。MY STRENGTH カードや VPI 職業興味検査でといったツールを用いた自分の強みや自分の関心ある職業領域を理解したほか、ポストイットを貼りながら、自分の経験とそれで得たものなどを深く掘り下げるワークなどを行った。限られた時間ではあったが、一人で行いづらい自己分析等を、同じ時期に就職活動をする留学生が集まって行うことで、各々の就職活動の一助となったのではないかと思われる。そして、このセミナーに参加した留学生の大半が、留学生相談室での継続的な就職指導・支援へと結びついたことも、セミナー実施の効果だと思われる。

Ⅲ. 文化交流

1. ホーム・ステイ / ホーム・ビジット　(4 月 22、23 日)

ホーム・ステイ　：ホストファミリー　2 組　　留学生　2 名

ホーム・ビジット：ホストファミリー　6 組　　留学生　7 名

地域の国際交流団体や地域の方々、及び大学教職員にホストファミリーとしてご協力をいただいて、平成 29 年度も留学生が、日本人宅を訪問し、交流する機会を得ることができた。これまでのホストファミリー・留学生の双方からのアンケート結果を参考にし、ホストファミリーへの早めの連絡や留学生への訪問の際のマナーの徹底などの改善をした功も奏してか、全体的に問題なく概ね好評であった。実施時期として、ラマダンや大学の試験期間を避けた結果、新学期早々の日程となってしまったが、過ごしやすい気候で有意義な一時を過ごせたようである。

2. 留学生の実地見学旅行（ 9 月 20、21 日）

日本文化体験を通じて留学生の日本文化理解を深める実地見学旅行は、平成 29 年度は静岡へ一泊二日の見学旅行をした。留学生 33 名のほか、留学生との交流や引率の補助を行う日本人学生 5 名と引率教職員 2 名が参加した。一日目は、龍潭寺や浜松城を見学し、二日目は世界文化遺産となっている三保の松原を散策した後、焼津にて食品サンプル作りを体験した。食品サンプルは、日本の食堂の店頭やレストランのショーケースに並んでいるのを初めて見て驚く留学生が少なくなく、皆、熱心に指導を受けながら海老の天ぷらなどを作った。昼食の後は、久能山東照宮を訪れ、交流と日本文化を堪能した旅行となった。

龍潭寺の日本庭園を見学

三保の松原での集合写真

食品サンプル作り体験の様子

3. 留学生と日本人学生の交流合宿（平成 30 年 2 月 27、28 日）

留学生と日本人学生間の親睦と互いの理解を深めるため、みのぶ自然の里にて一泊二日の交流合宿を行った。留学生 7 名、日本人学生 6 名が参加し、一日目は宿泊施設の研修室で、グループに分かれて「コンセンサスゲーム」を行い、互いの意見や価値観の違いを認めつつ、グループとして一つの答えを導く過程を通して交流を深めたほか、夕食後には交流カードを使って互いをよく知る時間を作った。二日目は、身延山久遠寺を見学し、それぞれゆば料理や買い物などを楽しんだ。

研修の様子

グループディスカッションの様子

宿泊施設での集合写真

4. その他

留学生の華道体験（11 月 2 日）

本学華道部の雨宮先生と跡部先生、部員の学生たちの協力を得て、「留学生の華道体験」を、今年も大学祭に合わせて行うことができた。中国、マレーシア、オーストラリア、イギリス、フランスの留学生 11 名が参加し、ストレリチア、アレカヤシ、クジャク草、ワーネッキーの 4 種の花材を、先生や部員の学生たちの指導の下、銘々の思いとセンスで花器に活けていた。花材と留学生の個性が反映された作品と一緒に写真を撮ったりした後は、大学祭で展示し、多くの来客に見てもらった。

―国際交流センター伊藤孝惠准教授　平成 29 年度年次報告より

５．その他留学生支援のための行事等

ここでは、前項までの伊藤准教授からの年次報告に含まれなかったその他の留学生支援のための行事について報告します。

（1）甲府国際交流会館における火災訓練：平成 29 年 5 月 18 日（木）

甲府国際交流会館に居住する留学生たちが、芙蓉寮（男子学生専用混住寮）と合同で火災訓練を実施しました。参加者は、会館入居者 36 名、芙蓉寮入居者 74 名、職員 8 名、指導者 2 名でした。当日は、火災を想定して、居室から緊急避難し、全員が芙蓉寮の中庭に集合し、点呼の後、消火器と放水ポンプによる消火訓練を実施しました。参加した留学生のうち 5 名が、実践的な消火訓練を体験しました。

留学生にとって、日本は地震の多い国だという印象があるため、防災避難訓練の実施を希望する学生が多くなっています。最後には、地震等の災害でも芙蓉寮中庭が避難場所になることを確認して終了しました。

早朝、芙蓉寮中庭に集合した学生たち

放水ポンプの説明を受ける留学生

放水ポンプによる消火訓練

（２）学長主催山梨大学外国人留学生懇談会：平成 29 年 12 月 4 日（月）

甲府キャンパスにおいて「平成 29 年度学長主催山梨大学外国人留学生懇談会」を開催し、ご来賓の皆様、外国人留学生・研究者とその家族、本学教職員ら約 140 名の参加がありました。この懇談会は、外国人留学生・研究者とその家族が、来賓の方々および大学教職員との交流によって相互理解を深めることを目的として、毎年行っているものです。

懇談会の冒頭では、主催者である島田学長からの挨拶に続き、ご来賓の方々を代表して甲府市の樋口　雄一 市長及び中央市の田中久雄 市長からご祝辞を頂戴し、また、本学から 2 名の留学生代表がお礼の言葉を述べました。歓談中、余興として、パキスタン出身の留学生が日本語を用いた小話を、また、本学留学生宿舎である国際交流会館の入居者が合唱を披露し、会場は大いに盛り上がりました。

挨拶する島田学長

挨拶する樋口甲府市長

挨拶する田中中央市長

懇談会の様子

日本語で小話を披露する
パキスタン出身留学生

出席者による記念撮影

III.　国際化教育

国際的な環境で勉強できるキャンパスの整備に向け、国際交流センターでは「G-フィロス（グローバル共創学習室）」を中心に、日本人学生と外国人留学生が共に学び、異文化理解・交流を行う機会を数多く設けています。

G-フィロス

グローバル共創学習室『G-フィロス』とは、国際的なコミュニケーションを育成する場として、異文化理解や語学学習を通じ、学生間で互いに学び合う学習環境のことです。日常的には、英語に限らず語学の勉強を学生同士でお互いにサポートするようなサービスを提供し、それ以外にも異文化交流イベントを開催するなどして、学生の学び合う環境を整えています。

１．　交流イベント

G-フィロスでは、キャンパスのグローバル化を促進するために、学生や教職員と留学生が交流する場を設けています。主に文化紹介シリーズのイベントや、毎年恒例の行事になりつつある夏祭りやホリデーパーティなど、誰もが気軽に参加し異文化交流できるイベントを１年を通して開催しています。

（１）ヨーロッパ文化紹介：平成 29 年 5 月 12 日（金）

シリーズで不定期に開催している国際交流センター文化紹介イベントで、ヨーロッパ文化紹介イベントを行いました。今回は、英国（ウェールズ）、ドイツ、ハンガリー、フランスからの留学生が、自国の料理も用意して、参加者たちに自国の文化を紹介しました。食文化を通じての文化紹介は、各国の文化紹介として最も親しみやすく参加しやすいため、たくさんの参加者が会場を訪れました。参加者は、留学生からの文化紹介に興味深そうに聞き入り、実際にふるまわれた料理を楽しみ、お互いの国の文化について話し合っていました。

今回は新年度となって最初のイベントであったにも関わらず多くの学生が会場を訪れ、英語・日本語学習サポートなどの G-フィロスの活動を知ってもらう良い機会となりました。

文化紹介に熱心に聞き入る参加者

文化紹介を行う留学生

参加者でいっぱいになった会場

（２）G-philos Summer Bash!：平成 29 年 7 月 12 日（水）

国際交流センター主催のイベント「G-philos Summer Bash!」を開催しました。このイベントは、本学学生および留学生を対象に、異文化交流を促進することを目的としています。

まず「様々な国の民族衣装を着て・見て、お互いの文化を理解しよう！」をコンセプトに、留学生・日本人学生たちが各国の民族衣装を着て集まり、それぞれの衣装や文化について語り合いました。その後、中国・杭州電子科技大学とオーストラリア・シドニー工科大学からの日本語・日本文化短期プログラム研修生も交えて流しそうめんを行い、総勢 100 名を超える学生らが日本の夏の風物詩を楽しみました。当日、G-フィロスでは鮮やかな七夕の飾りつけが行われ、G-フィロスを訪れた学生や教職員は短冊に願い事を書いて笹の葉に飾り、七夕を満喫しました。

各国の民族衣装を着て集まる催し

学生手作りの流しそうめんで文化体験

七夕飾りも夏祭りの恒例行事に

（3）ホリデーパーティー：平成 29 年 12 月 12 日（火）

平成 29 年度国際交流センター主催イベント「ホリデーパーティー」を開催し、留学生・日本人学生・教職員ら計 72 名が参加しました。このパーティーは、学生ら参加者が互いに親交を深めるとともに、各国の年末年始のホリデーシーズンにまつわる文化を紹介し合うことで、異文化への理解を深めることを目的に毎年行われているものです。

今回は、オーストラリア・マレーシア・バングラデシュ出身の留学生が、母国の文化やホリデーシーズンの伝統的な過ごし方をクイズを交えながら紹介しました。また、ビンゴゲームや各国の言語を使った伝言ゲームなどが行われ、参加者たちはパーティーを楽しみました。

留学生による自国の「ホリデー」文化紹介

会場の様子

参加者集合写真

（4）日本文化紹介イベント「Oshiruko & New Year?」：平成 30 年 1 月 10 日（水）

国際部・国際交流センター主催文化紹介イベントのひとつとして、「Oshiruko & New Year?（お汁粉とお正月の関係とは？）」を開催し、留学生・日本人学生・教職員ら約 40 名が参加しました。

このイベントは、学生ら参加者が互いに親交を深めるとともに、留学生の日本文化への理解を深めることを目的に、初めて行われました。イベントでは、日本の伝統的な正月文化が紹介された後、日本の風物詩であるお汁粉が振る舞われました。参加者はお汁粉を食べながら母国の正月文化を紹介し合うなど、心安らぐひと時となりました。

学生による日本の正月文化紹介

会場の様子

お汁粉を堪能する参加者

２．Student Assistants（SA）の活動

Student Assistants（以下 SA）は、日本人及び留学生を短期雇用する形で運営しており、日本語・英語その他言語のサポートを行っているほか、前項で紹介した異文化交流イベントの際などに中心的役割を担っています。以下に、日本語サポート SA と留学生 SA の 2 つの SA の活動について報告します。

（1）日本語サポート SA

日本人学生及び日本語堪能な留学生で行っています。SA を勤める学生が指定の時間内つねに在席しており、留学生のレポートやその他課題の日本語チェック、日本語能力検定試験等の勉強サポートなど、日本語を学ぶ留学生がいつでも気軽に、無料でサポートを受ける事が出来るようになっています。日本語 SA によるサポートは、日本語・日本語関連科目の中でも活用されており、留学生の日本語学習において非常に大きな役割を担うようになりました。日本語そのものの学習サポートだけではなく、SA を勤める学生の学問的な専門分野も幅広く、日本語で専門分野を学ぶ留学生の大きな助けとなっています。そのほか、日本文化体験イベントや G-フィロス Facebook ページへの投稿なども、日本語 SA が中心となって行っています。サポートの受けられる時間は前期・後期ごとに G-フィロスタイムスケジュールを掲示して利用者に知らせています。

（2）留学生 SA

留学生 SA は、イングリッシュ・カフェ、英語学習サポート、諸外国語カフェを行っています。イングリッシュ・カフェは昼休みの時間帯に開催しており、日本人・留学生問わず、英語学習を目的とした多くの学生が、昼休みを利用して気軽に留学生との会話・交流を楽しめる形態となっています。英語学習サポートは、主にⅤ限目・Ⅵ限目の時間帯に行っており、日本語サポート SA の活動と同様、英会話を中心に、学生の英語学習における様々な相談に対応しています。

諸外国語カフェについては、その年、学期によって様々で、これは、その時々で SA を勤める留学生の母国語で開催してもらうためです。カフェで行う活動の内容は SA を勤める留学生が自ら発案して行っており、「○○（国名）カフェ」という形で、母国の文化紹介をしながら言語も学んでもらうという形式になっています。平成 29 年度は、前期にドイツ語とウェールズ語、後期に中国語、英語（オーストラリア）、ドイツ語が行われました。

H29 前期の G-フィロスポスター

昼休みのイングリッシュ・カフェ

英語学習サポート

ウェールズ語カフェ

３．英語学習・留学アドバイザーによるサポート

英語学習・留学アドバイザーは、常時 2 名体制をとって学生の英語学習と海外留学のサポートを行っています。英語学習・留学に関して個別相談を受けるほか、先に紹介した留学生 SA のイングリッシュ・カフェや英語学習

サポートを SA と共に運営しています。プロのアドバイザーの指導や相談を、本学学生であれば無料で受けることができるとあって好評で、導入した平成 26 年度以降、利用者は年々増加傾向にあり、安定的な運用を行っています。

平成 29 年度は、アドバイザーが主催する様々な英語学習・留学関連イベントが数多く行われましたので、これらイベントについて以下に報告していきます。

（1）今の力を知ろう！TOEIC®模試：平成 29 年 4 月 19 日（水）

本学が導入している学生向け e ラーニング教材「アルクネットアカデミー２」の説明と、本教材を使用しての 1 時間の TOEIC®ハーフ模試を行うイベントを開催しました。これは、学生の継続的な英語学習や TOEIC®のスコアアップをサポートする目的で、このようなイベントによりこのオンライン教材に触れることで e ラーニングの良さを実感してもらい、継続的な英語学習につなげてもらおうという趣旨で行いました。

イベントでは「アルクネットアカデミー２」開発者を招いて説明を行ってもらったのち、1 時間の TOEIC®ハーフ模試を実施してすぐに答え合わせをして、TOEIC®に関する質問にも答えてもらいました。さらにイベント後は、英語学習アドバイザーが継続的な個別相談に対応しました。事前の周知活動も功を奏し 69 名もの参加者があり、イベントは盛況となりました。

（2）TOEIC ® ワークショップ：平成 29 年 5 月 9 日（火）

このイベントは、平成 29 年 4 月より、TOEIC®L&R テストが新形式の問題を含んだ内容に変わったことを受けて、受験前の対策として改めて TOEIC ®学習法を学んでもらうことを目的に、全学生・全教職員を対象にして行われました。イベントでは、TOEIC ®実施団体（IIBC）の担当者を招いて、新形式のテストについてのお話をいただくとともに、サンプル問題冊子を実際に参加者に閲覧してもらいました。これから TOEIC ®学習を始める人、新形式への不安を解消したい人、などに重きを置いて参加を呼びかけた結果、当日は 59 名の参加がありました。

（3）英会話セミナー：会話で使える『とっさの一言』！：平成 29 年 5 月 12 日（金）

テスト・ビジネス対策だけではなく、楽しく英語を学んでもらおうという趣旨で、全学生・全教職員を対象に、「会話で使える『とっさの一言』！」と題した英会話セミナーを開催しました。目的は様々でも、よりスムースなコミュニケーションをかなえるための「語感」トレーニングを軸として、便利な英語フレーズや、ニュアンスや用法が異なる表現の使い分けを紹介しながら、参加者に会話の練習も行ってもらう内容となりました。事前申し込みだけで参加可能人数が上限に達し、満員のイベントとなりました。

（4）留学してみたい！留学はじめの一歩：平成 29 年 7 月 5 日（水）

留学に関する基礎知識を紹介することによって、留学を考えている学生を後押しするイベントです。全学生が対象ですが、在学中の留学には教職員の理解も欠かせないことから、教職員も対象として参加者を募集しました。イベントでは、大学が提供している短期の海外インターンシップ付き語学研修から交換留学までを幅広く紹介し、申し込みの必要書類、費用や事前に必要な試験等について紹介し、具体的な留学の計画へ一歩を踏み出すことを手助けするような内容となりました。イベントの後半には実際に留学を経験した本学学生とのトークセッションもあり、参加者は、留学に対する疑問や不安を解消するべく、経験者の話に熱心に耳を傾け、質問するなどしていました。

（5）就職で差がつく！TOEIC® Speaking & Writing Tests：平成 29 年 10 月 11 日（水）

近年、注目の高まってきている「TOEIC® Speaking & Writing」の積極的な受験を促すべく、このテストについて知ってもらうためのイベントを開催しました。英語学習アドバイザーがテストの概要や効果的な学習方法を

解説、スピーキングやライティングのアクティビティを通して楽しく学習できる内容としました。参加者は 10 名程度でしたが、英語学習に熱心な学生が集まる結果となり、インタラクティブなイベントとなりました。参加者には、サンプルテスト冊子（2017 版）と ETS オフィシャルガイドなどを特典として配布しました。

（6）ネイティブっぽく話したい人集合！英語発音ワークショップ：平成 29 年 11 月 8 日（水）

全学生、全教職員を対象に、アドバイザーの専門知識と経験を生かした英語の発音に特化した本イベントが開催されました。前年度にも同様の英語発音ワークショップを開催しており、事後のアンケートで満足度は 5 段階評価で平均 4.7 でした。英語学習に特に関心の高い学生や教職員の参加が予測されるイベント内容でしたが、参加者は 28 名となり、盛況でした。

（7）必ずスコアがアップする！TOEIC® L&R 直前対策セミナー：平成 30 年 2 月 7 日（水）

春休み特別企画として開催された本イベントは、TOEIC®L&R の、2 月 10 日（土）に行われる予定の学内テストの直前対策、3 月 18 日（日）に行われる予定の公開テストの試験対策として提案したもので、英語学習アドバイザーが短期間でスコアアップにつながる部分のみをピックアップし、テクニックを教えました。春季の長期休業中の継続的な英語学習を促すねらいもあり、全学生、全教職員を対象として参加者を募集しました。その他のイベントと同様、プロの英語学習アドバイザーの指導を無料で受けることのできる講座で、大変好評を得ました。

アドバイザー紹介チラシ

イベントチラシ

発音ワークショップイベント

会場の様子

医学部キャンパスでの取り組み

国際交流センターは、山梨大学甲府キャンパスに設置されていますが、10 kmほど離れた医学部キャンパスには分室を設置し、教授 1 名を配置して、医学部学生の英語学習サポートや留学生支援などを行っています。その取組について、国際交流センター医学部分室・宮本和子教授の年次報告を掲載して報告します。

2017 年度　医学部の留学生に対する英語学習支援や国際交流に関する取り組み

国際交流センター医学部分室　宮本和子

１．医学部英語サポート・英語講座報告

１）前期

前期英語講座は例年どおり 15：50～16：20 英語相談、16：30～17：40 English Café、18：10～19：20 英語

講座という形で実施した。

初回 4 月 21 日(金)は本英語支援活動の周知を兼ねて、特別企画として「カンボジア Day」(16：30～17：40)を開催した。分室教員がカンボジア紹介の英語でのプレゼン、カンボジアクイズ、カンボジアコーヒーやカンボジア伝統菓子を楽しむなど、参加者が楽しみながら英語に親しめる企画とした。普段本活動に参加したことのない学生も多数参加した。28 日も English Café のみとし、気軽に立ち寄れる形にした。

本活動への参加学生は英語学習に意欲が高く、一定の英会話能力を持つ学生が多かった。留学経験者やこれから留学を考えているという学生が多かった。通常参加者は 2～3 名程度で、日によっては 0～1 名のこともあった。

分室教員のゼミ学生がカンボジアでの卒業研究と統合実習を実施する準備のためにアドバイザーから支援をいただくなど、特に英語を必要とする学生の支援としても有効であった。

写真 1-1：English Café 実施」風景

写真 1-2、3：カンボジア Day 開催風景

２）後期

今回初めての試みとして、英語サポート・英語講座を 2 時限目～昼休みに開催した。2 時限目を英語相談、昼休み（12：20～13：00）を English Café として実施した。

2 時限目の英語講座は受講する講義棟のない学生や教職員が活用していた。English Café も毎回 2～6 名程度の学生や教職員が参加していた。昼休みの開催は学生が気軽に立ち寄れる利点があった。しかし、一部の英語をより深く学びたい学生からは、夕方開催時のようなじっくり学べる講座への要望も上がった。

２．医学部留学生支援報告

１）医学部留学生オリエンテーションの開催

5 月 12 日に医学部留学生オリエンテーションを開催した。資料は前年度に英語校正をしたものを使用した。

ゴミの問題や留学生宿舎敷地内の整理整頓などいくつかの課題の解決についても周知や話し合いをおこなった。

２）医学部留学生日本語補講 E クラス

前期・後期ともに 3 名の学生が登録したが、各回の参加者はほとんどの場合 1～2 名であった。E クラス受講生は医学域の研究室に所属する博士課程学生が対象である。それぞれ実験等で時間調整をしながらの参加であった。E クラスの目的は日本語でのレポート作成支援であったが、受講生のニーズに合わせ日本語の医療用語の学習支援などを含め柔軟に対応している。ただし、受講生の日本語能力に差が見られ、基礎的な日本語能力の強化を望む留学生が参加する傾向にあった。担当教員は日本語教育の専門性がないため、日本語の基礎的学習支援については困難を感じることも多かった。

3）統計講座

医学教育支援センターの中本教授による統計講座が 10 月 18 日に開催された。主な内容とスケジュールは次の通りであった。

No.1　t-test　１０：４０ ～ １２：１０

No.2　One-way analysis of variance　１３：１０ ～ １４：４０
No.3　Non-parametric test１４：５０ ～ １６：２０

３．在日外国人医療研修会報告

医学部キャンパスにおいて、分室主催にて在日外国人医療研修会を以下の要領で開催した。

日時：2018 年 1 月 24 日(水)　18:00～19:30【17:30 開場】
場所：講義棟　1 階　1105 講義室
テーマ「今、在日外国人医療について考える」
講師 1：沢田　貴志　医師
特定非営利活動法人　シェア＝国際保健協力市民の会副代表／港町診療所所長
講師 2：山本裕子　保健師
同・シェア＝国際保健協力市民の会 在日外国人支援事業担当

医学科学生、看護学科学生、大学病院医師、看護学科教員、他大学教員(1 名)の 14 名が参加した。大学病院職員や医学部教員の参加も進めたく、医学部教授会や看護学科代議員会でも周知したが、主な参加者は学生であった。

研修会は講義のみでなく、事例検討、事例ロール・プレイや模擬通訳体験など参加型の充実した内容であった。質疑応答も積極的に行われ、参加した学生からは在日外国人医療について関心を深めた、医療通訳の必要性等がわかり非常に有意義であった等の感想が聞かれた。

写真 3-1　講師講義風景

写真 3-2　通訳模擬体験

写真 3-3　事例ロール・プレイ

写真 3-4　質疑応答

４．その他（医学部留学生サークルとの共同開催の留学生交流会など）

医学部学生サークル“IFMSA-Yamanashi”（国際医学生連盟 山梨支部）と分室との共催で IFMSA が受け入れている留学生 2 名との交流会を開催した。日本の学生が日本紹介のプレゼンテーションを、留学生 2 名がそれぞれの国の紹介をし、ゲームなども交え交流を深めた。

写真 4-1、2　交流会開催風景

（謝辞：2017 年度の活動の一部は「山梨大学・教育関連プロジェクト」の支援を受けて実施した。）

―国際交流センター医学部分室　宮本和子教授　平成 29 年度年次報告より

Ⅳ.　地域貢献

国際交流センターは、キャンパス内だけではなく、地域全体のグローバル化にも貢献したいと考えています。地元教育機関や自治体など、さまざまな団体のイベントや国際交流事業に留学生を派遣することは、地域貢献だけではなく、留学生に異文化交流の機会を与えることにもつながっています。

留学生の地域との交流

留学生にとって地域との交流は、自らの暮らす地域をよく知り親しむことで安心して暮らすことができるだけではなく、卒業後も山梨に留まり定住するという選択肢を広げるきっかけともなります。留学生と地域の方々との交流だけではなく、県や自治体の実施するイベントへの留学生の参加についてご報告します。

（1） 信玄公祭りへの参加：平成 29 年 4 月 8 日（土）

やまなし観光推進機構からの信玄公祭り甲州軍団出陣「三条夫人隊」への参加者募集案内を受けて、毎年、国際部国際企画課にて本学の留学生に参加者を募っています。甲府市中心部を会場に行われる信玄公祭りは例年、武田信玄公の命日（4 月 12 日）の前の金～日曜に盛大に開催され、土曜日の夕方からは、県内各地から 1,000 名を超える軍勢が舞鶴城公園に集結し、川中島に向け出陣する様子を再現しており、その規模は世界最大級とも言われています。この全国的にも有名な祭りに、戦国武士や侍女等に紛争して参加できるとあって、留学生にとっては大変貴重な日本文化体験となります。

平成 29 年度は 3 名の交換留学生が参加し、ドイツからの交換留学生が侍女、英国からの交換留学生が女武者、同じく英国（ウェールズ）からの交換留学生が旗持ちに、それぞれ紛争して祭りの行列に参加しました。本格的な衣装を身に着けた留学生たちは貴重な文化体験を喜び、笑顔で行列に参加して甲府の街中を行進しました。

侍女と旗持ちに扮した留学生

侍女と女武者に扮した留学生

行列参加時の様子

（2）山梨県副知事との意見交換会：平成 29 年 7 月 14 日（金）

柵木環 山梨県副知事と県幹部と本学留学生による意見交換会を行いました。これは、山梨県の国際化や魅力向上、外国籍の若者の定住に向けた施策の推進のため、山梨県が県内大学の留学生から外国人の就職や定住のニーズ等を聴き取る目的で、今年初めて企画されたものです。

今回は 8 か国・12 名の留学生が参加し、山梨県の魅力や留学先として選んだ理由、実生活での問題点、今後の就職や定住の意向をテーマに意見交換が行われました。参加した留学生からは、「勉強している専門分野があり、著名な先生がいらっしゃる」「自然が豊かで空気がきれい」「歴史名所が多く、文化や伝統を扱った行事が多い」との意見が出される一方、「公共交通機関が不十分で情報も入手しづらい」など、率直な声もありました。また、山梨での就職を考えている留学生からは、「県内企業の情報を収集するチャネルを多様化してほしい」「留学生向けのインターンシップや企業説明会を増やしてほしい」との声が聞かれました。県からは、県の紹介 PV を使い山梨のさらなる魅力や、交通や観光地に関する情報を掲載した外国人向けサイトについて説明されるなど、非常に有意義な意見交換会となりました。

意見交換会の様子

留学生の意見を傾聴する柵木副知事

（3）第 19 回　たべもの異文化交流会：平成 29 年 8 月 24 日（木）

医学部キャンパス玉穂国際交流会館中庭において、「たべもの異文化交流会」を開催しました。この交流会は、留学生と地域の交流活動を通じて互いの信頼関係を築くとともに、食を通して異文化への理解を深めることを目的に毎年開催されているものです。

留学生は、ベトナムの「揚げ春巻き」「チェー（豆などの食材を煮た甘いデザート）」や、中国の「餃子」「小龍包」「可楽鳥翅（手羽先のコーラ煮）」、「緑豆湯（緑豆のスープ）」などの郷土料理を振る舞い、母国の文化を紹介しました。また、山梨中央ロータリークラブや中央市国際交流協会をはじめ、中央市社会福祉協議会など地元のボランティア団体から、「海苔巻寿司」「そば・そうめんいなり」「なす田楽」「ところてん」「寒天」「三食餅」「抹茶」など幅広く日本の味をご提供いただきました。

さらに、日本の風物詩である餅つき、スイカ割り、盆踊りなども行われ、会場は大いに盛り上がりました。当日は地域の方々や留学生、本学職員など、子供からご年配の方まで約 300 人が参加し、各国の料理を堪能しながらひとときの異文化交流を楽しみました。

中尾医学域長よりご挨拶

料理をふるまう留学生たち

留学生も浴衣を着て盆踊りに参加

（4）甲府国際交流会館留学生と地域の皆様との交流会：平成 29 年 11 月 19 日（日）

甲府国際交流会館において、同館で暮らす留学生と岩窪自治会など地域の皆様との 14 回目となる交流会が開催され、甲府市長である樋口雄一氏、杉山俊幸理事らを含む約 100 名が参加しました。留学生は母国料理を作り、各国の食文化も合わせて紹介しながら参加者へ振る舞いました。ネパール、パキスタン、マレーシア、中国、ドイツ、英国、フランス、オーストラリア、ベトナム、韓国、タイの 11 ヵ国から、普段はなかなか味わうことのできない伝統料理 17 品が提供され、親睦が深まりました。

その後、メインイベントである餅つきでは、自治会の皆様による丁寧な指導を受け、芙蓉寮（寄宿舎）の学生も加わり、「よいしょ、よいしょ」の大きな掛け声の中で、留学生たちが餅つきを体験しました。つきたての餅を堪能した後は、留学生によるパフォーマンスや歌の披露、自治会の皆様による太鼓など余興もあり、心温まる一日となりました。

自国の料理を振る舞う留学生

もちつきを体験する留学生

樋口甲府市長によるもちつき

和太鼓を体験する留学生

練習した歌を披露する留学生

杉山理事よりご挨拶

（5）食の異文化交流事業：平成 29 年 11 月 26 日（日）／平成 30 年 2 月 4 日（日）

この事業は、『山梨県女性のつばさ連絡協議会「こうふ支部会」甲府市国際親交委員会』が毎年 2 回行っており、国際部国際企画課にて参加希望の留学生を募っています。平成 29 年度は、11 月に「ほうとうを作ろう」、2 月に「中華料理を作ろう」が行われました。山梨の郷土料理であるほうとうを作る 11 月の回では、本学より 9 名の留学生が参加しました。

実際に料理を作り、食べながら交流するこの会では、留学生は異文化体験ができるだけではなく、県内の留学生とも交流することができるため、留学生のとってこの会への参加は、地元を身近に感じ、交友を広げるきっかけとなっているようです。

（6）防犯パトロール：平成 29 年 12 月 13 日（水）

甲府警察署より防犯パトロールへの留学生参加募集があり、本年度は、マレーシア、インドネシア、パキスタンの 3 か国から 7 名の留学生が参加しました。これは、甲府警察署、甲府市役所、防犯団体、他大学の留学生とともに甲府市内を防犯パトロールするというもので、本学からも毎年、留学生が数名参加しています。当日は風が強く吹き、大変寒い中でしたが、留学生たちは午後 7 時頃から、甲府駅・甲府中心街の周辺を、他の参加者と共にパトロールしました。留学生にとって、甲府をよりよく知り、防犯意識を高めると共に、自らの暮らす街に親しみを持つ良い機会となりました。

小・中・高等学校への留学生派遣

山梨県内の小・中・高等学校より留学生の派遣依頼があった際、参加を希望する留学生を募集し派遣しています。派遣の要望は主に、国際交流・異文化交流のための授業や行事であることが多く、地域の教育機関の国際交流活動に貢献すると同時に、留学生の異文化体験や日本の教育機関見学の機会にもなっています。

（1）芦安小・中学校ハロウィンパーティへの留学生派遣：平成 29 年 10 月 31 日（火）

ハロウィンパーティーへの留学生派遣については、南アルプス市立芦安小学校より毎年依頼を受けており、平成 29 年度は 5 名の留学生を派遣しました。小・中学校ではグローバル教育の一環として行っている事業ですが、本学留学生にとっても、異文化や日本の学校教育に触れる良い機会となっています。

パーティーでは、小・中学生の代表によるウェルカムスピーチの後、参加した留学生が自己紹介を行い、インタビュービンゴゲーム、合同イングリッシュゲームなどで交流し、心温まる時間となりました。

中学生による芦安小・中学校の活動紹介

参加者集合写真

（2）山梨県立市川高等学校英語科「留学生との交流プログラム」への留学生派遣：平成 30 年 3 月 15 日（木）

市川高校英語科の平成 29 年度「社会参画体験事業」の一環として行われた「留学生との交流プログラム」への協力依頼を受け、本学に在籍する留学生を派遣しました。このプログラムは、市川高校が県内の外国人留学生を招き、英語で留学生と交流を行って異文化理解を深める機会を生徒に与えるとともに、より実践的な英会話力を習得向上させることを目指して行われました。本学からは 4 名の留学生が参加し、あわせて 10 名の山梨県内の留学生が参加しました。

プログラムは 2～4 時間目の時間帯を使って行われ、当日は、留学生が市川高校を訪れ、生徒と共にグループに分かれての町歩きをした後、グループでディスカッションを行いました。町歩きでは、高校近辺のお寺などを見学して、ディスカッションでは留学生の出身国の紹介なども盛り込まれ、留学生にとっても貴重な異文化交流の時間となったようです。

グループディスカッションの様子

町歩きで交流（右が本学留学生）

参加者全員の集合写真

Ⅴ.　国際交流関連データ

留学生在籍状況をはじめ、国際交流に関連する各種データをまとめて報告いたします。

国際交流センターと国際部の行事（平成 29 年度）

時期	行事
4 月	4 日　外国人留学生向けガイダンス・日本語プレイスメントテスト
	8 日　信玄公祭り甲州軍団参加
	10 日　新入生向け国際交流センターガイダンス（学部別）
	11・20 日　平成 29 年度ブリティッシュ・コロンビア研修説明会
	12 日　前期グローバル共創学習室・G-フィロス　イングリッシュ・カフェ開始
	13・18 日　平成 29 年度イースタンケンタッキー研修説明会
	19 日　G-フィロスセミナー「今の力を知ろう！TOEIC 模試」
	22～23 日　ホームステイ・ホームビジット
	22 日　TOEIC L&R IP 実施
	27 日　支える会バザー
5 月	8 日　グローバル共創学習室・G-フィロス全面オープン、教職員向けイングリッシュセッションオープン（英語・ドイツ語・ウェールズ語・日本語のカフェと、日本語学習サポート）
	10 日　G-フィロスセミナー「TOEIC　L&R 対策＆学習法」
	12 日　G-フィロス文化紹介イベント『European Food Culture-ヨーロッパの食文化』
	17 日・18 日　交換留学・海外研修プログラム帰国報告会
	18 日　甲府国際交流会館　芙蓉寮との合同消防訓練
	26 日　Mayville State University　学生訪問団来学
6 月	14 日　「トビタテ！留学 JAPAN」説明会
7 月	3 日　日本語・日本文化短期研修開始（ウェルカムパーティー）　～8 月 23 日まで
	5 日　英語学習・留学アドバイザー主催イベント『留学はじめの一歩』
	5 日～7 日　リュブリャナ大学訪問団来学
	12 日　G-フィロス夏祭り
	14 日　山梨県副知事と外国人留学生の意見交換会
	16～17 日　日本語・日本文化短期研修学生とグローバル人材育成プログラム参加学生との合同合宿
8 月	7 日　海外インターンシップマナー講座
	11日　イースタン・ケンタッキー大学交換留学派遣
	20 日　イースタン・ケンタッキー大学夏季語学・文化研修＋海外インターンシップ派遣　～9 月 23 日まで
	24 日　たべもの異文化交流会
	28 日～30 日　杭州電子科技大学代表団訪問
9 月	12 日　パテイン大学調印式
	15 日～21 日　学長のスロベニア訪問（リュブリャナ大学・スロベニア大使館）
	20 日～21 日　外国人留学生のための実地見学旅行（静岡県）
	22 日・28 日　外国人留学生向けガイダンス・日本語プレイスメントテスト
	29 日　ドンズー日本語学校（ベトナム）大学進学説明会
	30 日　ベトナム日本留学フェア（ホーチミン会場）
10 月	1 日　ベトナム日本留学フェア（ハノイ会場）
	26 日　外国人留学生向け防犯講話
11 月	1 日～4 日　学長の台湾訪問

	19 日　甲府国際交流会館　地域のみなさまとの交流会
	20 日　交換留学・海外研修プログラム帰国報告会
12 月	4 日　学長主催留学生懇談会
	12 日　G-フィロス　ホリデーパーティー
	13 日　「トビタテ！留学 JAPAN」説明会
1 月	10 日～12 日　西南交通大学代表団来学
	15 日～19 日　瀋陽薬科大学学生訪問団受入れ
2 月	4 日　アイオワ大学春季語学・文化研修＋海外インターンシップ派遣　～3 月 4 日まで
	11 日　レスター大学春季語学・文化研修派遣　～3 月 11 日まで
	27 日～28 日　留学生とチューターの協働交流合宿
3 月	11 日　杭州電子科技大学春季語学・文化研修＋海外インターンシップ派遣学生出発　～3 月 25 日まで

平成 29 年度留学生在籍状況（国別）　基準日:5 月 1 日

No.	国・地域	大学院生	学部生	研究生	特別聴講学生等	合計
1	中国　China	33	27	11	4	75
2	マレーシア　Malaysia	3	30	0	0	33
3	ベトナム　Vietnam	16	4	0	0	20
4	ネパール　Nepal	10	0	0	0	10
5	バングラデシュ　Bangladesh	4	0	0	0	4
6	タイ　Thailand	3	0	0	0	3
7	韓国　Korea	6	1	1	0	8
8	スリランカ　Sri Lanka	1	0	0	0	1
9	インド　India	1	0	0	0	1
10	インドネシア　Indonesia	4	0	0	0	4
11	ドイツ　Germany	0	0	0	2	2
12	イギリス　Great Britain	0	0	0	2	2
13	フランス　France	0	0	0	0	1
14	グアテマラ　Guatemala	1	0	0	0	1
15	オーストラリア　Australia	0	0	0	3	3
16	ルーマニア　Romania	1	0	0	0	1
17	ハンガリー　Hungary	0	0	1	0	1
18	スーダン　Sudan	1	0	0	1	1
19	パキスタン　Pakistan	1	0	0	0	1
20	モロッコ　Morocco	0	0	1	0	1
21	エジプト　Egypt	1	0	0	0	1
	計	87	62	14	12	175

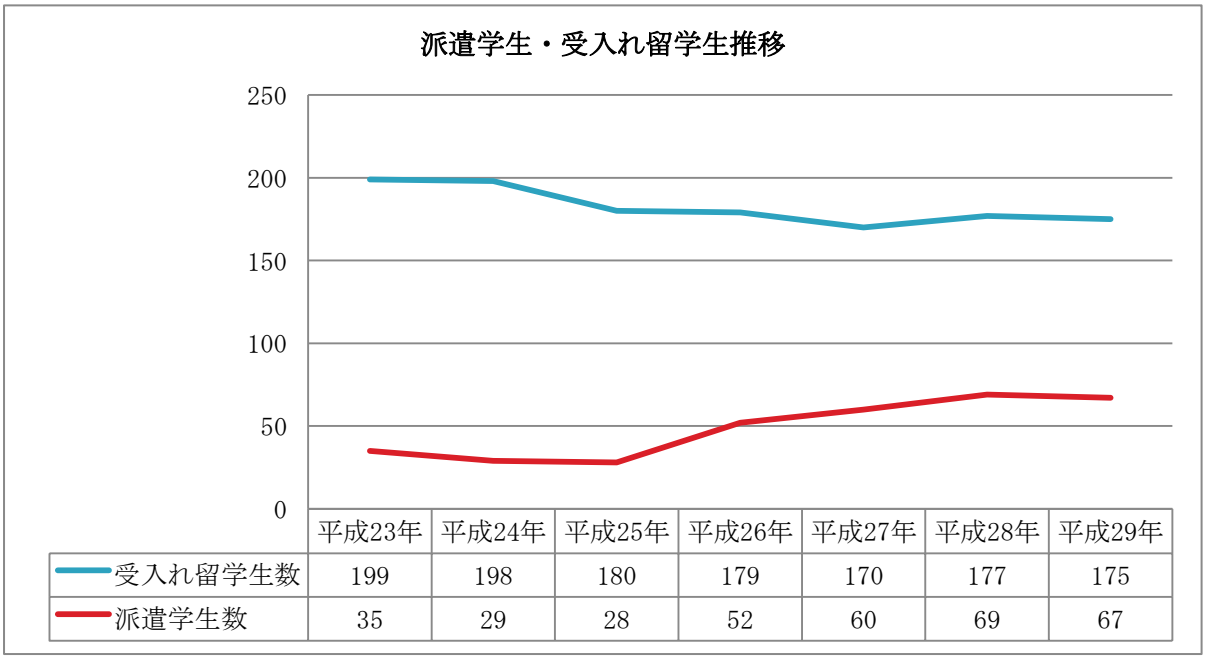
受入留学生の推移(過去 4 年間)　　基準日:5 月 1 日

	平成 26 年度		平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
国費留学生	0	19	0	20	0	17	0	16
政府派遣留学生	21	0	23	1	24	1	26	0
私費留学生	67	72	54	72	55	80	54	79
合計	180		179		170		175	

派遣留学生の推移(過去 4 年間)

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
交換留学	7	8	3	4
夏季・春季留学	45	52	66	63
(海外インターンシップ参加者)	(14)	(29)	(37)	(36)
合計	28	60	69	67

＜図:派遣学生･受け入れ留学生推移＞



派遣プログラム

プログラム名	留学先	実地時期	期間	募集人数	対象学部	備考
英語・文化研修	カナダ University of British Columbia	2017 年 8 月 7 日(日) ～8 月 27 日(日)	3 週間	20 名	全学	English for Global Citizens の英語講習に参加し、カナダ人家庭でのホームステイを通して英語に親しむ研修プログラムです。
	米国 University of Northern Iowa	2018 年 2 月 4 日(日) ～3 月 4 日(日)	4 週間	5 名	全学	ノーザン・アイオワ大学の The Culture and Intensive English Program (CIEP)に参加し、語学研修第1週目の週末にはアメリカ人家庭にホームステイをします。
	英国 University of Leicester	2018 年 2 月 11 日(日)～3 月 11 日(日)	4 週間	10 ～ 15 名	全学	英語学習はもちろん、英国文化を学ぶため、現地学生との交流や文化体験学習を行うプログラムです。英国人家庭にホームステイをします。
中国語・中国文化研修 海外インターンシップ	中国 杭州電子科技大学 テルモ杭州工場	2018 年 3 月 11 日(日)～3 月 25 日(日)	2 週間	10～15 名	全学	グローバル人材を目指すための早期キャリア教育も兼ねた研修プログラムです。前半の1週間は中国語学習に加え、現地学生との交流や文化体験を行います。後半の1週間は現地の日系企業でインターンシップを行います。
英語・文化研修 海外インターンシップ	米国 Eastern Kentucky University Toyotetsu America/ Lafayette High School　ほか	2017 年 8 月 20 日(日)～9 月 23 日(金)	5 週間	10～15 名	全学	グローバル人材を目指すための早期キャリア教育も兼ねた研修プログラムです。4週間の語学研修中、午前中はレッスン、午後はフィールドワークとして現地大学で様々な交流イベントに参加します。語学研修中・研修後の計5日間は現地の企業、または教育機関でインターンシップを行います。
	米国 University of Iowa	2018 年 2 月 4 日(日)～3 月 4 日(日)	4 週間	12 名	全学	英語学習に加えて、アイオワ大の学生と相部屋の寮で過ごす現地学生との交流が特徴となる研修プログラムです。 また、語学研修期間終了後に、企業でのインターンシップも実施する可能性があります。

奨学金受給者数(私費外国人留学生)

	平成 26 年度		平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
学習奨励費	5	4	5	3	2	5	2	5
布能奨学金	4	6	–	–	—	—	—	—
（財）ロータリー米山記念奨学会	1	2		3	1	1	1	1
朝鮮奨学会								1
佐川奨学会								
(財)共立国際奨学財団						1		
(公財) 佐藤陽国際奨学財団			1					
日本国際教育支援協会		1						
日揮・実吉奨学会	1	1	1	1		1		1
大塚敏美育英奨学財団				1				

新規協定締結校（平成 28 年度）

		国名・地域名 Country/Region	大学等名　Institution	締結年月日 Agreement date
大学間		中　　国 China	内蒙古医科大学 Inner Mongolia Medical University	2016.9.15
大学間		タ　イ Thailand	タマサート大学 Thammasat University	2016.4.2
大学間		ベトナム Vietnam	ホーチミン市校科学大学 VNUHCM－University of Science, Vietnam	2016.10.28
部局間	医学域	タ　イ Thailand	コンケン大学医学部 Faculty of Medicine, Khon Kaen University	2016.7.13
部局間	医学域	中国 China	揚州大学医学部 Yangzhou University School of Medicine	2016.10.31

新規協定締結校（平成 29 年度）

		国名・地域名 Country/Region	大学等名　Institution	締結年月日 Agreement date
大学間		中国・台湾 Taiwan	国立台湾科技大学 National Taiwan University of Science & Technology, NTUST	2018.2.1
大学間		中国・台湾 Taiwan	国立陽明大学 National Yang-Ming University	2018.2.6
大学間		マレーシア Malaysia	マレーシアペルリス大学 University Malaysia Perlis	2017.5.18
大学間		マレーシア Malaysia	マレーシア・パハン大学 Universiti Malaysia Pahang	2017.10.28
大学間		マレーシア Malaysia	マレーシア工科大学 Universiti Teknologi Malaysia	2017.11.8
大学間		ミャンマー Myanmar	パテイン大学 Pathein University	2017.9.12
大学間		スロベニア Slovenija	リュブリャナ大学 University of Ljubljana	2017.9.18
大学間		トルコ Turkey	アンカラ大学 Ankara University	2017.12.6
部局間	医学域	中国・台湾 Taiwan	台北栄民総醫院 Taipei Veterans General Hospital	2018.2.7
部局間	国際交流センター	アメリカ合衆国 United States	ノーザンアイオワ大学 University of Northern Iowa	2017.9.20

JSPS 国際交流事業申請状況

	平成 26 年度		平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
外国人特別研究員(一般)	3	1	2	0	3	0	9	0
外国人招へい研究者（長期）			1	0	1	0		
外国人招へい研究者（短期）			1	0	1	0	1	0
外国人招へい研究者（短期）第二回	2	1	2	0	2	1		
研究拠点形成事業　Ａ					1	0		
国際研究集会								
二国間交流事業（９月）	1		2	0	5	1	6	1
二国間交流事業（２月）	1	1	5	1				
外国人特別研究員（欧米短期）	1	1	1	0				
論文博士号取得希望者支援			1	0			0	0

JSPS 研究者養成事業申請状況

	平成 26 年度		平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
ＤＣ１	3		2	1	3		6	1
ＤＣ２	5	2	6	1	3		5	1
ＰＤ	1	1	3	1	4	2	2	0
ＲＰＤ					2		1	0
ＲＲＡ								
海外特別研究員	1		1	1	2	1	1	0

その他国際交流事業申請状況

	平成 26 年度		平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
さくらサイエンス				1	1	1	2	1
JASSO（短期派遣）	2		2	1	1		1	1
JASSO（短期受入）	1	1			1		1	
JASSO（双方向）	1	1			1		1	